

353  
2  
514



0044960-000

特212-474

具体化せる小学国史教材と教授法

西亀正夫・著

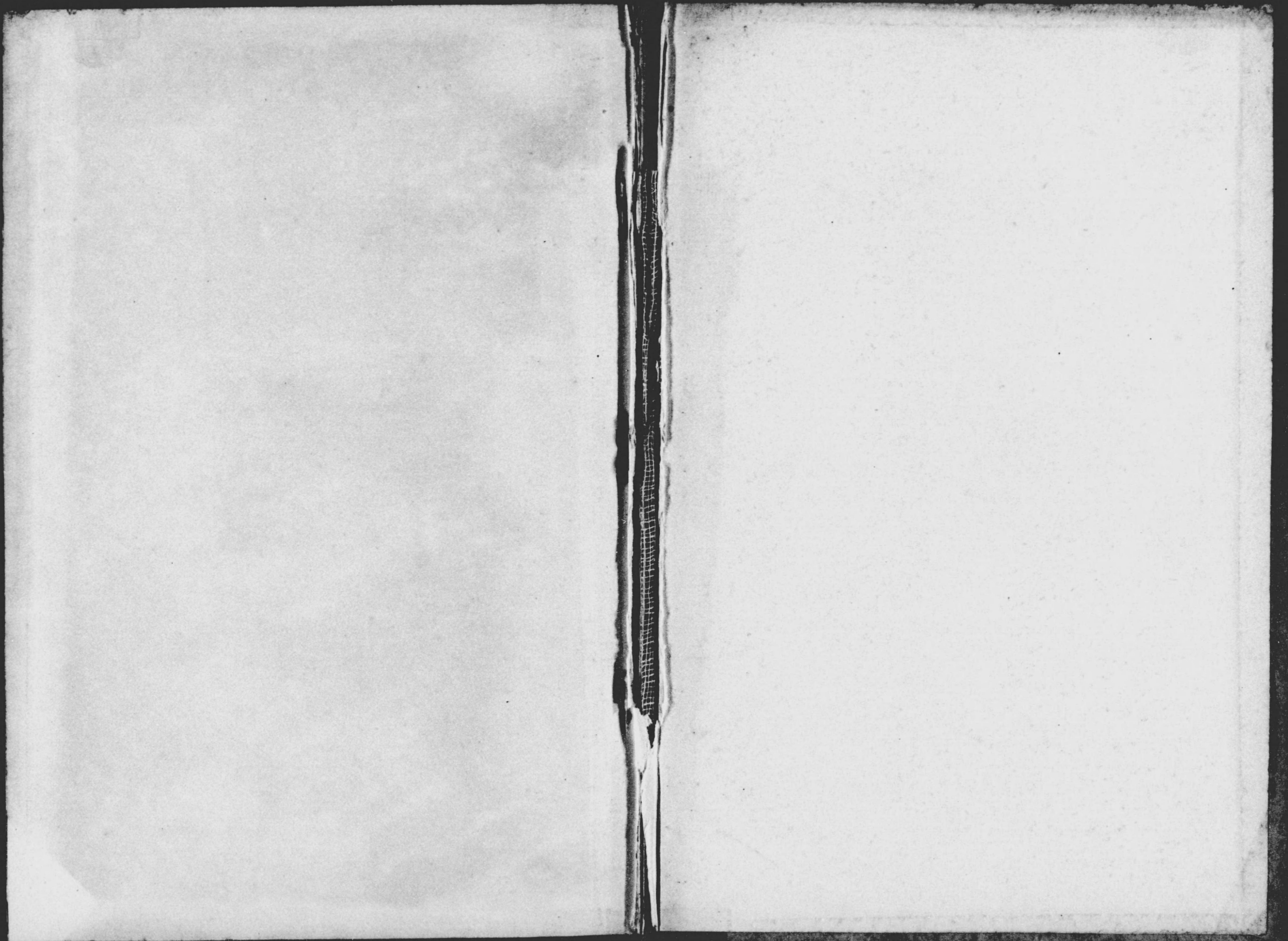
厚生閣

昭和9

AHF

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月23日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。







特 212  
474

3 世化体具  
法授教と材教史國學小



著夫正龜西  
行叢閣生厚



具本計世  
小學國史材教史國學小



西學五夫著  
叢生閣



## 序言

- 一 國史の参考書は非常に多い。それは教師の實力を養ふためには必要  
缺くべからざるものである。併しあまりに詳しいと教材の研究には骨  
が折れて急場の間に合はない。一時間の教材の下調べに數時間を要す  
る様なことは堪へ難い負擔である。
- 二 國史の教師用書も出來てゐるが、その記述は必ずしも教材に即してゐ  
ないし、澤山の原據を擧げてゐるのは結構であるが、これを讀むだけでも  
中々の骨折である。
- 三 教科書の記述は多くは簡單であり抽象的であるから、これを具體化す  
ることは最も必要である。「ある時、ある人が澤山の兵をつれて、度々戦つ  
て、高い官位に上つて」など、云つたのでは興味もなければ感銘も得ら  
れぬ。又兒童は必ず「誰が、何年間、何處で、どんなに戦つて、どんな官位に  
上つたか」といふ様な疑問を起すものである。



著者小照



四 史實の穿鑿は必ずしもよくないが、兒童の疑問は一應解いてやらねばならぬ。而もかうした簡単な具體化の材料も、これを普通の参考書によつて検索しようとするれば、時として非常な困難に遭遇する。

五 已に一通りの修養を積んだ教師には、浩瀚な参考書は氣の向いた時に落付いて讀むためにのみ必要である。教案を作らんとする時、又は教室に臨まんとする十五分前、一寸見て記憶を喚び起し教授のために直接必要なだけの、コンデンスした知識が一目でわかる様なものは、たゞ自分で作つたノートの外には無い。

六 本書は實にかゝるノートの役目をもつて生れたものである。たゞ著者淺學にして多くの誤謬を盛つてあるであらうことを恐れる。幸にして實際家諸賢の高教を得て他日の完璧を期したいと思ふ。

昭和九年春

著者誌

# 目次

御歴代表 (一)	
第一 天照大神	一
第二 神武天皇	六
第三 日本武尊	二〇
第四 神功皇后	二五
第五 仁徳天皇	二九
第六 聖徳太子	三三
第七 天智天皇と藤原鎌足	三五
第八 天智天皇と藤原鎌足 (つゞき)	三
第九 聖武天皇	四〇
第十 和氣清麻呂	四三
第十一 桓武天皇と坂上田村麻呂	四四
第十二 弘法大師	四七
第十三 菅原道真	五〇
第十四 藤原氏の専横	五三
第十五 後三條天皇	五七
第十六 源義家	六〇
第十七 平氏の勃興	六三







皇極天皇 一〇一—一〇五	舒明天皇 一〇九—一一二	推古天皇 一五七—一五八	崇峻天皇 一五七—一五九	用明天皇 一五七—一五九	敏達天皇 一五七—一五九	欽明天皇 一五七—一五九	宣化天皇 一五七—一五九	安閑天皇 一五七—一五九	繼體天皇 一五七—一五九	武烈天皇 一五七—一五九
孝謙天皇 一四九—一五〇	聖武天皇 一四九—一五〇	元正天皇 一五五—一五八	元明天皇 一五七—一五九	文武天皇 一五七—一五九	持統天皇 一五七—一五九	天武天皇 一五七—一五九	弘文天皇 一五七—一五九	天智天皇 一五七—一五九	齊明天皇 一五七—一五九	孝德天皇 一五七—一五九
陽成天皇 一五八—一五九	清和天皇 一五八—一五九	文德天皇 一五八—一五九	仁明天皇 一五八—一五九	淳和天皇 一五八—一五九	嵯峨天皇 一五八—一五九	平城天皇 一五八—一五九	桓武天皇 一五八—一五九	光仁天皇 一五八—一五九	稱徳天皇 一五八—一五九	淳仁天皇 一五八—一五九

光孝天皇 一四四—一四七	宇多天皇 一四七—一五〇	醍醐天皇 一五〇—一五三	朱雀天皇 一五三—一五六	村上天皇 一五六—一五九	冷泉天皇 一五九—一六二	圓融天皇 一六二—一六五	花山天皇 一六五—一六八	一條天皇 一六八—一七一	三條天皇 一七一—一七四	後一條天皇 一七四—一七七
後朱雀天皇 一六六—一七〇	後冷泉天皇 一七〇—一七四	後三條天皇 一七四—一七八	白河天皇 一七四—一七八	堀河天皇 一七四—一七八	鳥羽天皇 一七四—一七八	崇徳天皇 一七四—一七八	近衛天皇 一七四—一七八	後白河天皇 一七四—一七八	二條天皇 一七四—一七八	六條天皇 一七四—一七八
高倉天皇 一八〇—一八四	安徳天皇 一八〇—一八四	後鳥羽天皇 一八〇—一八四	土御門天皇 一八〇—一八四	順徳天皇 一八〇—一八四	仲恭天皇 一八〇—一八四	後堀河天皇 一八〇—一八四	四條天皇 一八〇—一八四	後嵯峨天皇 一八〇—一八四	後深草天皇 一八〇—一八四	龜山天皇 一八〇—一八四



る せ 化 體 具  
法 授 教 と 材 教 史 國 學 小

[用 年 五 常 尋]

御 歷 代 表

六	五	四	三	二	一
後醍醐天皇 一三七—一九九	花園天皇 一六八—一六九	後二條天皇 一六二—一六六	後伏見天皇 一六一—一六二	伏見天皇 一五一—一六二	後宇多天皇 一四四—一四七
二〇	一〇	〇	九	八	七
後花園天皇 二〇八—二二四	稱光天皇 二〇七—二〇八	後小松天皇 二〇五—二〇七	後龜山天皇 二〇四—二〇五	長慶天皇 二〇六—二〇四	後村上天皇 一九九—二〇六
		一六	一五	一四	一三
		正親町天皇 三二七—三三六	後奈良天皇 三二六—三三七	後柏原天皇 三二〇—三二六	後土御門天皇 三二四—三二〇



【天照大神】

天照大神は伊弉諾尊・伊弉冉尊の御子である。女神であつたが御徳極めて高く、光華明彩天地四方を照徹せられたので大日靈貴尊とも申し上げた。二人の御弟があつて、月讀尊は御徳が高かつたが、素戔嗚尊は狂暴であつた。天照大神は高天原を治められたが、高天原が何處であるかは明かでない。

【稻・麥など】

畑には粟・稗・麥・豆を、水田には稻を植ゑしめられた。これが所謂五穀であつて、國民の食料を先づ安定せしめられたのである。又養蠶を始めて衣服の料を得る道をも教へられた。

【たびくあらあらしき行】

狂暴にしてその領國大八州を治めず、青山は枯山となり、海川は乾固し、人民皆天死した。又高天原に來られてからは田の畔を毀ち、灌漑用の溝を埋め、播種した田に更に又種を播き、田の中に申をさしなどして天照大神の農耕の業

尋常小學國史上卷より

尋常小學國史 上卷

第一 天照大神

天皇陛下の御先祖を天照大神と申す。大神は御徳きはめて高き御方にて、はじめ稲麥などを田畑にうゑさせ、又蠶をかほせて、萬民をめぐみたまへり。大神の御弟に素戔嗚尊と申す御方ありて、たびくあらあらしき行ありしが、大神はつねに尊を愛して、之をがめたまはざりき。しかるに尊大神の機屋をけがされしかば、大神つひにたへかねたまひて、天の岩戸に入り、岩戸をたてて其の中にかくれたまへり。

を妨害せられた。又大嘗祭即ち新穀を供へて神を祭るための新殿を汚したりなどせられた。

【機屋をけがされ】

大神が神衣を織らせられた齋服殿の蓑を穿つて屋根に穴をあけ、そこから天斑馬の皮をはいだものを投げ込まれた。かうしたあまりの亂行に大神も遂に堪へ兼ねられて天岩戸に閉居せられたのである。



【八坂瓊曲玉・八咫鏡】

八坂瓊曲玉は玉祖命の作る處である。多くの勾玉を一本の緒に貫いて長く連ねたものである。八咫鏡は石凝姥命の作る處で、天安河の河上の天堅石と、天金山の鐵とをとつて作つた。ヤタとは手にあまるほど大きいといふ意味で形が八花形だといふ意味では無い。

【神樂をはじめ】

天香山の神を根こぎにして、その上の枝に曲玉を、中の枝に御鏡を、下の枝には青と白との和幣をかけて、これを天太玉命が捧げ持ち、天兒屋根命は祝詞を申してお祈りになると、天鈿女命はマサキノカヅラを頭にまきつけ、ヒカゲノカヅラを褌にし、笹の葉を持つて足を踏みならし、胸をうちひろげて乳を出して舞はれたので、その様が頗るおかしかつたといふ。

【何事ぞとあやしみ】

大神岩戸を少し開いて『自分が岩屋にかくれてから、高天原も闇となり、葦原中國も闇であるといふに、何を嬉し

さうに笑ふか」と仰せられた。天鈿女命は『あなた様にもまして貴い神様がゐらせられるので歡んでゐます』と申し上げた。

【神々たち】

そこで天兒屋根命と天太玉命とが例の神をさし出したら、大神の御姿がうつた。そこへ兼ねて戸の側に隠れてゐた手力男命が、すかさずお手をとつたのである。

あまたの神々これを憂へ、大神を出したてまつらんとめ岩戸の外にあつまり、八坂瓊曲玉・八咫鏡などを神の枝にかけ、神樂をはじめたり其の時天鈿女命のまひの様をかしかりしかば、神々の笑の聲は天地を動かすばかりなり。大神、これは何事ぞとあやしみたまひて、少し岩戸を開きたまひしかば、神々たちには神をさし出せしに、大神の御すがた其の枝にかけたる鏡にうつれり。大神いよ／＼ふしぎにおぼしめして、少し戸より出てたまひしを、かたはらにかくれるる手力男命御手を取りて出したてまつり、神々聲をあげてよろこびあへり。

尋常小學國史上巻より

【神々に追はれ】

高天原では八百萬の神々の會議によつて、素戔鳴尊の罪を數へ、髪及び鬚をきり、手足の爪を抜いてこれを高天原から追放することになつた。そこで尊は天降つて出雲國に行かれたのである。

【八岐の大蛇を斬り】

これは大蛇では無くて兇賊を討滅したのだとも云ふが、強ひて神話を事實化せなくてもよからう。足名椎・手名椎の老夫婦がその女稻田姫の大蛇に喰はれんとするのを救いてゐたので、尊は八つの桶に酒を入れ、大蛇がそれに頭を入れて酒を呑んで酔つた處を、尊は十握劍を抜いて斬り給ふたといふ。(國語五の三) 大蛇たいぢ

【平けたまひ】

大國主命は土地を開いて農耕をすゝめ、交易をひらき、又醫藥の方や禁厭の法などを定めて國民を愛撫せられたので中國地方一帯は早く開化に赴き、命の威名は四方に輝いて朝鮮半島の方からも天日槍はその風を慕つて歸化するとい

尋常小學國史上巻より

素戔鳴尊は神々に追はれて、出雲にくだりたまへり。尊は鏡川の川上にて八岐の大蛇を斬りて、人々をすくひたまふ。此の時大蛇の尾より一ふりの劍を得、これはふしぎの劍なりとて、大神にたてまつりたまへり。之を天叢雲劍と申す。素戔鳴尊の御子に大國主命と申す御方ありて、出雲地方を平けたまひしが、其の他の地方には、あるものどもなほ多かりき。大神は御孫瓊瓊杵尊をくだして、此の國をさめしめんとおぼしめし、まづ使をつかはして、大國主命の平けたまへる地方をたてまつらしめたまひしに、命よるこびて其の仰にしたがひたまへり。大神瓊

ふ有様であつた。(國語四の五) 白ウサギ

【使をつかはし】

最初に天穗日命を遣はされたが三年を経ても復命しない。次で天若彦を遣はしたが、これも歸つて來ないので、終に經津主命・武甕雷命を降された。そこで大國主命は大義をわきまへ、國土を奉還して杵築宮に退かれた。これが出雲大社の起りである。(國語十二の二) 出雲大社



【告げたまはく】

日本書紀によると「豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は是わが子孫の王たるべき地なり。爾皇孫就いて治めよ。寶祚の隆えんこと天壤とともに窮なるべし」とある。これ實にわが建國の大本をお示しになつたもので、萬世一系の皇統、天壤無窮の皇運は、實にこゝに始まつた。これ萬國無比のわが大日本帝國の基礎である。教育に關する勅語に「皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」とあるのもこのことである。(修身五の一)

【皇大神宮】 (挿繪)

皇大神宮は八咫鏡を御神體として天照大神をまつる處で、豊受大神の宮を外宮といふに對して内宮とも申し上げる。全部檜の白木造で、何等の裝飾も施して無いので、實に森嚴を極める。廣大幽靜なる神域には、老杉古檜枝を交へて日光を遮り、五十鈴川の流れば水深く清く、參拜する人々

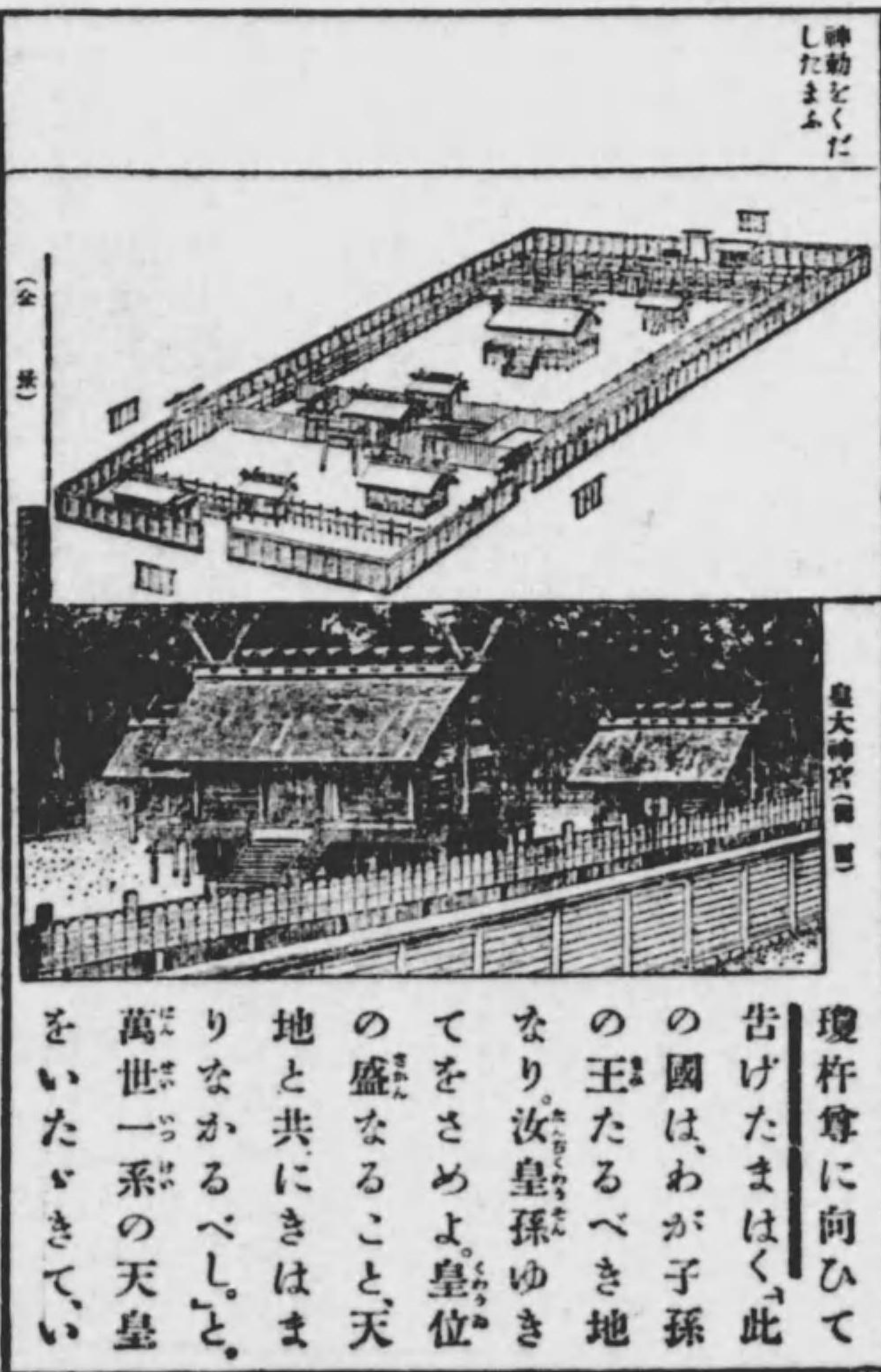
【三種の神器】

八咫鏡は天岩屋戸の變に石凝姥命の作る所で、崇神天皇の時神威を畏れ給ひて倭の笠縫邑に遷され、垂仁天皇の朝から五十鈴川上に鎮座あつて今日に至つてゐる。而して今宮中賢所には崇神天皇の時模造せられたものが祀つてある。八坂瓊曲玉は同じく岩屋戸の變に玉祖命の作る所で、壇浦で一度海中に沈んだが浮ひ出でられ、今も宮中に安置せられてゐる。天叢雲劍は素戔嗚尊の獻せられたもので、鏡と共に笠縫から伊勢に遷されてあつたが、日本武尊がこれを佩きて東征せられ、草薙劍の名を得て尾張に祀られた。即ち今の熱田神宮である。崇神天皇の時模造せられた劍は壽永の役に壇浦の海底に沈んで遂に得られず、別の劍を以てこれに代へられたのが今宮中に安置されてゐる。

【あまたの神々】

瓊杵尊に従つて天降られた神々に五部神といふのがある。天兒屋根命・太玉命・天鈿命・石凝姥命・玉祖命の五神で尙この外に天忍日命と天津久米命とは弓箭をとり刀劍を

は悉く心を清め魂を洗つて、大神の御德をお慕ひ申し上げるのである。神殿は二十年毎に改築し奉ることになつてゐる。これを式年遷宮といふ。(修身三の十)



尋常小學國史上卷より

瓊杵尊に向ひて告げたまはく、此の國はわが子孫の王たるべき地なり。汝皇孫ゆきてをさめよ。皇位の盛なること、天地と共にきはまりなかるべし。と。萬世一系の天皇をいたゞきて、い

尋常小學國史上卷より

つゝの世までも動きなきわが國體の基は實にこゝに定まれり。大神はまた八坂瓊曲玉八咫鏡天叢雲劍を瓊杵尊に授けたまひき。之を三種の神器といふ。尊は之を奉じ、あまたの神々をしたがへて日向にくだりたまへり。これより神器は御代々の天皇及び國民の深くうやまひたましとしたまへり。大神の神器を尊に授けたまひし時、此の鏡をわれと思ひて、つねにあがめたまつれ。と仰せられたり。されば此の御鏡を御神體として大神をまつれる伊勢の皇大神宮は、御代々の天皇及び國民の深くうやまひたま

佩きて陪せられ、その他尙多くの神々が各々の職を以て従ひ奉つたのである。

【日向にくだり】

日向の高千穂峯に降り、吾田の笠狭崎に到つて宮室を營み天位を定められた。これ等の地は今その所在が明かでない。日向の五箇瀬川上流に高千穂があり、又霧島火山群中にも高千穂峯がある。



【日向にましく】

瓊瓊杵尊は笠狭碕にいましたが、彦火火出見尊以後は高千穂宮にましくたといふ。その高千穂宮は霧島火山の麓にあることは確からしいが、どの邊であつたかは詳かでない。今霧島神社のある處だらうともいふ。

【東の方には】

當時九州の大部は王化を被つてゐたが、東國にはまだ服しないものがあつた。邑に君あり、村に長あり、各疆を分ちて相凌轢するに至れり」とあるから、云はゞ土人の中の強いものが酋長となつて互に隣村と相争ひ、そのため人民は塗炭の苦みを嘗めて居たものであらう。『わるものを平げる』とは人民を苦める酋長どもを平定することであつて、決して今日云ふ所の領土の擴張や敵國の征服では無い。『人民を安んずる』ことが主目的なのであつた。滿洲の軍閥を追ひ拂つて三千萬の人民に樂土を建設せしめたのも同じ趣旨である。

【多くの年月】

日本書紀によると日向御發足は紀元前七年十月で、浪速にお着きになつたのが前三年二月であるから、足かけ五年を費されたことになる。併し古事記によると岡田宮に一年、多祁理宮に七年、高島宮に八年とあるから、少くとも十六年を費されたことになる。勿論何れが正しいかわからないが、單なる征服戦でなくて人民を懐けて行かれたのだから、長年月を要せられたのは當然と思はれる。

つれる御宮なり。

第二 神武天皇

瓊瓊杵尊より御二代をへて神武天皇の御時にいたるまでは御代々日向にましくつてわが國をささめたまひしが東の方にはなほわるものどもはびこりて、甚ださわがしかりき天皇は之を平けて、人民を安んぜんとおぼしめし、舟いくさをひきゐて日向を發し、大和に向ひたまひ、多くの年月をへて浪速につきたまへり。天皇河内より大和に入らんとしたまひしに、わるもの

尋常小學國史上巻より

【長髓彦】

長髓彦は大和の登美(生駒郡北倭村)の酋長である。早くからこの地方に降られた天神の御末饒速日命を奉じて軍を起し、皇軍に抗した。皇軍は孔舍衛坂(生駒山中)に向つたが利あらず、皇兄五瀬命は流矢に中られた。そこで『日向に向つて戦ふのは不吉であるから、道をかへ迂回し日を負つて戦はん』と仰せられて海路紀伊に向はれた。

【飛行く鳥】

道無き山中に行き悩んで居られると、或夜夢に天照大神があらはれ給ふて天皇に訓へられるには『朕今八咫鳥を遣はすからこれを郷導者とせよ』と、果して八咫鳥が空から翔け降つた。そこで天皇は非常にお喜びになつて、その飛び行く方へお進みになつて、無事吉野川筋を経て菟田(大郡國)に達し給ふた。

【神武天皇御東征圖】

圖中『豊』は今の豊前・豊後、『宇沙』は宇佐、『岡田ノ宮』は福岡縣遠賀郡の海岸、『阿岐』は安藝で、『多祁理宮』は一

尋常小學國史上巻より

もののかしら長髓彦といふもの勢強、御軍をふせぎて入れたてまつらずよりて天皇道をかへて紀伊より大和に進まんとしたまふ。其のあたりは山高く谷深く道なきところも多かりしが、天皇は之をものともしたまはず、飛行く鳥をしるべとし、兵士をばけまし、道をひらかせて、つひに大和に入りたまへり。

神武天皇御東征圖

名埃ノ宮と云つて今廣島市の東郊府中村にある。又『高島ノ宮』の所在には數説あるが、兒島郡甲浦村宮浦ならんといふ。『浪速』は今の大阪市附近、『紀』は紀伊、『倭』は大和である。『男ノ水門』は紀伊水道の様になつてゐるが、今の和歌山市の西北海草郡湊町の地であらう。高島宮附近で今の兒島半島が當時離れ島になつてゐたことは確實である。地理附圖と比較對照せしめるがよい。



【しだいにわるものどもを平げ】

天皇は道をかへて紀伊に向はれてからも、沿岸各地に於て土賊を誅し、大和に入られてからは菟田に勢を振つてゐた兄猪・弟猪の二酋を召された。ところが弟猪は歸順したが兄猪は命に應じなかつたのでこれを誅せられた。

それから國見丘(大和・伊勢の境にある山)に八十梟師とて多數のわるものが居たのでこれを討ち平げ、次で磐餘邑(磯城郡)の兄磯城・弟磯城を召されたところが、弟磯城は歸順したが兄磯城は聴かなかつたので、奇計をめぐらしてこれを斬り、遂に進んで長髓彦を討たられた。

斯の如く天皇は常にその地の酋長を召し出しては歸順をさせられ、命を奉じないものは已むを得ず討つといふ方法をとられた。今日滿洲に於てわが軍が匪賊を討伐してゐるのもこれと同じ方法である。

【金色の鷄】

皇軍長髓彦を討つたが、賊の勢頗る盛にして連戦して克たず頗る苦戦であつた。時に金鷄の瑞があつた。即ち忽然と

して天地暗闇の如くなり、風は荒れ電が降つて来て物凄い景色となつた。その時何方よりもなく一羽の金色の鷄が飛んで来て天皇の御弓の上に止まつた。するとその光が電光の様で、賊どもは眼をあげてゐることが出来ず、戦ふ力も失せてしまつたので忽にして平定することが出来た。明治になつてから定められた金鷄勳章は實にこの由來に基いたものである。(國語五の五) (金鷄勳章)



尋常小學國史上卷より

【長髓彦もついでころされ】

長髓彦は天神(瓊瓊杵尊の御兄ともいふ)の裔饒速日命を奉じてゐたのであるが容易に降服しなかつた。そこで饒速日命は順逆を説いて降服をすゝめたのであるが、頑迷で容易に聴かないので、遂に命は長髓彦を誅し、衆を率ゐて天皇に歸順してしまつたのである。

【畝傍山の東南】

長髓彦討滅後尙各地の土賊を討たれたが、やがて大和地方が全く平定したので、紀元前二年三月に詔を下して、畝傍山の東南樞原の地を相して宮殿を營ましめられ、翌年九月には媛蹈鞬五十鈴媛命を正妃とせられ、その翌年正月朔日に新築の宮殿に於て即位の禮を行はせられた。それが今日の曆に換算して二月十一日に相當するのである。その地は今の樞原神宮のあるあたりであらう。

【御即位の禮】

道臣命は大伴部を率ゐ、大久米命は久米部を率ゐて宮門を衛り、可美眞手命は内物部を帥ゐて矛・盾を立て備へ、天

尋常小學國史上卷より



【紀元節】

紀元節は明治六年の制定である。近頃外國の眞似をしてこの日を建國祭なども云つてゐる。



【鳥見山】

今の大和城上部にあつて、長髓彦の居た登美とは別の處である。ここに靈囃を立て、皇祖天神を祭られた。

【いよく固くしたまひ】

中央政府の組織を確立せられると同時に、地方には國造・縣主などを置いて概ね東征の功臣をこれに任じ、又楮や麻などを植ゑ広められ、阿波の忌部の民を東國なる今の安房に移住せしめられた。

かくて御在位七十六年、御功業全く成つて崩御あらせられた。そこで畝傍山の東北に葬りまつたのである。

【東西の國々】

當時皇威が何れまで及んで居たか勿論明瞭でない點もあるが、大體に於て近畿・中國・東海の各地はよく治まつて居た様である。九州のことは神武天皇の時宇佐の國造を定め津島(今の對馬)に縣直を置かれたこと以來、景行天皇の時の熊襲の反まで古史に何も見えないから、或は王化が普ねく及んで居なかつたのであらう。又東方は奥羽地方に

アイヌ族が住んで居て、極めて野蠻で性質も慥悍、全く皇威に服してゐなかつた。

【時々そむき】

崇神天皇の時四道に將軍を派遣せられ、又豊城入彦命をして東國を鎮撫せしめられた。それから景行天皇の熊襲御親征もあつた程で、度々各地に反亂を起すものがあつたのである。

御先祖の神々を鳥見山にまつりたまふかくて天皇は天照大神の定めたまひしわが帝國の基をいよく固くしたまひてかくれたまへり其のかくれたまひし日にあたりて行はる、御祭は毎年四月三日の神武天皇祭なり。

第三 日本武尊

神武天皇大和にうつりたまひしより後は、天皇の御威光おひよ、四方にひろがりしも都を遠くはなれたる東西の國々には、あるものどもなほ少からず時々そむきて、人民をなやましたり。

尋常小學國史上巻より

【熊襲】

九州の南部はずつと古くから熊襲國と云つてゐたもので、後にその地方に住む人種の名となつたものであらう。併しこれが大和民族の一派であるか、それとも全く別の民族であるかは明かでない。朝鮮や支那と交通して大和の朝廷に對しては半獨立の姿であつたものと思はれる。東方の蝦夷とは違つて文化も進み、經濟力も豊かであつたらしい。

【御生れつき】

景行天皇の詔の中に「朕、汝の人と爲りを見るに、身軀長大にして容姿端正、力能く昂を上げ、猛きこと雷電の如く向ふ所前無く、攻むる所必ず勝つ。即ち知る、形は則ち我が子なれど實は則ち神人たり」とある。如何にもお生れつき勇猛な資質でおはしましたことが想像せられる。

【九州に至りたまふ】

景行天皇九州御親征の御道筋はよくわかつてゐるが、日本武尊の熊襲征伐は、古事記にも日本書紀にもその往復の御道筋を書いてゐない。従つて川上梟師を刺されたといふ場

尋常小學國史上巻より

九州の熊襲國に於ては、景行天皇の御代に至り、九州の南の方にすめる熊襲をむきたれば、天皇御子小碓尊をつかはして之を討たしめたまふ。尊は御生れつきくわつはつて、御力も強くまします。しかば此の頃御年わづかに十六なりしも、仰にしたがひて、たゞちに九州に至りたまふ。熊襲のかしら川上のたけるは、かくとも知らず、人々と共に酒を飲みてたのしみたり。尊は御髪をとき、少女のすがたになりて、たけるに近づき、劔をぬきて其の胸をさしたまへり。たけるはおどろきて、日本一の強き御方かな。これよりは日本武と名のりたまへ、と申して、息たえた。り、よりて尊は御名を改め、めてたく大和にかへりたま

所も、今の何所にあたるか明かでない。傳説の不備に基くので已むを得ない。

【たけるに近づき】

たけるは尊を眞の童女と思つて、手をとつて自分の席の傍に坐らせ、酒を吞ませて戲言を云つてゐた。そして夜更けて自分もぐたぐたに酔つてしまつた。そこで尊は袖の下から劔を抜いて刺されたのである。(國語五の十) 一熊襲征伐



【蝦夷】

蝦夷は今のアイヌと同族で、ずっと古くは日本全国に蔓延して居た。景行天皇の頃は主として越後及び奥羽地方に居たらしい。はじめ武内宿禰をして巡察せしめ、後日本武尊の東征となつたのである。當時の蝦夷は今のアイヌとは違つて性質が慍悍であつたらしい。『男女共に身に文し髪を結び、冬は穴に住み夏は巢に住み、毛を衣、血を飲み、山に登ること飛鳥の如く、草を行くこと走獸の如く、箭を鬚の中にかくし、刀を衣中に佩き、黨類を集めて邊界を侵し、農家を窺ひて人民を略す。撃てば則ち草に隠れ、追へば則ち山に入る。往古以來未だ王化に染まず』とある。

【つかれたまひたれど】

蝦夷反亂の報が達したので、朝廷で征討の議があつた時、日本武尊は『臣さきに西國に勞す、この役は必ず大碓皇子の任なり』と奏せられた。大碓皇子は日本武尊の御兄であるが、御性質至つてお優しい方であつたので、堅く辭退して逃げかくれ給ふた。そこで再び日本武尊がこの大任をお

引き受けになつたのである。

【伊勢に至り】

その頃の伊勢神宮の齋宮は倭姫命で、日本武尊の御叔母にあたらせられる。そこで尊が調せられると、倭姫命は叢雲劍と一つの囊とを授けられた。囊は危急の場合に開けよと仰せられたが、その中には燧石があつたので、後にこれが非常に役立つたのである。(次頁参照)



尋常小學國史上卷より

【其の地のわるもの】

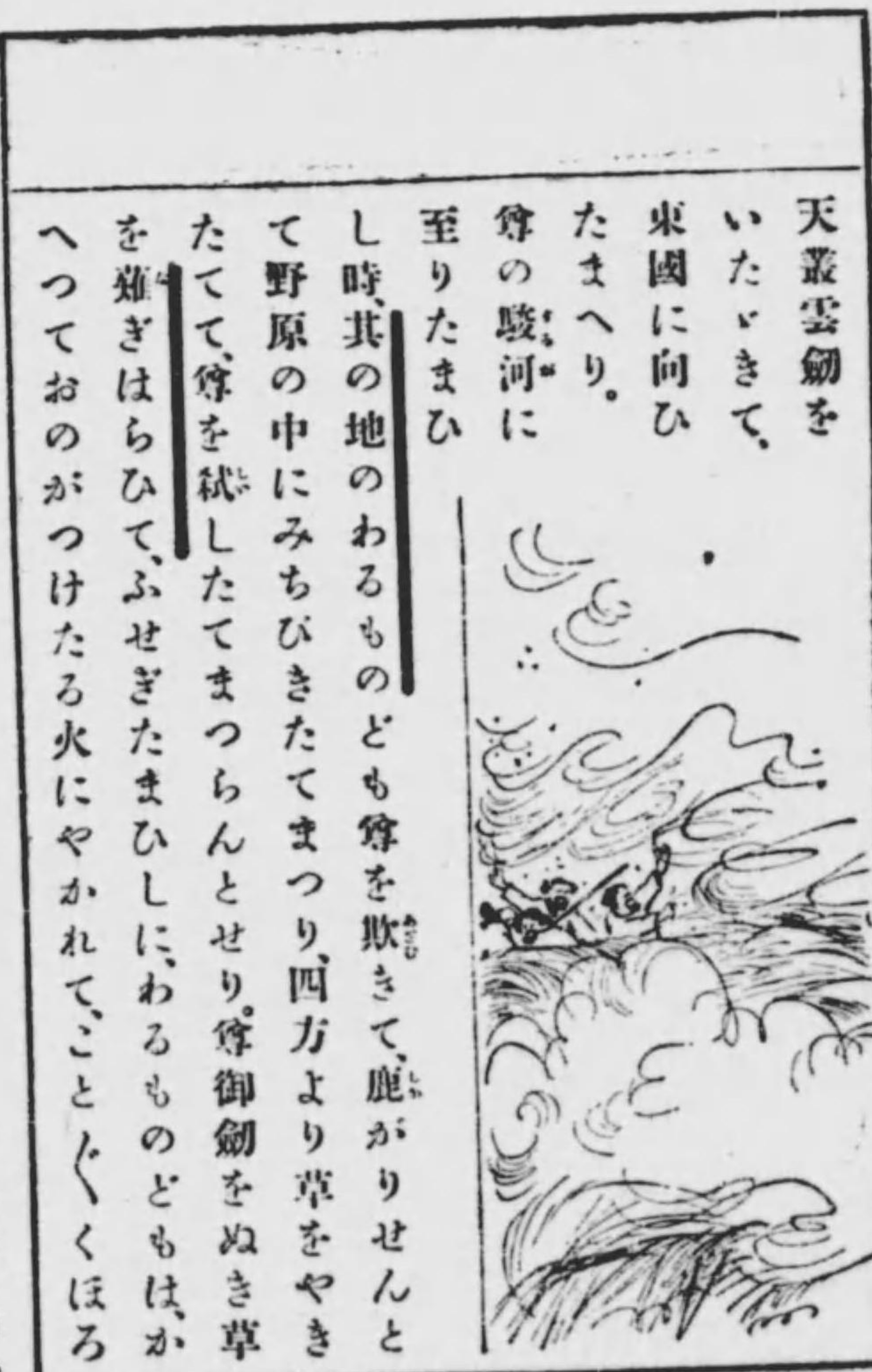
尊は尾張を過ぎて駿河に入られた。そこに土賊が居たが、伴り降つて尊に告げるには、『この野には澤山の鹿が居ます。氣は朝の霧の如く、足は茂れる林の様です。』とて、しきりに狩獵をすゝめた。尊はその言を信じて野に入り獸を求められたが、これは土賊どもの奸計であつたのである。その地は草を焼いたので焼津と名づけられた。恐らく今日漁港として名高い焼津の附近であらう。

【薙ぎはらひて】

土賊は尊を草深き野に誘ひ出して、四方から火を放つて弑し奉らんとした。そこで尊は倭姫命の賜はれる劍を出して草を薙ぎ拂ひ、又かの囊(前頁参照)を開き、中から燧石をとり出して向火をお放ちになつた。すると火は逆に賊の方へ燃えて行つたのである。

この向火といふことは今の山林の火災の際に應用せられる方法であるから、詳しく教へて置く必要がある。森林や草原が火災にかゝつた時、水で消火することは到底出来ない

尋常小學國史上卷より



場合が多いので、どうしても火道を切るより外は無いが、たゞ一帶の木を伐り倒したのみでは、倒れた木に燃え移るから何の効果も無い。ところがその伐り倒した木に火を放つと、風向の如何に拘らず必ず燃え盛つてゐる大きな火の方へ焰が吸ひ込まれて行くもので、本火と向火とが一つになつた時は、伐り倒した木は焼け盡して最早それより手前へは燃えて來ないのである。



【日本武尊御東征圖】

圖中日代ノ宮は景行天皇の皇居で、今奈良縣城上郡穴師村の北部、走水は今の浦賀海峡で、皇妃弟橘媛の入水せられたところ、總は今の上總・下總の地、酒折ノ宮は尊の駐まり給へる所で、今山梨縣山梨郡垣村の八幡宮の境内にあたる。

【蝦夷どもはみな】

尊海路によつて北上せられたところ、蝦夷の酋長島津神・國津神等、竹水門(茨城縣多賀郡の海濱か)に集つて防ぎまつらんとしたが、尊の御船を見るとその威風に懼れ、謹で姓名を伺ひ奉つた。そこで尊は『われは現つ神の皇子なり』と答へられた所、蝦夷等ますます懼れ、直ちに降服した。そこで尊は彼等の罪をゆるし、酋長を虜にしてこれを伴つて凱旋せられた。戦はずして敵を下すはわが朝の傳統的政策である。

【常陸地方】

尊は日高見國まで行かれたとあるが、この日高見の所在について諸説あり一定しない。教科書はこれを常陸と解して

『常陸地方に至り』と云ひ、挿圖には福島縣の富岡あたりまで行かれた様に書いてあるが、日高見は北上川の流域宮城野即ち仙臺平野だとの説も有力である。

【かくれたまへり】

尊は伊吹山の賊を討つた時病にかゝられたとあるが、或は賊の毒矢にあたられたのかも知れない。能褒野に於て薨ぜられた。時に御年三十であつた。



尋常小學國史上巻より

尊はたふとき御身を以て、兵士と共になんぎをしのびたまひ、少年の御時より、西に東にわるものどもを討ちて、少しも御身をやすめたまふひまなくして、かくれたまひしなり。されど其の御てがらにより、遠方まで平ぎて世の中よくをさまれり。尊の御子、後に至りて天皇の御位に即きたまふ。之を四代仲哀天皇と申す。

【やすめたまふひま】

眞に文字通り東奔西走せられ、御年十六の時から具に辛酸を嘗めさせられた。熊襲征伐には二年、蝦夷征伐には四年を費してをられる。薨去の時天皇大にこれを惜まれ、『今より以後誰人と共に鴻業を経綸せんや』と宣ふた。その御親任の篤かつたことがわかる。

【御てがらにより】

その後景行天皇御親ら東國に巡幸あつて尊の功勞をお偲びになり、國郡を定め都督を任じられた。かくて西は九州から東は奥羽の一部に至るまで、百姓その居に安んじ、天下無事であつたと傳へられる。景行・成務二帝の治績も勿論であるが、その根本は實に日本武尊の御てがらである。

【御生れつき】

神功皇后は息長足姫命といひ、開化天皇五世の孫息長宿禰王の女で、御母は葛城高額姫といひ、新羅王子天日槍の五世の孫にあたる方であつた。天資聰明、所謂男まさりの方であつた上に、朝鮮方面の事情にもお詳しかつたので、

尋常小學國史上巻より

尊はたふとき御身を以て、兵士と共になんぎをしのびたまひ、少年の御時より、西に東にわるものどもを討ちて、少しも御身をやすめたまふひまなくして、かくれたまひしなり。されど其の御てがらにより、遠方まで平ぎて世の中よくをさまれり。尊の御子、後に至りて天皇の御位に即きたまふ。之を四代仲哀天皇と申す。

第四 神功皇后

仲哀天皇の皇后を神功皇后と申し、御生れつき賣くををしくましませり。天皇の御代に熊襲またをむきしかば天皇は皇后と共に九州にみゆきして之を討ちたま

新羅征伐の大業も出来たわけである。

【共に九州にみゆきし】

熊襲の叛した時天皇は紀伊に、皇后は越前敦賀におはしたので、天皇は舟師を率ゐる瀬戸内海を経て長門に向ひ、皇后は山陰の海岸を西して長門の豊浦に於て御會合になつた。そして更に筑紫に向つて御進發になり、儼の縣(筑前國)に幸して檀日宮(今の粕屋郡)に入らせられた。



【平がざるうち】

仲哀天皇樞日宮に入らせられた翌年に、親しく熊襲を征伐せられたが、戦利あらずして陣中に崩御あらせられた。或は賊矢にあたられたのかも知れない。皇后即ち喪を秘して密かに海路長門に赴いて殯宮を作らしめられ、而して新羅征伐の方策を進められた。

【まづ新羅を】

その頃九州と大陸とは交通も盛であつたらしく、九州の豪族は多く朝鮮半島と特別の関係を結んでゐたらしい。熊襲が幾たびも叛くのは必ず大陸の國をたのみとしてゐたからであらう。この點に着眼せられたのは實に皇后の一大達見である。即ち先づ別將鴨別をして熊襲を征せしめ、幾くもなく平定したので、直ちに新羅征伐に向はせられた。

【武内宿禰】

景行天皇の時東國を巡察し、成務天皇の時大臣となり、仲哀天皇に従つて熊襲を征し、神功皇后を輔けて新羅を征服し、應神天皇に仕へて政を乗る。五朝に歴任して在官二百

【御髪を解き】

皇后は御髪を解き海に臨んでお祈りになつて『われ天神地祇の教により、皇祖の靈に頼り、躬ら海を渡りて西征せん』とす。今髪を海水に濯ぐに、若し驗あらば髪分れて二つとなれ』とて、御髪を海の中に入れておすゝぎになると果して二つに分れたといふことである。

【みづら】

上古に於ける男子結髪の名で、髪を頭の中央から左右に分け、耳のあたりで束ねて髻を作つたものである。これに二種あつて、輪を一つ作つたものを椎髻と云ひ、輪を上下に二つ作つたものを美豆良といふ。挿繪にある皇后の髪が即ちそのみづらで、八頁の挿繪にあるのが椎髻である。

【人々に向ひ】

この時の仰せは日本書紀によると『夫れ師を興し衆を動かすは國の大事なり、これを臣下に委ねんに、若し事成らざれば罪群臣にあらん。これ甚だ遺憾のことなり。故に吾今男装して軍を率ゐんに、上は神祇の靈を蒙り、下は群臣の

四十四年である。年齢は不詳であるが、驚くべき長命と云はねばならぬ。あまり不思議であるので數人の事蹟を混同して一人にしたのだらうとも云ふ。

【朝鮮半島諸國圖】

圖中豐浦宮は豐浦郡長府、金城は新羅の首府で今の慶尙北道慶州、熊津は百濟の首府で忠清南道公州、白村江は今の錦江の下流、齊明天皇の時我軍唐と戦つて敗れた處。



新羅を討ちたまふ時、此の頃朝鮮には新羅百濟高麗の三國ありて之を三韓といへり。中にも新羅は最も我が國に近く且その勢強かりき。されば皇后はまづ新羅をしたがへなば、熊襲はおのづから平んとおほしめし、武内宿禰とはかり御みづから兵をひきゐて新羅を討ちたまふ時に紀元八百六十年なり。

尋常小學國史上卷より

尋常小學國史上卷より



皇后は御出發の前香椎の海へに出で、御髪を解き海水にて洗ひたまひて、男の如くみづらといふ髪の方にゆひ人々に向ひたまひて、『われ今かりに男のすがたになりて軍をひきゐ、神々の御たすけと汝等の力とによりて新羅を討ちしたがへん』と仰せられたる。

よまたみぞのと方の最新にかるは后皇功神

助に藉り、兵甲を振ひおこして波濤を渡り、船舶を連ねて財の國を求めんに、若し事成らば群臣共に功あり、事成らざれば吾獨り罪あり云々』とある。功は臣下に歸し、罪は一身に負はせられる御思召、實に恐懼に堪へないものがある。併しこれは神功皇后に限らず、御歴代の天皇皆然りである。明治天皇の御製に『罪あらばわれをとがめよ天つ神、民はわが身のうみし子なれば』



【舟いくさをひきあ】

この時皇后軍令を發し『金鼓節無く旌旗亂るれば士卒整はず、私を思ひ内を顧みるときは必ず敵の虜とならん。小敵たりとも侮らず、大敵たりとも屈せず、奸暴なるものは赦すことなく、降服するものは殺すこと勿れ』と仰せられ、對馬の北端和珥津(上縣郡 鰐浦村)を發し、直ちに新羅を衝かれたのである。

【新羅王】

その時の新羅王を波沙寐錦といふ。海を蔽ふて來る兵船を望んで忽ち戰意を失ひ、『これは大變なことになつた。いよ／＼わが國の滅亡する時が來たのだ。あゝどうしよう』と恐れ狼狽した後、これは降伏するの外ないと觀念して、御船の前に進み、叩頭して『今よりどうか飼部として下さい』と申し上げた。

【毎年の貢】

春と秋とに馬梳・馬鞭を上り、又男女の調を上ることをお誓ひ申し、金銀綾羅を八十艘の船に積んで來貢したのであ

る。その後新羅からの貢船は年々八十船といふことになつてゐるが、八十は多數といふ意味で、必ずしも八十艘といふわけではあるまい。

【凱旋したまひ】

新羅王を誅せんと願つたものもあつたが、皇后は御許しにならなかつた。そして大矢田宿禰を止めて新羅の宰とし、人質を連れて凱旋遊ばされた。

しに、武内宿禰をはじめ一同つゝしみて、仰にしたがふべし。と答へたてまつれり。  
皇后舟いくさをひきあて對馬にわたり、それより新羅におしよせたまふ軍船海にみち／＼と御勢すこぶる盛なりしかば新羅王大いに恐れていはく、東の方に日本といふ神國ありて、天皇といふすぐれたる君いますと聞く、今來れるは必ず日本の神兵ならん、いかでかふせぎ得べきと、たゞちに白旗をあげて降参し、皇后の御前にちかひて、たとひ太陽西より出で、川の水さかさまに流るゝ時ありとも、毎年の貢はおこたり申さじ、といへり、やがて皇后凱旋したまひしが、其の後百濟高麗の

尋常小學國史上巻より

【天皇の御徳になびき】

神功皇后の新羅征伐から四十七年を経て百濟國朝貢し、わが忠實なる屬國となつた。それは征伐によらず全く彼國の自發的に朝貢したものである。それから又二十九年を経て高麗も來朝した。併し高麗は最も遠方であるから、わが國との關係に於て新羅・百濟ほどに密接ではなかつた。

【學問をつたへ】

新羅征伐以後わが國と大陸との交通が頻繁となり、三韓諸國の文化が漸次わが國に傳はつて、わが文化の發達に貢獻する所が頗る多かつた。應神天皇の八十四年に阿直岐、翌年に王仁來朝し、論語十卷、千字文一卷を獻上した。皇子稚郎子これを師として諸の典籍を習ひたまひ、大に通達せられた。これわが朝廷に漢字の傳はつた始めである。但し九州地方にはこれ以前已に多少漢字が傳はつてゐたらしい。

【職人もおひく渡り】

應仁天皇十四年に縫衣女が來た。その翌年に韓鍛・吳服及び酒造りが來た。又四十一年には兄媛・弟媛以下の四女工

尋常小學國史上巻より

二國もまた我が國にしたがへり。  
かくて、これより朝鮮は天皇の御徳になびきたがひ、熊襲もおのづから平げり、又五十七代應神天皇の御代に、王仁といふ學者など百濟より來りて學問をつたへ、機織・鍛冶などの職人もおひく渡り來りて、わが國ますます開けしは、全く神功皇后の御てがらに基づきしなり。  
第五 仁徳天皇  
六代仁徳天皇は應神天皇の御子にして、御なさけ深く常に人民をあはれみたまへり、天皇は都を難波にさだめたまひしが、皇居はきはめて質素なる御つくりなり

が來た。かくて裁縫・織物・鍛冶・醸酒等の技術が傳はつた。尙この頃弓月君は百二十七縣の民を、阿知使主は十七縣の民を率ゐて歸化した。これ等歸化人は概して文化の進んだ民族であるから、種々の技術を傳へたであらう。

【きはめて質素】

難波に遷都して高津宮に居られたが、壁は荒壁のまゝであり、柱にも梁にも何等の裝飾を施されなかつた。



【ある日】

これは仁徳天皇の四年二月であつた。群臣に詔して『朕、高臺に登りて遠望するに煙氣が起らない。蓋し百姓が窮乏して炊ぐものが無いのであらう。畿内の地でさへもこれだから、況や畿外地方の惨状は察するに餘りがある』と仰せられた。

【勅して】

即ちその年三月、天下に詔して自今以後三年、悉く課役を除いて百姓の苦を休め給ふた。その頃の課役といふものがどの程度のものであつたかは詳かでないが、勿論苛斂誅求が甚しかつたわけでは無い。百姓が苦んで居たのは凶作でも續いたためであつたらうか。尤も前代に外征の結果國威が大に伸張したから、天皇は特に御心を内治に注がせられて、民力の休養をお計りになつたものであらうから、炊煙の多少といふことはあまり穿鑿する必要はないと思ふ。

【しだいにあれ】

それ以後極度の御儉約を遊ばし、御衣も御履物も全く破れ

【われすてに富めり】

七年の四月に再び高臺に上つて炊煙の盛なるを望ませられ皇后に向つて『朕は富んだ、もう心配することは無い』と仰せられた。皇后は『かく宮殿は破れて雨風が吹き込みますのに』と仰せられると、天皇『天の君を立つるは人民のためである。故に君は人民を本とせねばならぬ。古の聖王は一人の飢え凍えるものがあつてもわが身を責めた。今人民が貧しければ即ち朕が貧しいのであり、人民が富んで居れば即ち朕が富んだのである。』と仰せられた。實に恐懼の至りである。外國の君主が人民を虐げて自ら榮華を擅にするのと全く同日の談で無い。君民一體、これがわが國體の特異な點である。

【願ひ出たれど】

七年の九月に諸國から續々請願して來た。『已に課役を免ぜられて三年にもなりました。宮殿は朽ち壊れ府庫は空しくなつてゐます。然るに人民は富み榮えて、道に落ちて居るものを拾ふものも無く、村には鰥寡孤獨のものも無く、家

てしまはない限りはお取りかへにならず、御食事の如きも腐敗しない限りは決しておとりすては無かつた。それ故に宮殿の垣は崩れたけれどもお繕ひにならないし、屋根を葺いた茅は腐つて雨が漏つてもお心にかけてさせられず、壁は落ちて雨風が吹き込み、ためにお衣が濡れたり、夜は星の光が屋根から漏れて、御尊の上を照すといふ有様であつたといふことである。

天皇ある日高き御殿にのぼりて、四方をのぞみたまひしに村々より立つかまどの煙少がりしかばかくかまどの煙の少きは五穀みのらずして食物の足らざるためならん都近きところすらかくの如くなれば遠き國々にては人々いかに苦しみ居るならんとおぼしめし勅して三年の間税をささむることを免じたまへりされば皇居はしだいにあれ損ずれども御心にもかけたまはず御衣すら新にはつくらしめたまはざりき。そのうち豊年うちつゞきて人民皆ゆたかになり村々の煙も盛に立ちのぼりたれば天皇これを見たまひて人民の富めるをよるこびたまひわれすてに富めりと

尋常小學國史上卷より

尋常小學國史上卷より



仰せられたり。人民は皇居のあれ損じたるをつたへ聞きて、税をささめ又新に皇居を造りたてまつらんことを願ひ出たれども、天皇は之をゆるしたまはざりき。されどなほしきりに願ひたてまつりた

【挿繪】

天皇の後方に居られるのは皇后であらう。宮は今の大阪城附近、前面の山は生駒山で、東方に向つて農村を望ませられた有様である。



【はじめて御ゆるし】

その後も屢々願ひ出たのであつたが、十年十月になつて始  
めておゆるしになつた。すると人民は喜び勇んで、御命令  
も待たずに馳せ集り、老人をたすけ、子供を引きつれなど  
して、材木を運んだり土を擔つたり、晝夜の別なく争ひは  
げんだので、間もなく宮殿が立派に出来上つた。

明治神宮の御造營に全國の青年團などが勞力奉仕をしたこ  
と、又全國各地から植木を献上したことなど、事情がよく  
似てゐる。

【農業をすゝめ】

各地に池や溝を掘らせて灌漑を便にし、堤を築き堀を穿つ  
て洪水の害を防ぎ、或は道路を開き橋梁を架して交通を便  
ならしめられた。難波の堀江、茨田堤（河内郡牧方町から  
東成郡野田村に至る淀川左岸の堤防）、和珥池（河内）横野  
堤（河内）などその例で、又感玖（石川郡）に大溝を穿つて  
新田四萬餘頃を得られ、山背の粟隈の縣に大溝を穿つて水  
田を開かれたので、その地の百姓が非常に幸福になつたと

【朝鮮の學者】

高麗の僧慧慈が歸化したので、これを師として五戒を受け  
られた。太子が不審を慧慈にお問ひになると、慧慈もわか  
らなくてお答の出来ぬことがある。すると太子は夢に金人  
に遇つて教へを受け、翌朝慧慈にこれを告げられると、慧  
慈も亦了解したといふ。太子の聰明驚くべしである。

【いろいろ新しき政治】

太子の定められた新制度は、後年に於ける大化新政の基礎  
となつたものである。今その中著明なものを擧げると、推  
古天皇十一年十二月に冠位十二階を定められ、位に應じて  
服の色を定め、これに相當する色の冠を朝廷から賜はるこ  
ととなつた。翌年正月に始めて曆を頒布せられ、四月に憲  
法十七條を作らせられた。又九月には禮法を定められ、二  
十八年には國史を選修せられた。

【十七條の憲法】

今日の憲法とは違つて主として人民の心得を諭されたもの  
である。『和を貴しとなす。禮を以て本となせ。人の善を匿

いふことである。

【御恩に感じ】

人民が如何に天皇の御恩に感じて居たかといふことは、そ  
の御陵を見てもわかる。これは天皇の御生前に作らしめら  
れたもので、今泉北郡船松村にあり、俗に大仙陵と云つて  
ゐるが、兆域八町四方もあつて、實に現在の諸山陵中最も  
廣大なるものである。

ればさらに三年の後に至り、はじめて御ゆるしありた  
り。人民よろこびいさみて、われさきにとはせ集り、日夜  
工事にはげみしかば皇居たちまちうるはしくできあ  
がれり。

天皇はなほ人民のためをはかりたまひ、堤をきづかせ、  
池をほらせなどして、農業をすゝめたまひしかば、人々  
皆ふかく天皇の御恩に感じたまつり、おのゝく、其の  
業をたのしみて、世の中よくをさまれり。

第六 聖德太子

仁德天皇より御十八代めの天皇を推古天皇と申

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

す。天皇は女帝にましませしかば政治を御甥の聖德太  
子にまかせたまへり。  
太子は御生れつき人にすぐれて賢くましく、一時に  
よく十人の訴を聞けたまひしといふ、其の上に朝鮮  
の學者について、深く學問をなさめたまひしかば朝鮮  
支那のよきところをとりて、いろいろ新しき政治をは  
じめたまひ、遂に十七條の憲法を定めて、官民の心得べ  
きことを示したまへり。  
太子は又使を支那につかはして、交際をはじめたまへ  
り。其の頃支那は國の勢強く、學問なども進みあたりし  
かば常にみづから高ぶりて、他の國々を皆屬國の如く

さす悪を見ては必ず匡せ。信は義の本なり。功過を明察し  
賞罰必ず當てよ。嫉妬ある勿れ。大事は獨斷せず衆と共に  
宜しく論すべし。などいふことが詳しく説いてある。

【使を支那に】

推古天皇十五年七月、小野妹子を隋に遣はされた。その目  
的は國交を修めると共に書籍、恐らくは佛書を求めしめら  
れたものであらう。（妹子は女ではない）



【つかはしたまひし國書】

最初に小野妹子を遣はされた時の國書のこと、これは支那の隋書卷八十一に出てゐる。そしてその時數十人の僧侶が行つて佛法を學んだことも書いてある。

【支那の國主】

その時の隋の國主は云ふ迄もなく煬帝である。全國を一統して國勢俄に揚り、文物燦然として四隣に輝いて居た時であるから、世界の凡ての國を悉く屬國の様考へて居た。故にこの國書を見て悦ばなかつた。『こんな無禮なことを云つて来るものはほつて置け』と命じた。併し翌年妹子が歸朝する時に斐世清を使とし、十二人の從者と共に妹子を伴つて來朝せしめた。その意氣の高遠なるを怪み國風を觀せしめた』とあるから、『對等の交際をしよう』といふ國は一體どんな國だらう』といふ好奇心から斐世清を遣はしたものであらう。

その時の彼の國書はわれに對して對等では無かつた。故に太子は喜び給はず、二度目に妹子を遣はされる時の國書に

【始めて百濟より】

欽明天皇の十三年十月、百濟の聖明王その臣怒喇斯致を遣はし、金銅釋迦佛像一軀と幡蓋經論とを獻じ、上表して大に佛教の功德を説いた。この佛像は後蘇我・物部二氏の争によつて難波の堀江に投ぜられたが、推古天皇の時本田善光が拾つて長野に寺を建て、祀つた。即ち善光寺の本尊となつてゐるのである。

【多くの寺を建て】

法興寺 此れは世に元興寺又は飛鳥寺といふ。遺地は大和高市郡飛鳥村にある。建築に九年を要した。  
四天王寺 始め難波の玉造に建て、後荒陵に移された。今大阪市南区にある。  
法隆寺 又斑鳩寺とも云ひ、太子の佛法研究所とせられたもので、建築に六年を要し、七堂伽藍悉く備はつた。

蜂岡寺 又廣隆寺と云ひ、今京都市太秦にある。

【國內にひろまり】

推古天皇の三十一年に全國の寺院四十六、僧八百十六人、

『東天皇敬みて西皇帝に白す云々』と書かれた。

【留學生】

推古天皇の十六年、再び妹子が斐世清を送つて隋に行つた時、倭漢直福因以下四人の學生、新漢人晏以下四人の學問僧がこれに隨つて隋に留學した。その後隋は亡んで唐となつたが、舒明天皇の二年又使を遣はし、以後多數の留學生や學問僧が行つたのである。



にとりあつかへり、されど太子は少しも其の勢に恐れたまふことなく、彼の國につかはしたまひし國書にも、  
日出づる處の天子、書を日没する處の天子にいたす、恙なきか。とか、せたまへり。支那の國主、これを見ていかりたれども程なく使を我が國につかはしたり。よりて太子はさらに留學生をも彼の國に送りたまひ、其の後引きつゞき兩國の間にゆききありたれば、これまで朝鮮を

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

經て我が國に渡り來りし學問などは、たゞちに支那よりつたはることとなり、  
これよりさき、太子の御祖父、敏達天皇の御代に、佛教始めて百濟よりつたはれり。太子は深く之を信じたまひて、多くの寺を建て、又御みづから教を説きたまひしかば、これより佛教大いに國內にひろまり、建築などもいちじるしく進みたり。太子の建てたまひし寺の中に、最も名高きは、大和の法隆寺にして、其のおもなる建物は昔のまゝなりといはれ、わが國にて最も古き建物なり。  
かくの如く、太子は大いにわが國の利益をはかりたま

尼五百六十九人あつたといふ。佛教の渡來後僅か七十三年にしてこの隆昌を見たのは、太子の力頗る大なること云ふ迄もない。

【おもなる建物】

金堂と五重塔と中門とはその當時のものである。度々修繕されてゐるのは勿論である。再建設もあるが明かでない。木造としては世界最古の建築物である。



【親をうしなへるが如く】

推古天皇の二十九年二月、御年四十九で斑鳩宮に於て薨せられた。天下の百姓、老ひたるは愛兒を失つた様に食事も喉を通らず、若いものは父母を失つた様に泣く聲が行路に充ちた。農夫も耕すを止め、春つく女も杵を止めて、日月も光を失ひ天地は崩れた、今より誰を恃まんやと云つた』とある。

【我がまゝなるふるまひ】

蝦夷の父馬子は崇峻天皇の時外戚を以て權を專にし、天皇がこれをお惡みになつたのを知つて部下に命じて弑せしめた。又推古天皇に向つて皇室世襲の地たる葛城縣を賜はらんことを乞ひ奉つたこともある。

舒明皇天は多病におはして屢々有馬・道後等の温泉に行幸になつたので、蝦夷は朝政を全くその手に握り、群臣も皆蝦夷の第に出入して參朝するものは稀であつた。天皇これを歎かれ、鐘を合圖に參朝せしめるやうに御命じになつたが、蝦夷はこれに従はなかつた。

【あまたの人民を】

皇極天皇元年のことである。諸國の民を役して二つの墓を作り、一を大陵、一を小陵と名づけた。時に聖德太子の家に屬する上宮の乳部の民をも使役したので、太子の御女は大に憤り、『何故恣にわが乳部の民を役するか』と仰せられた。これより太子家と蘇我氏とは益々怨恨を深くするやうになつた。

ひしが、いまだ御位に即きたまはざる前に、うせたまへり。此の時世の中の人々は皆親をうしなへるが如く、なげきかなしみたりといふ。

第七 天智天皇と藤原鎌足

推古天皇の御代の前後に最も勢ありしは蘇我氏なり。蘇我氏は武内宿禰の子孫にして、代々朝廷の政治にあつかり、勢にまかせて、だいに我がまゝなるふるまひ多かりき。蘇我蝦夷は推古天皇の御孫、舒明天皇の三子に仕へたてまつりしが、心よろしからぬものをなれば、ほしいまゝにあまたの人民をつかひて、あらかじめ

尋常小學國史上巻より

【聖德太子の御女】

上宮大娘姫王と申し上げる。御弟に山背大兄王がある。蝦夷はこの王の徳望のあるのを忌み、これを排して舒明天皇を奉じたほどであるから、故らに上宮の乳部の民を使役したのは、これによつて王を激せしめようとしたものであらう。

【御子孫をほろぼし】

山背大兄王は徳望があつたので、蘇夷は自ら專横をふるまふには、この王を亡ぼし奉るの外ないと考へた。又入鹿は舒明天皇の皇子にして蝦夷の妹の生める古人大兄皇子を奉ぜんとし、遂に皇極天皇二年十一月、山背大兄王を斑鳩宮に襲つた。王は一旦生駒山に逃れられたが、戦のために人民を役するに忍びずとし、遂に子弟妃妾等と共に自殺遊ばされた。かくて聖德太子の子孫二十三人、皆入鹿に滅ぼされたのである。

【おのが家】

入鹿の家は甘樹岡(高市郡飛鳥村字豊池)にあつて、柵を構へ兵庫を設

尋常小學國史上巻より

おのれ等父子の墓を作り、おそれ多くも之を酸といへり。此の時聖德太子の御女は大いにいかりたまひて、天に二つの日なく、國に二人の君なきに、いかなればか、る我がまゝをすするぞ、と仰せられたり。蝦夷の子入鹿はなほも思のまゝにふるまひて、おのれに縁ある皇族を御位に即けたてまつらんがために、聖德太子の御子孫をほろぼし、遂におのが家を宮といはしめ、子等を王子といはしむるに至れり。まことに朝廷をおそれざる無道のことといふべし。

中大兄皇子入鹿と共に入鹿に滅ぼされた

け、常に力士をして武器を手にして守衛せしめた。又父の蝦夷は宅を畝傍山の東方に造り、池を穿ち城を築き、倉庫を起して弓箭を蓄へ、出入する毎に五十人の兵士をして警衛せしめた。かくて蝦夷の宅を宮門、入鹿の宅を谷宮門と稱せしめたのである。

蘇我氏がかく專横を極めたにも拘はらず、群臣皆おそれて敢て匡濟しようとするものが無かつた。



【ある時】

皇極天皇の三年の春の頃であつた。法興寺の西面の庭で蹴鞠の御遊びがあつて、鎌足もそこに居合せ、そしてお靴をさゝげる機会を得て近づきとなり、それから次第に親しく交られて大事を御相談になつたのである。(次頁挿繪参照、左方の木は楓の木である)

【同じ志の人々】

蘇我倉山田石川麻呂と謀を協せ、又佐伯子麻呂・葛木稚・犬養畑田などをすゝめて援とした。石川麻呂は蝦夷の弟の子で入鹿とは従兄弟であるが、分家で頗る不遇の地位に立ち、入鹿等の専横を悪んで居たものである。

【三韓より貢物】

これは皇極天皇の四年(その年改元して大化元年となる)の六月十二日のことであつた。三韓から貢物を奉るといふので、これをお嘉納になる式が大極殿で行はれることになつた。この時を期して入鹿を誅しようといふ謀が鎌足等によつてめぐらされたのである。

【入鹿を恐れてためらひ】

この時入鹿は太刀を佩いて昇殿して來たので、鎌足は兼て俳優に云ひ含め、戯れにまぎらせて劍を解かせた。そこで石川麻呂が三韓からの表文を読み上げることにし、その間に子麻呂と網田が斬りつけるといふ手筈になつてゐたが、子麻呂等は入鹿の威におそれ、一面陛下の御前であることに恐懼して容易に發せず、表文がもう終らうとするので、石川麻呂も氣が氣でなく、ために聲はわななき、手はふるひ、汗が流れて着物が濡れた。入鹿が怪んでどうしたかと問ふと、石川麻呂は「陛下の御前であまり畏いので」と云つた。その時、最早猶豫が出来ないと皇子が先づ躍り出て入鹿の肩先を斬られた。子麻呂等もそれに勢を得て飛び出し、脚に斬りつけたのである。

【入鹿の不忠を申し上げ】

この時入鹿は玉座に向つて叩頭し「臣に何の罪あるか知りません。どうか陛下御ゆるし下さいませ」と申し上げた。そこで中大兄皇子地に伏して奏上せられるには「入鹿は多

重大な儀式の場所で、而も陛下の御前でこの大事を決行するといふことは、實に恐懼に堪へないことであるが、併し國家のため全く已むを得なかつたのである。入鹿父子は澤山な私兵を養つてゐたから、かういふ機会でなくては容易に近づくことさへも出来ず、大兵を動かして鞏固の下を騒がしても、果して成功するかどうか疑はしいから、萬止むを得ず殿中を汚すに至つたものである。

天皇の御子中大兄皇子も、また蘇我氏の無道にくみたまひしかば鎌足はいかにもしておのが心を皇子にうちあげたてまつらんと思ひしに、ある時皇子の蹴鞠の御遊にまゐりあひ御靴のぬけたるを取りてさし上げ、これより皇子に親しみたてまつることを得ひをかねに同じ志の人々とはかりわたりされど、入鹿は家のめぐりに池を掘りて城の如くにし、出入の時にはあまたの人々をしたがへ、すこしも心をゆるさざりき。たまたま三韓より貢物をたてまつることあり、大極殿にて其の式を行はせらるゝ日に、入鹿はまゐりて皇極天皇の御そばにありしかば、此の折を以て入鹿を誅せんとし、



皇子は御みづからほこせとりたまひ、鎌足等は弓矢劍などを持ちて御殿のわきにかくれりたり。然るに人々は入鹿を恐れてためらひたるに、皇子はまつさきに進み入り、遂に人々と共に入鹿を誅し、さらに天皇の御前に進み出て、つゝしみて入鹿の不忠を申し上げたまへり。蝦夷は家にありて皇子と戦



【人をやりて】

この時中大兄皇子は變の起らんことを懼れ、法興寺に入つて自ら備へられたところ、皇子・諸王・群臣等皆隨ひ來つたといふ。蓋し蘇我氏の專横は誰の目にもあまつてゐたものであらう。ところが歸化人阿知使主の子孫漢直等は蝦夷を助けて亂をなさんとした。そこで皇子は巨勢徳太古を遣はして順逆を論させられたところ、直ちに兵を解いて去つた。そこで徳太古は翌日兵を率ゐて蘇我氏の第を襲ひ、蝦夷は遂に自刃したのである。

【系圖】

蘇我石川—滿智—韓子—高麗—稻目—馬子

即ち馬子は石川から六代目にあたる。政權を握つて專横になつたのは稻目の時からである。

又武内宿禰は孝元天皇から四代目にあたつてゐる。

【孝徳天皇にゆづり】

蘇我氏の滅亡した四年六月のことである。皇極天皇は位を中大兄皇子に傳へんとされた。皇子はこれを鎌足に相談せ

られたが、鎌足は「古人大兄皇子は殿下の兄様であり、輕皇子は殿下の男ですから、これをさしおいて即位せられるのは順序ではありません」と申し上げた。そこで皇子は古人大兄皇子にお譲りになつたが、この皇子は固辭して受けられず、遂に出家して吉野に入られた。そこで輕皇子が位におつきになることとなつた。これが孝徳天皇で、中大兄皇子は皇太子として實際の政治をとられた。

はんとし、之につきましたかふものも少からざりき、皇子すなはち人をやりて、わが國には昔より君臣の別あることをいひ聞かせたまひしかば、人々ちりくりにけり、蝦夷も遂に家を焼きて自殺せり。

◎武内宿禰—蘇我石川—...—皇子—韓子—高麗—大兄

大化の新政のたまたま

第八 天智天皇と藤原鎌足(つゞき)  
やがて皇極天皇は御位を御弟孝徳天皇にゆづりたまひ、中大兄皇子は其の皇太子となりたまへり、皇太子は天皇をたすけたてまつりて、大いに政治を改め、これまで勢あるものが多くの土地をもちて、ほしいまま

尋常小學國史上巻より

【土地・人民を】

我が國太古からの傳統たる氏族制度は、臣・連などが土地人民を兼併するに及んで弊害漸く甚しく、蘇我氏に至つては皇室をも壓迫するに至つたので、この制度を根本的に改め、唐の制度を參酌して地方郡縣の制を立てられたのである。これは社會組織の大變革で國史上の重要な一大エポックメーカーングではあるが、尋五の兒童に了解せしめることは餘程困難であらう。

【年號の始】

孝徳天皇の元年を大化元年とせられたので、それは皇極天皇の四年に相當する。その後六年に白雉と改元せられたが次の齊明天皇以後は暫く中絶し、天武天皇の末年に朱鳥の號があるが又中絶、文武天皇の五年に大寶の號を立てられたから連綿今日に及んでゐる。

【なほ皇太子】

皇極天皇の重祚をまで願はれて、中大兄皇子が御即位にならなかつたのは、大政大變革の衝に當られる上の便宜から

尋常小學國史上巻より

に人民を使ひたりし習はしきと、めてこれ等の土地人民をことごとく朝廷にをさめしめたまへり、世に之を大化の新政といふ。大化とは此の時定められたる年號にして、之を年號の始とし、其の元年は紀元一千三百五年にあたり。

孝徳天皇崩じたまひて、皇極天皇再び御位に即きたまふ。之を齊明天皇と申す。中大兄皇子はなほ皇太子として引きつゞき政治にあづかりたまへり。此の頃支那は唐の代にて、勢甚だ盛なりしが、新羅は其の助をかりて百濟をほろぼさんとせしかば、百濟の人々すくひを朝廷にこへり、皇太子すなはち天皇を奉じて九州に

であつたらう。そして大體に新政が整つた上で、始めて御即位になつたものと解せられる。

【百濟の人々】

新羅は唐と共に百濟を攻め、齊明天皇六年十月に遂に一旦これを滅した。そこで百濟王の遺臣鬼室福信・餘自進の二人恢復を圖り、使をわが朝廷に上つて援を乞ふた。それがその年十月のことであつた。



【行宮に崩じ】

この時の行宮は朝倉橋廣庭宮で、今の福岡縣朝倉郡須川村にあつた。皮のついたまゝの丸木で建てたお粗末なものであつたので木丸殿と云つて居た。こゝへ御親征になつたのは明治天皇が大本營を廣島にお進めになつたのと似てゐる。七年七月にこゝで崩御あらせられたので、皇太子は長津(今の福)に遷つて軍議をこらされた。

【利をうしなひ】

前述した福信等は典璋を立て、百濟王とした。わが國は兵五千、船五十、矢十萬枝その他を與へてこれを助けた。又翌年には兵二萬七千を以て新羅を討つた。然るに二年八月唐將劉仁軌等、船艦七十艘を聯ねて白村口(一六頁挿圖に白村江とある處)に居たのを我が軍赴いて攻めたが、諸將争ひ進んで隊伍整はず、忽ち唐軍の夾撃をうけて大敗した。そして百濟王も高麗に逃れ、士卒は唐に降り又はわが軍に合して、百濟全く滅亡した。

【引上げしめ】

【大いに改め】

天智天皇の時には令二十二卷あつたが、天武天皇これが改修を命ぜられて十年八月に出来、持統天皇の三年六月に始めて令二十二卷を諸國に頒たれた。次で文武天皇重ねて修正せしめられ、大寶元年律六卷・令十一卷が出来上つて三年に施行せられた。併しこれも今の世に傳はらない。世に大寶律令といふのは、實に養老以後數回の修正改訂を経たものである。

【政治の本】

律は法律、令は官制と思へば大差は無い。律は主として唐の律を基としたもので、今の民法や刑法に類することが規定してある。併し令はわが國古來の慣例を基としたから、唐の令に比べると大差がある。

今日の正一位・從一位等の位階、勳一等等の勳位、大藏省宮内省等の官廳名、騎兵・歩兵・將軍・軍曹などの名、博士・學生などいふ語は皆大寶律令に始まつてゐる。この律令が如何に後世に影響したかの一例である。

九月にわが諸將兵を收めて歸つた。この時多數の百濟人が歸化した、その中には學問・法律・築城・兵法・藥劑學・陰陽道等に達したものがあつて、わが文化の發達に大に貢獻したのである。

【いろく新しき法令】

鎌足の撰した律令は十年に出来上つた。併し今全く傳はつてゐないので、内容は全然不明である。

おもむきたまひしが、天皇間もなく行宮に崩じたまひしかば、皇太子つぎて立ちたまふ。天智天皇これなり、天皇兵を出して百濟をすくはしめたまひしに、我が軍利をうしなひ、百濟は程なくほろびしかば、天皇はながく我が軍を海外に勞することの不利なるを見たまひ、遂に之を引上げしめたまへり。ついで高麗もまた唐にほろぼされ、新羅ひとり威をふるふに至り、これより朝鮮は全く我が國よりはなれたり。されど唐とは此の後もなほ交を絶たざりき。これより天皇はもつぱら御心を國內の政治に用ひたまひ、都を近江にうつし、鎌足をして、いろく新しき法令を撰じしむ。

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

令を定めしめたまへり。此の法令は、後に文武天皇の大寶年中に至りて大いに改められ、之を大寶律令といひ、此の後ながく政治の本となれり。中臣鎌足は、さきに蘇我氏をほろぼせしより、二十餘年の間朝廷に仕へて大功ありしかば、天皇は常に之を重んじたまへり。鎌足大病にかかりし時、かたじけなくも天皇その家にみゆきして御みづから病を問ひたまひ、何なりとも望むことあらば申すべし、と仰せたまへり。鎌足深く天皇の御恩に感じたまつり、もとよりおろかなる身に、何の望むことか候ふべきた、願はくは葬儀をてあつくせざらんことを、と申し上げたりとぞ、天皇

【天皇その家にみゆきし】

八年九月鎌足病むや、畏くも天皇御親らその家に行幸して病を問ひ優詔を賜はつた。これ誠に異數の例である。それから六日の後に鎌足は薨じたのであるが、越えて三日、天皇再びその家に行幸あり、金香爐を賜はつた。これによつて生前如何に御寵愛を受けてゐたかを推すことが出来る。享年五十六であつた。



【最も高き位】

鎌足薨するの前日、二十六階の冠位中最高の大織冠と、内大臣の官とを授けられた。又藤原の姓を賜はつたが、これは鎌足の出生地が大和高市郡藤原（今の鴨共村高殿）であつたのに因んだものである。

【後に】

鎌足薨去の時これを攝津に葬つたが、その後多武峯に改葬した。而して墓の上に塔を建て、その南に妙樂寺を營み、寺の東に殿堂を立て、鎌足の像を置いた。そして醍醐天皇の時に社殿を立て、鎌足を祭り談山権現と云つた。明治維新後談山神社と改稱し、別格官幣社となつたのである。

【御代ごにかはる】

これは新帝が幼時から御住まひになつた處で御即位なさるので、代々遷都せられることになつたわけである。尤も汚穢を忌むといふ風習から、先帝崩御の地を忌んで新に都を建てられたといふ場合もあつたであらう。何れにしても萬事御質素の世であり、政治も簡單であつたから、遷都と云

つても多くの費用を要したり、民を苦める様なことは無かつたと見える。ところが大化以來中央集權よなつて政府も大規模となり、唐などとの交際の上にも廣大な帝都を營む必要が出来て來たのである。

【おほむね】

聖武天皇は山城恭仁宮、攝津難波に、稱徳天皇は河内由義宮に一時遷都せられたから、おほむねと云つたのである。

藤原氏の

皇はやがて鎌足に最も高き位を授け、又藤原といふ姓をたまへり。後の世に盛になれる藤原氏は實にこゝに始るなり。鎌足は後に大和の談山神社にまつらる。

第九 聖武天皇

文武天皇の次に、第三十四代元明天皇御位に即きたまふ。紀元一千三百七十年和銅三年天皇は都を大和の奈良にさだめたまへり。これまでは都はたいいてい御代ごにかはる習はしなりしが、これより御七代七十餘年の間、おほむね奈良の都にましくたり、よりて此の間を奈良時代といふ。

尋常小學國史上卷より

【唐の風】

奈良の都は唐の風に倣つたものである。當時多くの遺唐使留學生・學問僧などが歸つて來て、支那の帝都の壯大な有様を語るものも多かつたので、勢、支那の制度にならつて廣大な帝都を起すことになつた。(國語十二の二十、奈良)

即ち中央の正面に大内裏、その真中から南に向ふ大通が朱雀大路で、これと並行する南北の街路が左右各四本づつ、これと直交する東西の街路が十條あつた。即ち後の平安京と相似たものであつた。これは今日の奈良市とは全く別で市の西方にあつたのであるが、條坊の計畫は立つてもこれが全部建物で充たされたわけでは無い。(國語十二の二十に地圖もある。)

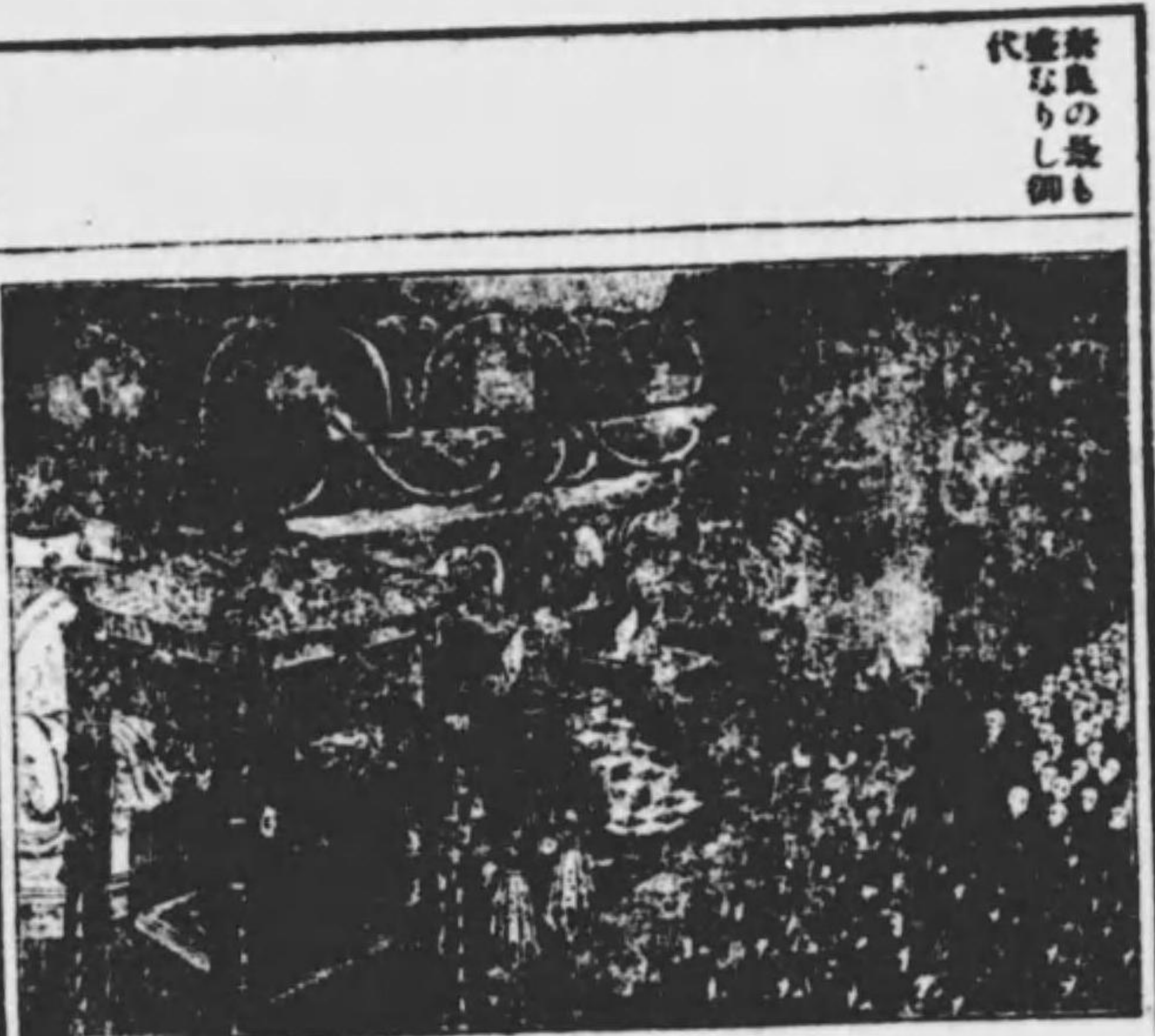
【壁を白く】

白壁といふことはこの時から始まつた。又柱を赤く塗るとか、瓦を屋根に葺くなどいふことも、皆支那を眞似てこの頃から始まつたものである。

【すべてはなやか】

當時唐の盛時であつたから、その影響と佛教興隆とのため

尋常小學國史上卷より



奈良時代の中心にて最も盛なりしは、第四十代聖武天皇の御代なり。此の頃は唐との交通しげく世の中大いに開けたりしかば、都も唐の風にならひてりつばなるものとなり、宮殿などの建物は壁を白く、柱を赤くぬり、屋根には瓦をふき、人々の風俗もすべてはなやか

に工藝美術の進歩を促し、繪畫・彫刻・象嵌・陶器・ガラス器、錦・綾等の織物も出來、衣服も頗る華美であつた。

【挿繪】

寺崎廣業氏の畫いた大佛開眼の圖である。正面の高座に上つて居られるのが右から聖武上皇、孝謙天皇、光明皇太后である。左右の高座にあるは左が隆尊、右が良辨。すつと上の蓮瓣に接して座するは印度バラモン僧正である。



【あつく佛教を信じ】

聖武天皇は皇后と共に篤く佛教を信ぜられた。これは今日の佛教信心とは聊か趣を異にし、死後の幸福のためでは無くして現世の安穩を願ふためであつた。即ち『これをひろめて世の中を太平にみちびかん』とお思召したのである。そこで災異が起ればこれを佛に禱り、祥事があればこれを佛に謝し、佛法によつて萬民を化し、罪惡を未然に防がんとせられた。蓋し當時の社會は名僧の說法で民を導くのが最良の方策であつた。

【國司と】

聖武天皇天平十三年に詔を下して、國家的事業として國分寺を建立せしめられた。併し中には國司が怠慢で出来ない處もあつた。故に孝謙天皇の時督促の令が出てゐる。併し醍醐天皇以前に全部完成したことは確かである。たゞ今日では正確にその位置を知ることの困難なものが多い。

【東大寺を建て】

天平十五年に着手せられ、十年を経て孝謙天皇の天平勝寶

【病院を建て】

天平二年四月施藥院を建て、皇后職及び大臣家からその費用を辨せしめ、貧民に施療せしめられた。これは明治天皇の御起しになつた濟世會の事業と相似たものである。又この施藥院に隸屬した東西兩悲田院を設けられ、孤兒や貧民の病者を收容せしめられた。今の孤兒院・養老院・貧民病院などに類するものである。

【すぐれたる僧多く】

興福寺の義洲の門下に玄昉・良辨・隆尊その他の名僧多く行基も義洲に學んだ。又唐よりの歸化僧に鑿眞の如き名僧がある。玄昉は聖武天皇の寵を恣にして、遂に政治に參與し、素行も修らなかつたので後に筑紫に流された。道鏡もやはり義洲の門下であつたが、玄昉以上に專横となつた。

【行基】

行基は和泉國大島郡の人で、本姓は高志氏、百濟王の裔である。十五歳出家し、各地を巡つて衆生を教化したが、聽衆時に千人を超え、行基和尚が來たと云へば、附近の民家

四年に完成し、その年四月開眼の式を擧げられた。(前頁挿繪)その時は僧一萬を會し、印度の婆羅門僧正を導師として實に空前の盛儀であつた。

【度々造りかへ】

高倉天皇の時に大佛殿兵火に罹り大佛の頭は焼けた。後白河法皇再興せられたが、正親町天皇の時又兵火に罹り、徳川五代將軍の時代に規模を縮めて再建された。

聖武天皇はあつく佛教を信じたまひ、之をひろめて世の中を太平にみちびかんとおぼしめされ、國ごとに國分寺を造らしめたまへり。ことに奈良には大和の國分寺として東大寺を建て、大佛を鑄て之を置かしたまへり。其の大佛殿は後度々造りかへられしも、高さ十五丈餘ありて、木造の建物にては世界第一といはれ、大佛も五丈餘の高さにて、其の大なるには驚かざるものなり。

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

したまへり。御生れつきなまき深く、貧しき人々のために病院を建てて藥を施したまひ、又孤兒を集めて之を養はしたまへり。

第十 和氣清麻呂

佛教の盛になるにつれて、すぐれたる僧多く出たり。中にも行基は諸國を旅行して、あまたの寺を建て、又道を開き、橋をかけ、池を掘り、舟つきを定めなどして、世の中の便利をはかりたれば、大いに人々より尊ばれたり。されどまた道鏡の如き無道の僧も出来たり。道鏡は八代稱徳天皇の御代に仕へたてまつりて、政治

は皆家を空にして集り禮拜したといふ。その滞在した處に道場を建てたが、その數畿内のみで四十九ヶ所ある。殆ど全國各地にその遺跡と稱するものがあるが、悉く信するわけには行かない。

【人々より尊ばれ】

朝廷からは大僧正を授けられ、世人は行基菩薩と云つた。大僧正は我が國で行基が初めてである。



【政治にもあづかり】

孝謙上皇の寵を受け大臣禪師となつた。これは出家の大臣といふ意味で、職分封戸は凡てこれ迄の大臣と同様であつた。實に空前絶後の官職である。それから上皇重祚して稱徳天皇と申し上げる、その天平神護元年に道鏡は更に太政大臣禪師となり、僧尼の度牒には道鏡の印を用ふることゝなつた。その翌年には法王位を授けられ、月料は天子の供御に準ずることゝなつた。そこで服食悉く天子に擬し、政は大小となく皆自ら決するに至つた。

【勢をふるへり】

當時道鏡の勢は飛ぶ鳥を落すほどで、正月には西宮の前殿に居り、大臣以下の拜賀を受け自ら壽詞を告げたりした。又弟の淨人は布衣より起り八年にして從二位大納言となりその他一族の男女五位以上に敘するもの十人に及んだ。

【へつらへるもの】

これは神護景雲三年のことであつた。太宰の主神習宜阿蘇麻呂と稱するもの、道鏡に媚附して恩賞に與からうと思つ

て、いつはりの神教を奏したのである。何でも道鏡の機嫌をとりさへすれば、必ず利益する所であつたもので、道鏡のなさんとする處は如何なることでも出来たのであつた。

【神の教】

宇佐八幡はこれ迄も度々託宣を下して居られる。聖武天皇東大寺建立の時にも託宣があつた。今日は應神天皇を祭つてあるが、當時の祭神は不明である。



和氣清麻呂の宇佐八幡の神教を申し上る

にもあづかり、すこぶる勢をふるへり、たゞく道鏡にへつらへるもの、宇佐八幡の御告といつはり、道鏡をして皇位に即かしめたまはば、天下太平ならんと天皇に申し上げたり。道鏡これに聞きて大いに喜びしが、天皇は和氣清麻呂を宇佐につかはして神の教

尋常小學國史一巻より

【清麻呂】

清麻呂は備前藤野(今の和氣郡)の人で祖先は垂仁天皇の皇子である。この時勳六等從五位下近衛將監で封五十戸の身分であつた。今で云へば近衛師團の佐官位でもあらうか。それがこの大役を仰せつかることになつたのは、姉の廣虫即ち法均尼が天皇の御信任を蒙つて居たからである。即ち天皇は清麻呂を召して「昨夜夢に宇佐八幡の使が来て、法均尼によつて告げたいとの御事であつたから、汝姉に代つて往いて神誨を受けよ」と宣うた。

【高き官位】

道鏡は官位をもつて清麻呂を誘つた。蓋し道鏡に媚びて高位高官を得たものゝ多い世の中であり、道鏡の一言でどうにでもなる世の中であつたからである。

これに對して清麻呂もより志操の堅い人であつたが、姉の法均尼も亦嚴に彼を戒めて、決して間違の無い様にと云ひきかせたのであつた。

【大隅に流し】

第十 和氣清麻呂

尋常小學國史上巻より

を受けしめたまへり。

清麻呂の宇佐に行かんとせし時、道鏡清麻呂に向ひ、われ汝に高き官位を授くべければ、我がためによくはからふべし、といひて、之をいざなへり。されど清麻呂は忠義の志深く、おのが出世のために其の志をかふる如き人にあらざれば、宇佐よりかへりて、我が國は國の初より、君と臣との別明かに定まれり。決して臣を以て君とすることなし。無道のもの早く之を除くべし、と神の教をば少しもはかるところなく申し上げたり。道鏡大いに怒りて、清麻呂を大隅に流し、なほ途中にて之を殺さしめんとせしが、たましく雷雨はげしくして

清麻呂歸京しての奏聞によつて、道鏡の非望は成るか成らぬかの岐れ目であつた。道鏡は恐ろしい眼付をして清麻呂を見てゐた。(前頁挿繪)併し清麻呂は所信を枉げなかつた。否寧ろ道鏡等の專横を心から悪んで居た。僧侶に對する貴族の代表者であつた。敢然として彼に抗したのである。道鏡怒つて清麻呂を穢麻呂と改めて大隅に流し、法均尼も還俗せしめて備後に流した。



【下野におひやられ】

稱徳天皇崩御の後、道鏡はその御陵の下に住んで居た。その時坂上田麻呂は密かに道鏡の奸計を皇太子に告げ奉つたが、『先帝の厚恩を顧みるに、法によつて刑するに忍びない』とて、造下野薬師寺別當に貶し、即日出發せしめ、その弟弓削淨人及びその三子を土佐に流し、神勅を欺つた習宜阿蘇麻呂は種子島に追はれた。

【重き役に】

清麻呂は召し歸されて播磨員外介となり、更に豊前守に任ぜられた。清麻呂は宇佐八幡の官司等がこれまで屢々神託と稱して妖言をつくるので、一々神前に龜卜を行つてこれを黜陟した。

それから桓武天皇の御代に攝津大夫となり、平安奠都に力を致し、果進して從三位となり功田二十町を給つた。そして延暦十八年、年六十七で薨じ正三位を贈られた。而して明治三十一年に至つて更に正一位を贈られたのである。

【朝廷に仕へ】

【棄兒を拾ひ集め】

飢饉があつて人民が非常に困難し、子が生れても育てることが出来ないで、これを棄てるものさへあるといふ有様であつたので、法均これをあはれみ、人を遣はして八十三人を拾ひ集め、悉く自分の子として養ひ育てた。

【和氣清麻呂の建議】

桓武天皇延暦三年、藤原種繼の建議によつて都を山背國長岡(今の乙訓郡向日町)に遷され、宮殿を造營せしめ、諸王諸臣に邸宅を作らしめられた。併し年を経て尙容易に完成しなかつた。そのうちに種繼が暗討に會つて死んだりしたので、延暦十一年和氣清麻呂の密奏により、更に地を相して遂に今の京都に遷都遊ばされたのである。

【山河うるはしく】

所謂山河襟帯の地で、蒲團着て寝たる姿の東山は殊に優艶の景色を添へ、南は一條の川によつて大阪灣へ舟楫の便があるのので、奈良の都に比べて遙かに便利であること云ふ迄もない。併し長岡京も同じ京都盆地の中であるから、平安

廣虫は孝謙天皇に愛せられて正六位下を授けられ、天皇の落飾し給ふた時廣虫も薙髮して尼となり、尼位進守大夫を授けられ、光仁天皇の時には典藏となり吐納を掌り、桓武天皇の時には正四位上に進み典侍となつた。

【弟と仲よかりし】

姉弟の仲のよかつた事は當時大評判になつてゐたほどで、二人は財産も一しよにして居たといふ。

果さず清麻呂は幸にして其の難をまぬかれたり程なく光仁天皇の御代に、道鏡は下野におひやられしが、清麻呂は召しかへされ、桓武天皇の御代に至るまで、朝廷に仕へてます。忠義をつくし、重き役に用ひられたり、今京都の護王神社にまつらる。わが國の臣民たるものは、皆清麻呂の心を以て其の心となさざるべからず。

清麻呂の姉廣虫も、まごころを以て朝廷に仕へたてまつり、弟と仲よかりしかば、人々感じ合へり、清麻呂の流されし時廣虫も備後に流されしが、また清麻呂と共に召しかへされたり、廣虫はつゝしみ深くして、かつて人

のかげ口をいひたることなく、又なさけ深く、棄兒を拾ひ集めて育てあげたる數八十餘人に及びたりといふ。今廣虫も護王神社に合はせまつらる。

第十一 桓武天皇と坂上田村麻呂

桓武天皇は光仁天皇の御子なり、天皇は和氣清麻呂の建議によりて、今の京都の地を見たてたまひ、其の山河うるはしく便利多きにより、紀元一千四百五十四年延暦十三年都をここにさだめたまへり。ここに於て、四方より集り來れる人民は皆喜びて平安京といふ。これより明治の初まで一千七十餘年の間御代々の天皇おほに比べて俄に優劣は斷じ難い。

【集り來れる人民】

遷都の時の詔に『子來の民、謳歌の輩、異口同辭に號して平安京といふ、亦宜しくこれに従ふべし』とある。平安京の名こゝに起るのである。

【一千七十餘年】

延暦十三年より明治二年まで一千七十六年である。



【おほむね】

桓武以後明治に至るまでの間で、京都以外に都せられたのは、たゞ安徳天皇が一時攝津の福原(神戸市の西部)に都せられたのみである。尤も後醍醐以後四代の所謂南朝は吉野・天野及び賀名生に行宮があつた。

【それよりも大きく】

奈良の都は東西約四千三百六十米、南北約四千九百米であつたが、平安京は東西約四千五百八十米、南北約五千三百四十米であるから少し大規模である。併し街路の配置は殆ど同様で少異あるのみである。

【京を二つに分ち】

中央の朱雀大路によつて東西の二部に分ち、西を右京、東を左京と云つた。(次頁挿圖)そして左右共に南北に四本の大路を開き、東西には一條から九條に至る大路を通じ、更にその間に無数の小路を設けた。併しこれだけの大都が悉く充實したのでは無くて、右京は初めから榮えず、左京のみが繁榮を來し、更にそれが賀茂川を越えて東山の麓にま

で發展したのが今日の京都市である。

【其の他の諸殿】

中央正面に紫宸殿、その後方に續いて仁壽殿・承香殿があり、更に廊下を隔て、常寧殿・貞觀殿、その左右に弘徽殿・麗景殿等、又仁壽殿の西に清涼殿・後涼殿、東に綾綺殿・溫明殿、又紫宸殿の前庭の左右にも春興殿・校書殿などがあつて、その周圍にはこれに附屬する諸建物がある。



尋常小學國史上巻より

むね此の都にましませり。平安京は、奈良の都にならひて、それよりも大きく作らざられたり。其の中央に南北に通ずる大道ありて、京を二つに分ち、東西に縦横に基盤の目の如く、あまたの道路を開けり。大道の北の端に大内裏ありて、其の中に内裏大極殿及び諸官省あり。内裏はすなはち天皇のまします所にして、紫宸殿及び其の他の諸殿あり。大極殿は重き御儀式を行ひ

【重き御儀式】

朝堂院(教師用書上巻一四二頁附圖参照)の正殿を大極殿といふ。天皇臨御して政事を見られる所で、また國儀大禮も行はれる。即ち元旦朝賀式を始め、即位大禮の如きも多くはこゝで行はれた。但し紫宸殿も朝賀・御即位・節會等の諸儀式の行はれる所である。

【平安神宮】

平安神宮は京都市上京區岡崎町にある。官幣大社であつて桓武天皇を奉祀してある。これは明治二十八年の鎮座で、大和の橿原神宮(明治二十一年創立)に神武天皇を祀り、東京に明治神宮を建てられたのと相對して誠にふさはしいことである。

この神宮の拜殿は平安京の大極殿を模したもので、正殿の左右に蒼龍・白虎の二樓があり、神門は朝陽堂の正門を模して應天門と云ひ、何れも碧い瓦に赤い柱で、絢爛眼を眩するばかりである。(次頁挿圖)

【平安京圖】



尋常小學國史上巻より

現在の京都市と昔の平安京とを示したもので、(平安神宮) (御所)などの様に括弧の中にある名稱は概ね現在のもの。平安京當時には無かつたものである。

平安京の最も隆盛を極めたのは桓武天皇以後約三百年間で、その後園地・別宮・神社・佛閣など多く東山方面に起つたので、左京の繁盛に反して右京は次第に寂れた。その後屢屢戦亂の巷となり、應仁の亂には殊に荒廢甚かつた。



【大極殿】（挿繪）

(イ) 蒼龍樓 (ハ) 白虎樓  
(ロ) 正殿 正面に九段の石階、中には高御座を安置し、聖上出御になつて百官の賀を受けさせられる。

正面に旗を立てならべ、群臣列を正してゐる。これは元且朝賀の式を挙げられる圖である。背後の山は北山。

【日本の海岸】

齊明天皇の四年四月阿倍比羅夫舟師一百八十艘を率ゐ、今の秋田・能代地方の蝦夷を服せしめ、翌年再び舟百八十艘を以て今の北海道の蝦夷を伐ち、膽振・日高に至り、後志に政所を置いて歸つた。

その後比羅夫は更に肅慎を討つた。これは今の滿洲の北部で、常に蝦夷を煽動して反亂せしめてゐたものである。

【太平洋にのぞめる地方】

これは主として陸奥、即ち今の奥羽東岸地方を指したものである。阿倍比羅夫の征討以來、蝦夷は久しく反しなかつたが、元明天皇の頃から又屢々騒亂を起し、主として陸奥

の方面へ征討の師を向けられた。

【しばくそむき】

元明天皇の頃度々叛亂があつたので出羽柵を築き、聖武天皇の時には陸奥の蝦夷が反したので又征伐、陸奥に多賀城を築き、又鎮守府を置いた。それから又光仁天皇の時には度々反亂し、征討の軍をむけられたが功が擧らなかつた。そして桓武天皇の時代となつた。



尋常小學國史上巻より

【征夷大將軍】

これは臨時に設けられた官で、陸奥の蝦夷を鎮撫するためのものである。大將軍の下に副將軍・軍監等があつた。元正天皇の時始めて征夷將軍の名があり、聖武天皇の時始めて大將軍があつた。桓武天皇に至り大伴矛麿を征夷大將軍とし、田村麻呂は副將軍となつたが、その次に田村麻呂が大將軍に任ぜられたのである。後にはこれが常置のものとなり、頼朝以來は天下の政權を握るもの、稱となつた。

【生れつき武勇】

身長五尺八寸(百七十五糎)、胸の厚さ一尺二寸(三十六糎)目は鷹の如く、鬚は黄金の糸筋の如く、身を重くすれば二百一斤、軽くすれば六十四斤で、どんなにでも思ふままになつたといふ。(妙な話である)怒つて眼を廻らせば獣も倒れ、笑へばなつかしく稚子も抱かれたと傳へられる。

【いたる所にて】

田村麻呂大將軍となり更に節刀を賜はつたので、二十年九月蝦夷を討ちて大に破り、今の岩手縣釜石の附近に追ひつ

尋常小學國史上巻より

田村麻呂の功

呂を征夷大將軍として之を討たしめたまへり田村麻呂は生れつき武勇にして、しかもなまじけ深く、怒る時は猛獸も恐れてにげ笑ふ時は稚兒もなつきてはひよたりといふ田村麻呂兵をひきゐて發し、いたる所にて賊を破り、遂に今の陸中に進みて賊を平げしかば、これより東北の地方始めてしづまれり。

田村麻呂は其の功によりて、重く賞せられ官位もしだいに進み、第五十嵯峨天皇の御代に至りて薨せり。天皇は

めて全滅せしめた。それから膽澤城を作り、又志波城を築き、二十三年十一月更に大に蝦夷を征せんと計畫があつたが、中止になつた。

【官位もしだいに進み】

近衛將監から少將となり、延暦二十四年參議、それから累進して中納言、侍從、兵部卿、正三位となり、嵯峨天皇の時大納言となつた。弘仁二年五十四で薨去した。



【武器をそへて】

平安京の護りとして、特に武器を添へて葬らしめられたものであらう。甲冑・劔・矛・弓・箭・繡・鹽等を埋めたことである。繡と鹽は征討の際の携帯行糧である。但し死屍に武器を添へて葬ることは古代からの風で、必ずしもこれが始めといふ意味では無い。

【蝦夷征伐要地】

多賀城Ⅱ鎮守府・陸奥國府のあつた所(宮城郡多賀村) 元正天皇の時に創設、聖武天皇神龜元年に完成した。

膽澤城Ⅱ田村麻呂の築いたもの、兵四千を置いた。(膽澤郡志波城Ⅱ又田村麻呂の築く所。宇佐村)

秋田城Ⅱ聖武天皇の御代に出羽橋を移したものの、(秋田郡泉村) 軍士を置き蝦夷に備へ、出羽介をして守らしめた。

【數代の間】

桓武の次、平城天皇の時には藤原宗成の反あり、嵯峨天皇の時には藥子の亂があつた。併し大體に於て世はよく治まり、遣唐使は次第に少くなつたが、唐の文化は已に上下に侵

【讃岐の人】

空海は讃岐の多度郡の人で本姓は佐伯である。その誕生の地は今の普通寺町の西方で、普通寺の境内は空海の父普通の邸宅のあつた處、そこで空海は生れたのである。

【神童の生まれ】

空海は幼にして非常に聰明で、外舅阿部大足から儒教を學び、十八歳京都に出て大學の明經科に入つたが、あまり學ぶほどのことが無かつたといふ。二十歳出家して如空と號し、奈良の大安寺で三論を學び、延暦十四年に東大寺で具足戒を受けて空海と改めた。

【唐に渡り】

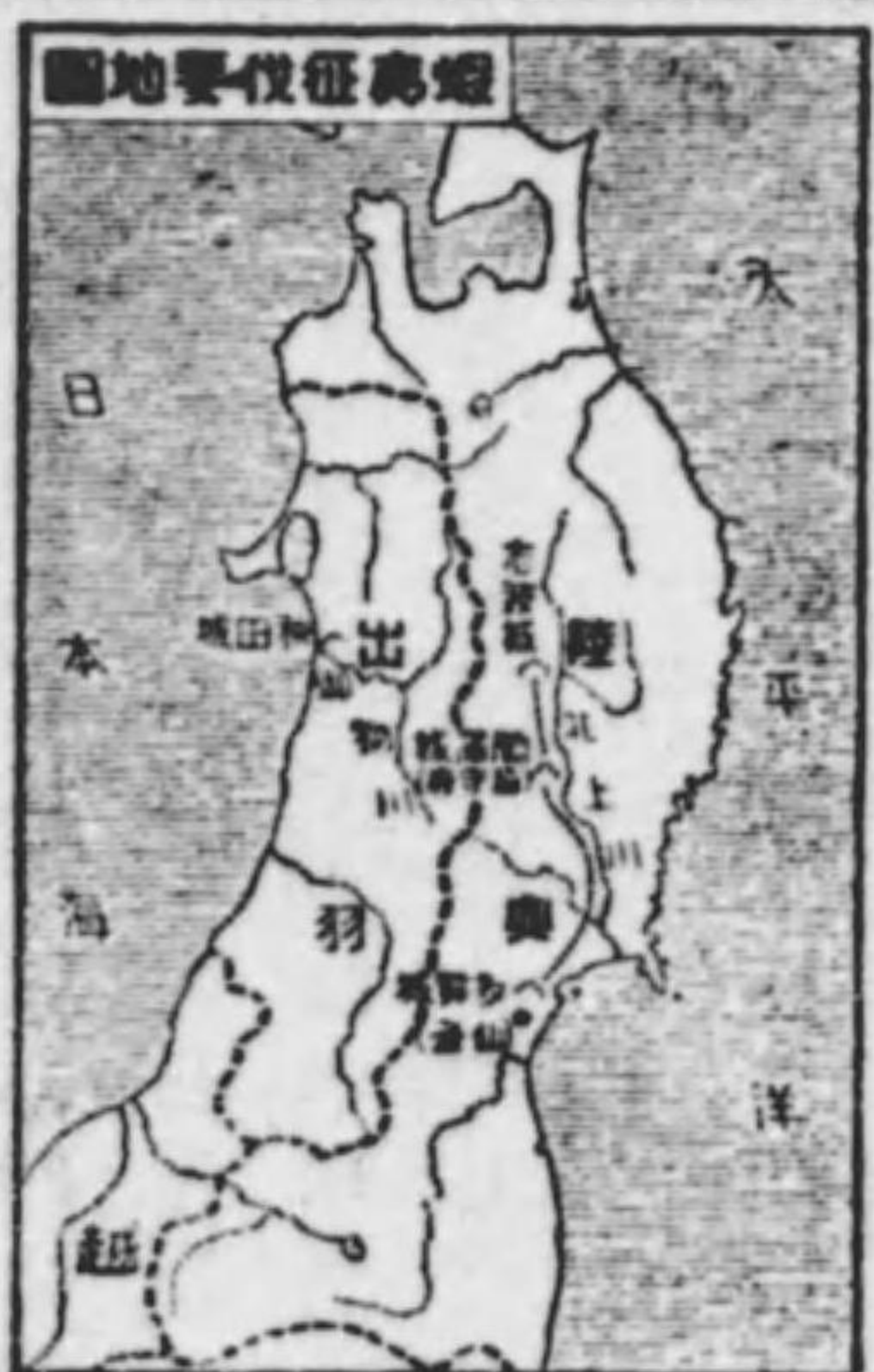
延暦二十三年最澄と共に遣唐使に従つて唐に渡り、長安に至り青龍寺の惠果について眞言宗を學び、兩部曼荼羅祕密法を授かり、又般若三藏から梵語を學んだ。そして在唐二年餘、平城天皇の大同元年に佛書や儒書數百部をもつて歸朝した。

【眞言宗を傳へ】

潤し、次第に我が國固有の文化に同化せんとする時で、蝦夷も鎮定し西南諸島も服屬して、天下は先づ太平であつた。

【新しき宗教】

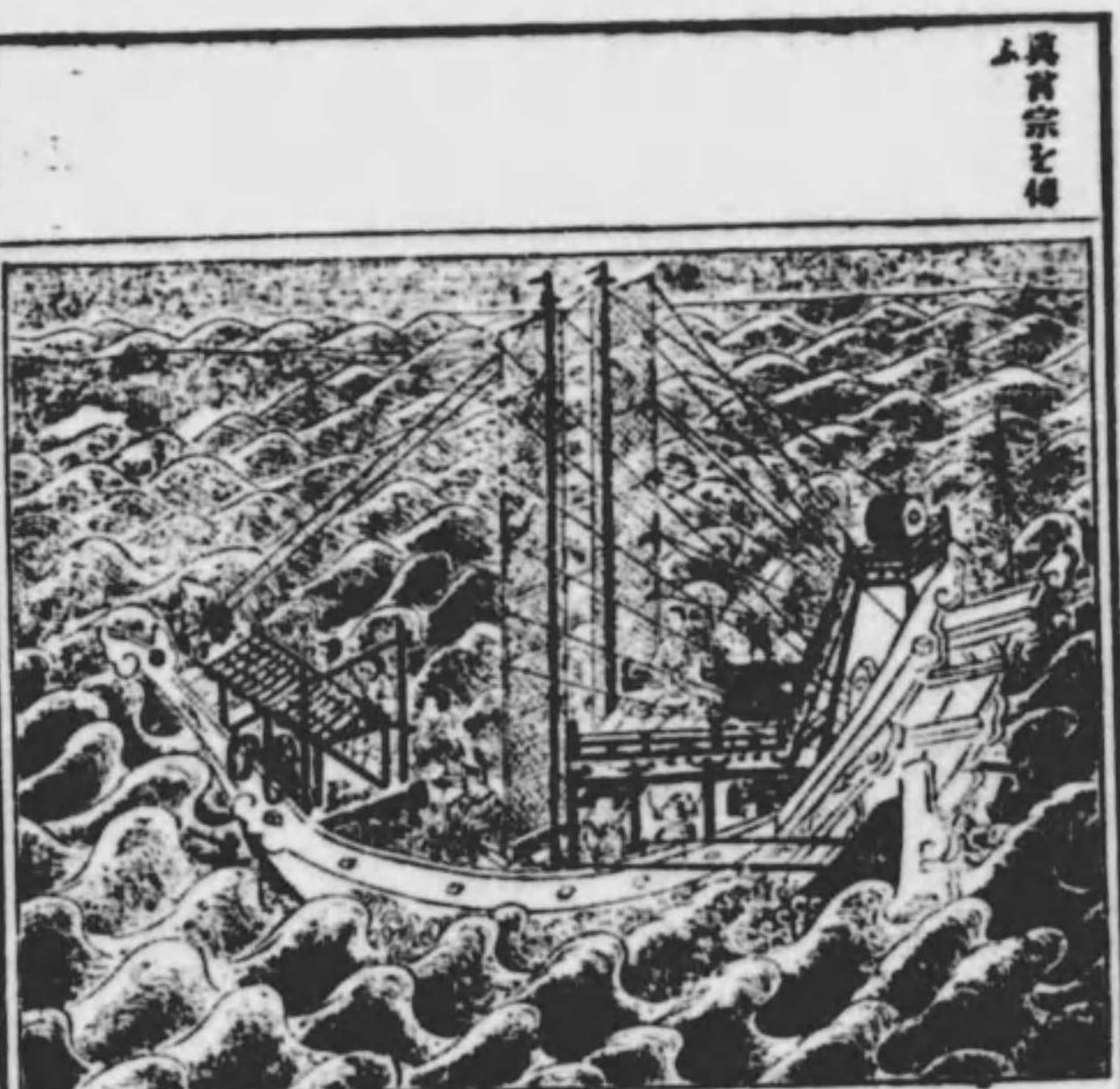
これまでの佛教は三論・成實・法相・俱舍・華嚴・律の六宗で、その中法相最も勢あり、名僧も輩出したが、玄昉・道鏡等の惡僧も出て弊害が大となつた。そこで朝廷は天台・眞言等の新宗派を信仰せられたのである。



墓地を山科にたまはり屍を平安京に向はせ武器をそへて葬らしめたまへりこれより後將軍となりて出征する人々は此の墓に參詣して武運をいのれりといふ。

第十二 弘法大師

桓武天皇より後數代の間は天下よくをさまり新しき宗教も傳はりて世の中いよく開けゆけり。



此の頃空海といふ名高き僧あり、讃岐の人にして生れつき賢く、神童の生まれありし上に、ますます學問にはけみ遂に桓武天皇の御代に唐に渡りて佛教を學び、三年の後かへりて我が國に眞言宗を傳へたり空海はことに嵯峨天皇の

歸朝後高野山を開いて眞言宗を弘めたが、後朝廷から東寺を賜はり、こゝを眞言宗の根本道場とした。

空海は唐で學んだ眞言宗に自己の説を加へて弘めたもので随つて日本の眞言宗は支那・印度の眞言宗とは別である。

【挿繪】

上甲板に座するは遣唐使藤原葛野麻呂と弘法大師、その下は水夫、左方は隨員などである。「大師行狀繪卷」の一部。



【御信任】

嵯峨天皇は非常に學問をお好みになつたので、空海の學問のよく出来るのを愛されて屢々宮中へ召し出され、尊卑の別をお忘れになつて學問のお話をなされたといふことである。嵯峨天皇は又書がお上手であらせられ、橋逸勢も能書であつたので、空海と合せて世に三筆と云つてゐる。空海が高野山を開くについては、特に天皇に願ひして弘仁七年七月に勅許を得たのであつた。

【京都に學校をおこし】

これは綜藝種智院と稱し、淳和天皇の時空海の創立したもので、教科書は佛典を主とし傍ら儒學をも教へた。教員は僧俗共に用ひ、入學者は非常に多かつた。當時は學校と云へば、貴族のみの入る所であつたから、平民的に誰でも入學させたことは、學問を廣める上に大効があつた。

【應天門の額】

應天門の應の字の最初の點を忘れてゐたと云ふのであるが空海ほどの學者にあるまじきことであり、筆をなげあげた

【萬農池】

琴平の南東にある。周圍が八軒餘もある大きな溜池である。空海が穿つてから後、年を経て次第に埋もれてゐたのを、寛永三年に再び開鑿したのが今日のものである。この地方は人口が多く土地が早くから開けてゐるが、大河も乏しく雨も少いので、水田を開くには溜池が絶対に必要なもので、到る所に澤山出来てゐる。

【世の中の利益】

道路を開いたり橋をかけたたり、井戸を掘つたり木を植えたたり、世の中のためになることを計つたことは行基に似てゐる。四國には殊にその遺跡が多く、所謂八十八ヶ所を巡拜する遍路は今も頗る盛である。

【上下のうやまひ】

嵯峨天皇は勿論、次の淳和天皇も空海に歸依せられ、天長元年の早魃には雨請ひの經法を修して靈驗をあらはし、仁明天皇の時には宮中に眞言院を建て、後七日（正月八日）から七日間）の修法を勤めしめられた。下一般人民の尊崇し

なども信ずることは出来ぬ。勿論單なる傳説で、『弘法も筆の誤』とはこれから云ひ出したものである。五本の筆を口と兩手と兩足とに執つて、一度に壁にとびついて書いたといふ様な傳説もある。

【空海の文字】

これは兒童が見てあまりよい字と思はないであらう。教師用書の寫眞版にもつとよい字があるから見せるがよい。

御信任を得て、始めて高野山を開きしが、これより此の宗大いにひろまりて佛敎はますます盛になれり。

空海は學問深く、京都に學校をおこして、實きと賤しきとの別なく廣く人々の入學をゆるして、之を教へたり。又詩文をよくし、ことに文字にたくみなりき、かつて朝廷の仰を受けて、應天門の額を書きしに、其の額を門に打ちつけたる後、一つの點を書きおとしたるを知り、額に向つて筆をなげあげて、たくみに其の點をおぎなひたりといひ傳へたり。かのいろは歌も空海の作るところなりといはる。又讃岐にて萬農池の堤を築くに當

**忠孝**

學問をひろおこす

世の利益を

尋常小學國史上卷より

尋常小學國史上卷より

り、たやすく出来上らざりしに、空海その工事を助くるに及びて、人々四方より集り來りて、遂に之を成しとげ、人民はながく其の益を受けたり。かくて空海は世の中の利益をおこしたること多く、上下のうやまひもいよいよ厚くして、後に朝廷より弘法大師といふおくり名をたまはりたり。

第十三 菅原道真

平安京の御代の初の頃は、朝廷の御威光すこぶる盛なりしが、間もなく藤原氏勢をふるふに至れり。藤原氏は其の先祖鎌足の大功をたてしより、世々大臣

弘法大師のたまはるおくり名を

藤原氏政治をほしむるまじき

たことは今更云ふまでもない。

【おくり名】

凡て死後に追贈する名をおくり名といふ。天皇に諡することとは文武天皇の時に始まり、臣下は王朝時代から太政大臣であつたものに贈られることになつた。僧侶の死後大師號を贈られたのは最澄の傳敎大師が始めて、何れも勅號であるが、後には勅號でないものもある。



【おほむね此の氏より】

桓武天皇の夫人、仁明天皇の女御、文徳天皇の皇后、清和天皇の皇后など皆藤原氏の女で、文徳天皇から後冷泉天皇まで十六代の間に、藤原氏の后妃の生みまづらぬのはたゞ宇多天皇のみである。その外戚關係が如何に長く続いたかを知ることが出来る。

【高官にのぼるもの】

右大臣も左大臣も多く藤原氏から出てゐたが、良房は太政大臣となつた(天安元年)。これは皇太子の任であつて、人臣がこれに任ぜられたのは良房を始めとする。而して以後良房の子孫がこの官を獨占し、良房はやがて攝政となつた(天安二年)。これも元來皇后又は皇太子に限つたものである。それから子の基經が攝政となり、後更に關白となつた(仁和三年)。その後藤原氏は常に幼帝を立て、攝政となり天皇長じ給へば關白となる例となつた。攝政も關白も仕事は同じで、凡ての政事を悉くとり行ふのである。

【學者の家】

天皇親政の初め道眞を抜んで藏人頭として機密にあづからしめられ、次で參議を経て權大納言となり右近衛大將を兼ねた。その昇進の早いこと異數とすべきで、如何に御信任が篤かつたかがわかる。

【御父の御志】

天皇讓位の時遺戒を作つて醍醐天皇を戒められた。これを『寛平御遺誡』といふ。その中に「道眞は鴻儒で又深く政事を知る。朕選びて博士となし多く諫止を受けた。皇太子を立てる時も道眞一人と謀つて定めたもので、讓位のことも全く道眞の意見に従つた。故に道眞は朕の忠臣といふよりも新君の功臣である。大功忘るべからず。これを慎め」と仰せられてゐる。これによつて醍醐天皇は道眞を右大臣とせられたものである。天皇の御即位の時は御年甫めて十三であつた。

【ならびて】

右大臣よりも左大臣の方が上位であるが、道眞は己に年五

道眞は野見宿彌の裔で、曾祖父古人は儒學で名高く、光仁天皇の時侍讀となつた。その子の清公も亦漢學に長じ、嵯峨・光仁二朝の侍讀である。その子は善は即ち道眞の父で仁明・文徳・清和の三代に歴史し文章博士となつてゐる。

【詩を作り】

十一歳の時始めて作つた詩は『月耀如晴雪、梅花似照星、可憐金鏡轉、庭上玉房馨』といふのである。

とされるもの多く、光明皇后より後御代々の皇后またおほむね此の氏より出てたまふこととされり。されば其の一門には攝政關白の高官にのぼるものありて、朝廷の政治をほし、に、此の氏に縁なきものは全く勢を失ひたり。  
第五十代宇多天皇は、かねてより藤原氏の勢のあまりに強きを憂へたまひ、菅原道眞を用ひて其の勢を分たんとしたまへり。道眞は學者の家に生れ、をさなき時より學問にはげみ、十一二歳にしてよく詩を作り、やがて大人にもまさりたる學者となれり。殊に心正しき人なれば、朝廷に仕ふるに及びて、天皇の御信任すこぶるあつかりき。

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

宇多天皇について、御子醍醐天皇御位に即きたまふ。天皇は御なさけ深く、寒夜に御衣をぬぎて、貧民のつらさを思ひやりたまひしほどの明君にましませり。されば、天皇また御父の御志をうけて、道眞を右大臣とし、左大臣藤原時平とならびて政を行はしめたまへり。然るに時平は家がちなれど、年若く、學問も智慧も道眞におとり、天皇の御信任もまた道眞の如くあつからざりしかば、不平にたへずして道眞を天皇に讓せり。道眞は之がために官をおとされて、筑前の太宰府にうつされたり。

十を超えて事を行ふに中正、裁決流るゝ如く人皆心服して居たが、時平は年若く内行修らず、裁決當を失して人望が無かつた。而も二人が朝政を並び執つては統一が無くて困るといふので、天皇宇多法皇と議して道眞一人に裁決せしめようとせられたが、道眞固辭して受けなかつた。

【天皇に讓せり】

道眞異圖あり廢立を圖ると密奏したのである。



【愛せる庭の梅】

道真は非常に梅を愛してゐた。九歳の時庭前の梅花を見て和歌を作つたといふ。故に各地の天満宮には多くの梅樹を植えてゐる。太宰府の天満宮には京都から主人を慕つて飛んで来たといふ『飛梅』があり、名物に『梅ヶ枝餅・飛梅粉』などを賣つてゐる。

【門より外に】

太宰権帥に任せられたのであるが、勿論これは名ばかりで實際の事務に携るわけでは無いから、太宰府の役所へは一日も出なかつた。それは道真の居所とは僅かに數百米を距つるのみであつたが、『都府樓(太宰府の樓門 纒看ニ瓦色)』と云つた通りで、ひたすら謹慎してゐたのである。

【忘れたてまつらざりき】

罪なくして配所に赴いても、天皇をお恨み申すどころか、片時も御忘れ申し上げることは無かつた。天皇は御年僅に十七歳で、時平以下多くのものが入りかはり立ちかはり讒言を奏するので、一時お惑ひになつたのだといふことは、

道真のよく承知してゐる所である。宇多法皇が驚いて天皇を諫めようとせられた時には、時平の部下が邪魔をしてお會はせ申さなかつたのである。

【去年の今夜】

道真の左遷は延喜元年正月であるから、その前年即ち昌泰三年の九月のことである。内裏へ召されて観菊の御宴に侍り、詩を上つて御感に入つたのである。(國語十の二十三) 太宰府まうで

道真家を出づる時常に愛せる庭の梅を見て、なごりををしみ歌をよみていはく、

こちふかばにほひおこせよ梅の花、  
あるじなしとて春をわするな、

とそれより遠き海路を渡りて筑前に至り、其の後も身をつゝ、しみて門より外に出づることなく、かた時も天皇の御事を忘れたてまつらざりき。かくて春去り夏過ぎて九月十日となりし時、去年の今夜は宮中の御宴にはべり、詩をたてまつりて御感に入り、御衣を賜はりしことを思ひ出して感にたへず恩賜の御衣をさへ、けて君恩のかたじけなきを思ひ、詩を作りて其の心を、べ

尋常小學國史上巻より

【後に】

道真の薨じたのは延喜三年で、官位を復せられたのは延喜二十三年(延長元年)である。その間に京都には度々火災があつたり落雷があつたり、又延喜九年には時平が薨じ、その女の女御も御孫の東宮も不意に薨せられ、時平の長男も二男も次々に薨ずるといふ有様で、これこそは道真の祟りであらうといふ説が専ら盛になり、遂に朝廷に於てもその官位を復した上、左遷の時の宣旨その他の書類など悉く焼棄てられた。蓋し無實の罪で筑紫の果に薨じた道真には一世の同情が集つたのである。

【高き官位】

道真の本官を復された時正二位をお贈りになつたが、その後、一條天皇の時更に左大臣正一位を贈られ、ついで又太政大臣を贈られた。

【天満天神とうやまひ】

京都の北野に天満宮を建てたのは民間でやつたことだが、貴賤を別たす崇敬愈々盛で、一條天皇の時から官祭を行は

尋常小學國史上巻より



せられ、遂に天皇この社に行幸あらせられるに至り、所謂北野行幸といふことが始まつた。今この宮は官幣中社である。又筑前の太宰府神社は道真の廟所に神殿を築いたもので、やはり官幣中社である。

【挿繪】

『北野縁起繪詞』の中にこれに似た繪がある。御衣は鳳凰文のある御袍、笄には菊の御紋章がついてゐる。



【系圖】

不比等―房前―眞柄―内麻呂―冬嗣  
即ち冬嗣は不比等から五代目にあたるのである。

【ひとり朝廷の政治を】

道眞は右大臣であつたが、その左遷せられた日に、源光が代つて右大臣となり、左大臣の時平と共に政治に携つた。この光は時平と共に道眞を讒言した張本人の一人であるから、よく時平と協調してやつた。相應に識量のある男で、よく天皇を輔けまつつて善政をしいたが、或時獵に出て馬から落ちて非業の最後を遂げた。

その後は左大臣も右大臣も共に藤原氏から出る様になり、更に良房に至つては太政大臣となつて政權を一手に握つたから『ひとり朝廷の政治をとり』と云つたのである。

【一己の榮華】

村上天皇の時忠平は關白・太政大臣、その子の實賴は左大臣、師輔は右大臣で、父子三人で三公に列した。次の冷泉天皇の時は實賴が關白・太政大臣でその弟の師尹が右大臣

【三人まで皇后】

道長の女彰子は一條天皇の中宮、後一條後朱雀兩天皇の母で上東門院と云ふ。

同研子は三條天皇の中宮

同威子は後一條天皇の中宮

同孀子は後朱雀天皇が皇太子たりし時の妃で後冷泉天皇の母である。(五八頁参照)

中宮といふのは元來皇后の別稱であつたが、彰子が一條天皇の中宮となつた時は、別に道隆の女が皇后であつた。この皇后・中宮並立の場合に於ても共に嫡妻であつて、何等の區別は無い。故に中宮は皇后として教へてよい。

【道長攝政となり】

道長は一條天皇の長徳元年に右大臣・内覽となり、その後二十二年を経て長和五年、後一條天皇即位の時に攝政となつた。そして翌年子の頼通を攝政として己れは太政大臣となつた。内覽は萬機を實行する役で關白と大差ない。尙頼通の攝政關白は五十餘年に亘つた。(五七頁参照)

(左大臣は源高明)であつた。次で圓融天皇の時は實賴が攝政となり、その薨後師輔の子伊尹これに代り、その薨するや二弟兼通・兼家攝關の職を争ひ、見苦しい争鬭があつて攝關の職は頼忠・兼家相つぎ、更に兼家の三子道隆・道兼・道長が相次で攝關となつた。(五八頁系圖参照)

【三十餘年の間】

一條天皇長徳元年より後一條天皇萬壽四年まで三十三年。

る所に社を建てて之をまつれり。

藤原氏の子孫

第十四 藤原氏の専横

菅原道眞しりぞけられて、宇多天皇の御志むなくなりし後は、藤原氏ますます勢を得ひとり朝廷の政治をとりて、日夜遊樂にふけりたりかくて其の一門の榮華は、藤原道長に至りてきはまれり。

道長は時平の弟なる忠平の曾孫にして、六十一條七十三條六十六後一條三天皇の御代に三十餘年の間、朝廷に

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

ありて勢をふるひ其の女は三人まで皇后となり、其の外孫に當らせたまふ皇子は三人まで引きつゞきて御位に即きたまへり、後一條天皇の御代道長攝政となり、其の女ついで皇后に立ちし時道長喜にたへず歌をよみていはく、

このよをばわがよとぞ思ふ、もち月の

かけたることもなしと思へば、

と此の歌は、おのが望の皆かひたるを十五夜の満月に引きくらべて、此の世はおのれ一人のものぞといふ意味にして、其の榮華にほこれるさまを知るべし。かくて道長の富は皇室にもまさり、思ふまゝにおごり

道長は驕奢を極め、或は文武百官を従へ華美なる唐車に乗りて石清水社に參詣し、或は賀茂社に詣で馬に乗つて社前を過ぎ、或は郷相を率る馬に乗つて比叡山に登つた。

【富は皇室にもまさり】

その頃地方に莊園といふものが出来た。多くは税を納めないう私所有地であるから、その増加は朝廷の收入と反比例する。而して藤原氏は全國に亘つて廣い莊園を有した。



【京都に建て】

道長は深く佛教を信じ、屢々佛事を營み又佛像を造り經文を寫しなどし、木幡には淨妙寺を建てたが、尙足れりとせずして法成寺の建立を思ひ立つたのである。法成寺は東京極即ち今の御所の東側に建てられた。道長は東大寺で受戒したので、その際その堂宇の宏壯なのを見て、これに負けないものにしようと考え、諸國に命じて巨材・奇石を運ばしめ、日々何萬の役夫を集め、日夜工作を急がせたもので國家の財用を費し、民力を疲弊せしむること大であつた。

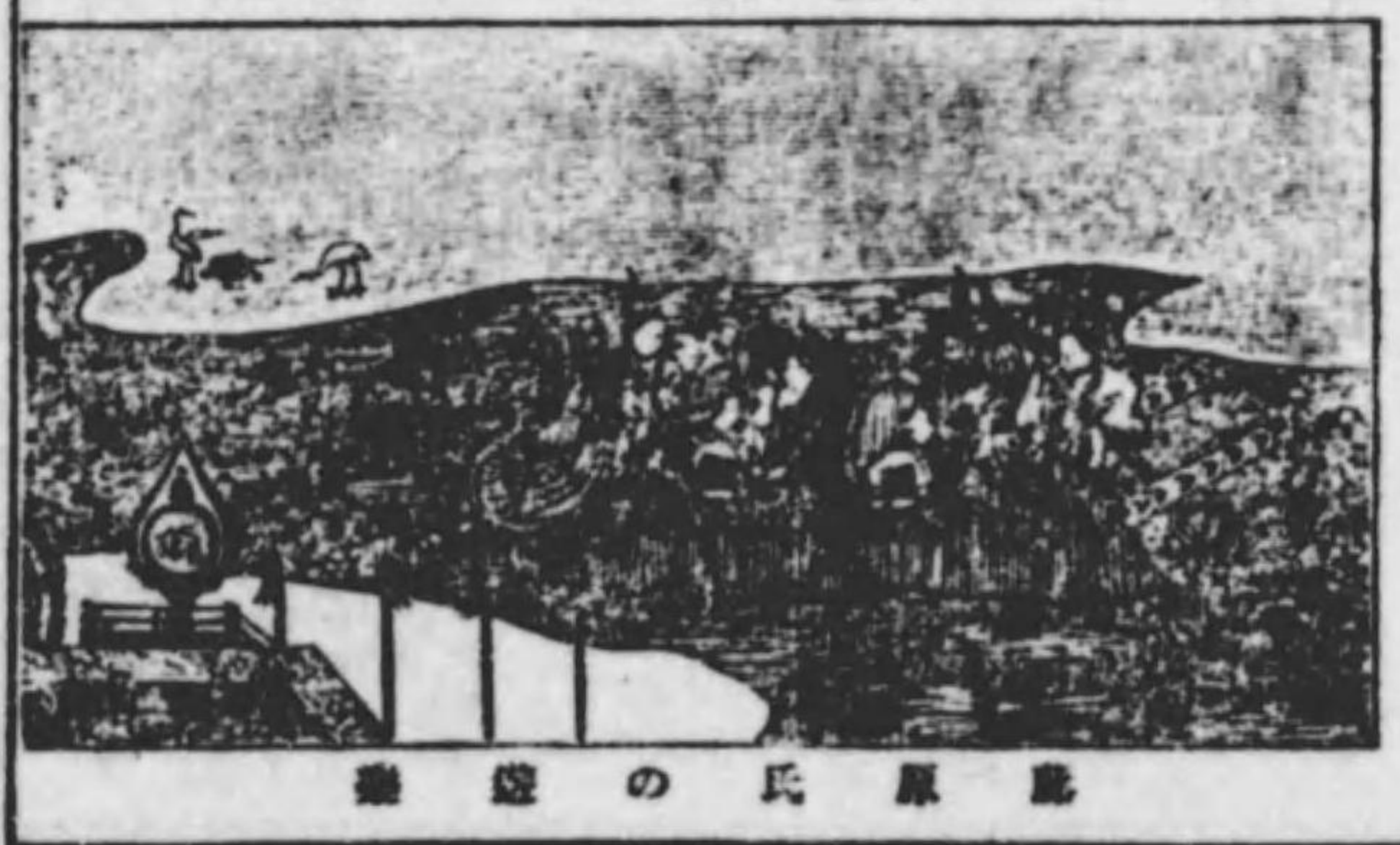
【宮中・諸官省】

この寺に用ふるために宮中や神泉苑などの石を運ばせたといふ。實に僭越極まることである。

【藤原氏の遊樂】（挿繪）

これは此頃に於ける貴族一般の遊樂の模様を示したもので船は龍頭の船である。又鶴首の船（鶴とは鷺に似た水鳥）もある（高一國史）。寢殿造といふ宏壯な邸宅の庭には、池を穿ち島を築き橋を架け船を浮べてゐた。又別莊を建て、鹽

釜の景を摸したり、天橋立の景を作つたものもある。詩歌管絃が盛に行はれ、船を浮べて一日を遊樂に費したり、或は歌合・詩合・前裁合・圍碁・雙六・蹴鞠・打毬などの遊戯もあり、或は野外に遊獵したりした。又宴會が非常に多く、大臣・大將の大饗をはじめ、花の宴・月の宴・三節・節供など、夜を徹して淫樂に耽つたものである。この繪は『駒競行幸繪詞』の一部、後一條天皇が船樂を天覽の模様である。



藤原氏の遊樂

尋常小學國史上卷より

をきはめたり。かつて法成寺を京都に建てしが、此の寺は奈良の東大寺にも劣らざる大寺なり。其の時道長は、ほしいま、に公卿等に命じて宮中諸官省などにある石を取りて建築場に運ばしめたり。然るに工事の出来上らざるうちに、道長病にかかりしかば、其の子頼通令を下していはく、朝廷の事は後まはしとすとも、法成寺の御用は

【國々のつかさ】

諸國には國司・郡司といふものがあつたが、それ等は私曲を行ふものが多いので、巡察使などいふ監督機關も置かれてゐたが、併しそれは殆ど效果なく、地方官の弊政日に甚しく、彼等は官物を犯したり税金を横取りして私腹を肥やし、收斂を事として人民を苦めることを何とも思つてゐなかつた。それは今日の支那の地方官に似たところもあつた。殊に莊園が増加して租調が減少するので、益々誅求を事としたものである。従つて朝廷のことをさしおいて、法成寺の事に専念する位は何でもない事であつた。況や攝政頼通が公然と命令するに於ておやである。

【ことの外早く】

着手したのは萬壽三年であるが、道長の病氣がよくないといふので非常に工事を急いだ。そして翌年の秋には出来上つたのであるが、その時道長は己に危篤の状態であつた。そしてこゝに移轉すると間もなく薨じたのである。

【相つらつた】

尋常小學國史上卷より

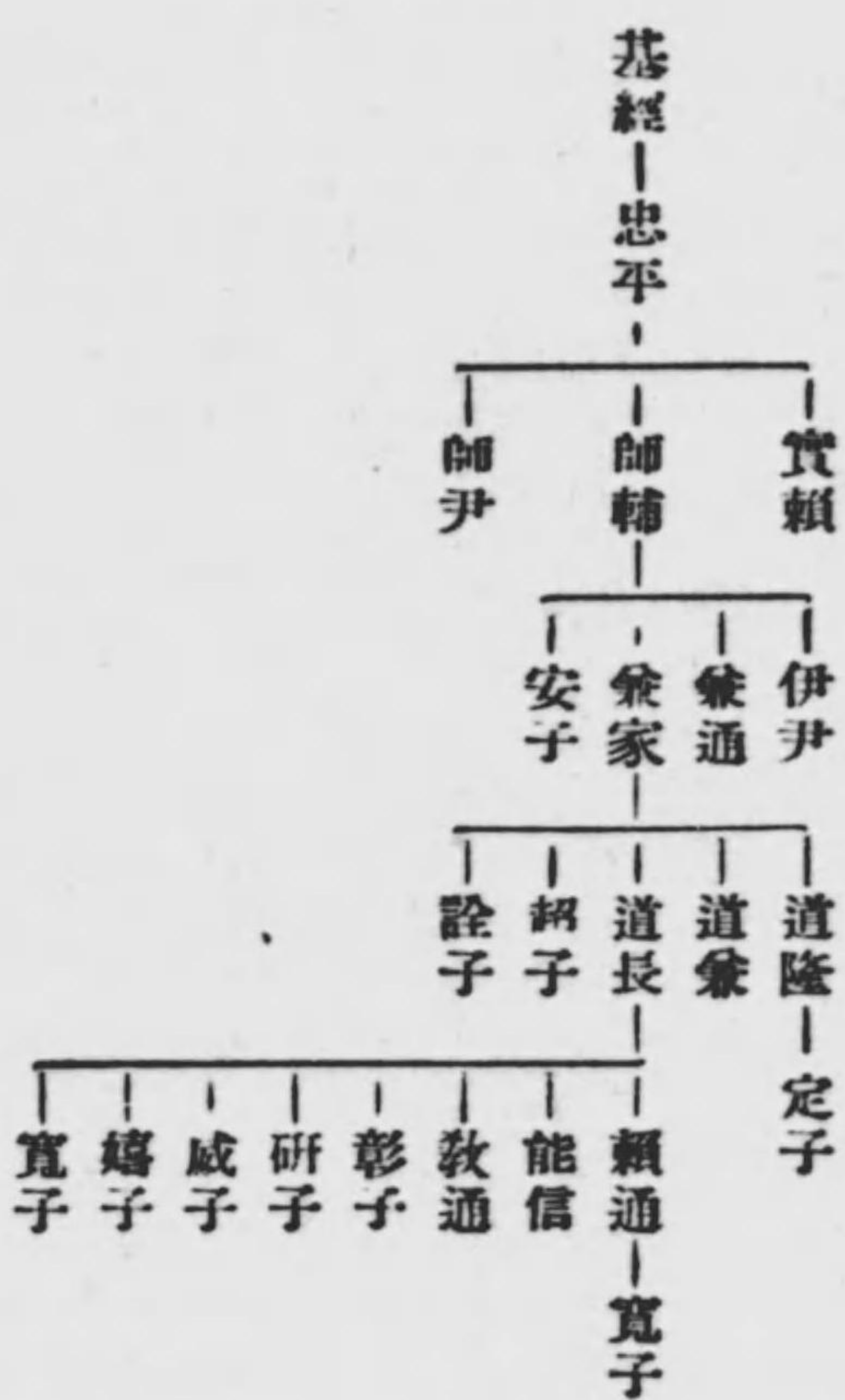
忘ることなかれ。こゝに於て公卿等はきそひて日々數多の工夫を出し、國々のつかさは朝廷にたてまつるものをさしおきて、まづ此の寺の材木瓦などをさし出せしため、工事ことの外早く出来上り、道長しばらくこゝに居りて薨せり。道長父子の朝廷をおそれたてまつらざることかくの如く、頼通及び其の弟教通も相ついで攝政關白となりて專横をきはめたり。



頼通は後一條天皇の寛仁元年に攝政となり、同三年に關白となつた。それから後朱雀天皇の時から次の後冷泉天皇の時にも依然として關白で、前後通じて五十一年であつた。頼通の驕奢は父道長以上であつたといふ。次で後三條天皇の親政があつて藤原氏の勢漸く衰へ、白河天皇の時になつて教通と師實とは相ついで關白になつたが最早始めの如く權力を振ふことは出来なかつた。



【系圖】

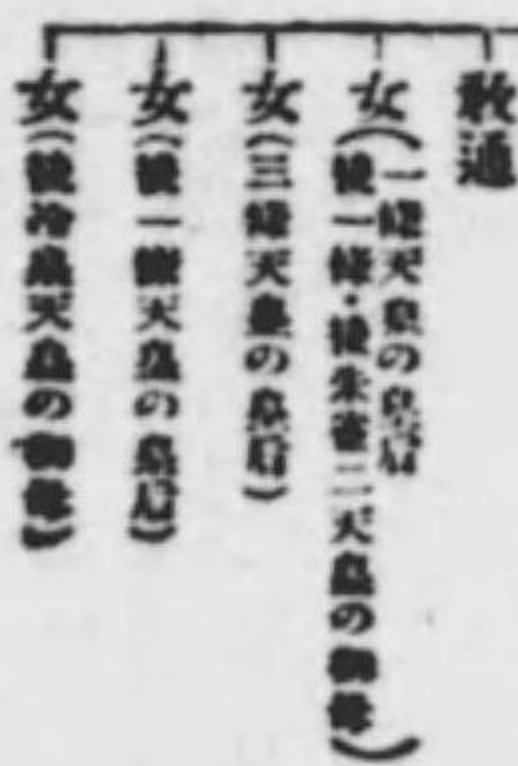


後朱雀天皇は位を後冷泉天皇にお譲りの時、後三條天皇を皇太弟にしようとの思召であつた。然るに頼通はこれを喜ばず、御同意申上げなかつたが、頼通の弟能信の盡力によつて皇太弟となられたのである。

【挿繪】

天皇に對座して御進講申し上げてゐるのが碩學大江匡房、その右に居るのは右大臣源師房である。

藤原忠平—師輔—兼家—道隆—頼通



第十五 後三條天皇

藤原氏の勢の最も盛なりしは道長と頼通との代にして、<sup>七</sup>後三條天皇出でてたまふに及びて其の勢衰へ始めたり。

後三條天皇は<sup>十</sup>後冷泉天皇の御弟にして、御年十二にて皇太弟となりたまひ、東宮にいませしこと二十餘

尋常小學國史上巻より

【後三條天皇】

後三條天皇は藤原氏の專横を抑へられた明君である。御即位になつたのは治暦四年七月で、御年三十五であつた。豫てから頼通等の專横をお惡みになつてゐたので、御即位の日から政を親らせられ、一切他人の干渉を受けず、事苟も理に合はなければ、何人の言をもお用ひにならなかつた。爲に政府の内部肅然として、皇室の威權俄かに加はつた。

【皇太弟】

【御母は】

後三條天皇の御母は三條天皇の皇女禎子内親王で、後朱雀天皇の皇后陽明門院であらせられた。醍醐天皇以來、歴代の天皇は皆藤原氏の后妃の生みまつる處であつたから、その皇太弟におはすことを頼通が好まなかつたのは勿論のことである。尤も頼通はその女寛子を後冷泉天皇の女御として次で皇后としたけれども、寛子は皇子を生み奉らなかつたので、如何とも出来なかつたのである。

【專横なるふるまひ】

頼通の驕奢專横は父道長以上であつたといふ。後冷泉天皇は英明にして學を好ませられ、學才のあるものを擢んで、要路におかせられたが、併し頼通の權威を抑壓し給ふことがどうしても出来なかつた。後三條天皇は皇太弟としてこの有様をながめられ、何とかしてその權力を抑へたいと思召したが、御即位までは隱忍自重しておはしたのである。

【大江匡房】

匡房は八幡太郎義家に兵法を授けたので有名な人である。

尋常小學國史上巻より



三條天皇の御母は禎子内親王

年に及びり。然るに天皇の御母は藤原氏にあらせられざるを以て、關白頼通は其の東宮にいますことを好まず、勢にまかせて專横なるふるまひ多かりしが、天皇はよく之を忍びたまひ、大江匡房を師として學問にはけみ内外の歴史

(六七頁參照) 幼い時から神童と云はれたほど穎悟絶倫で、後三條天皇の東宮におはす間學士となつて侍しまつた。

天皇その才學を愛せられ、御即位の日これを藏人に補せられた。その後、堀河天皇の時權中納言となり、鳥羽天皇の時七十一歳で薨じた。大江音人以來八代の間學問を以て名高い家柄であるが、その子孫は不肖にしてこれを繼ぐことが出来なかつた。



【宇治に隠居し】

頼通は兼て宇治に別荘をもつて居たが、後これを捨て、寺を建て平等院と呼んだ。その輪奐の秀美なること古今に絶し、本堂の内部には四壁に繪畫を施し、天蓋・須彌壇等には螺鈿を嵌入し、實に平安時代美術の粹をあつめたものであつた。後三條天皇御即位になつたら、必ずや自分の權力を抑へられると考へて、關白を弟に譲つてこの平等院に隠居したのである。

【特に請ひたてまつる】

興福寺の南圓堂を再建するについて、これが工事の監督を大和守にやらせて置いた。ところが工事が了らないうちにその任期が満ちたので、教通はその再任を請ひたてまつつた。併し幾度請ひまつつてもおゆるしがなかつた。

それは地方制度の紊亂は國司の重任にあることをお察しになつたからである。その頃朝臣の地方に下つて國司となるものが多かつたが、それ等は開墾その他によつて多くの莊園を私有し、幾度も重任して永く一地方にあれば、後には

【行をつゝしむ】

天皇は「外戚なればこそ攝關を憚るのである。朕は何等の憚る所は無い」と仰せられたほどであるから、凡ての政治は親ら御裁決になり、關白も何も眼中におかせられなかつた。さうなると教通と雖も亦如何ともすることが出来ないで、大に行を慎むやうになつたのである。

【すべて儉約】

日常の供御には青魚の頭を炙り、胡椒を塗つたものをお充てになり、御扇は檜の柄に藍紙を張つたものをお用ひになつた。すべてそんな状態で、御殿にも何等の裝飾など施されないで、貴族の邸宅や別荘の方がどれほど宏壯華麗であつたかわからぬ。

これは現代に於ても同様で、所謂富豪なるものゝ邸宅や日常生活は、皇室の御實狀に比して實に恐懼に堪へない次第である。

【人心また引きしまり】

皇室の威威俄かに加はり、群下肅然たるものがあつた。盛

土着してその地の豪族となるに至つた。當時これを住人と云ひ、又大名・小名など云つた。これが武門・武士の起原である。

【一族の公卿】

藤原氏の公卿が悉く退出すると、残るものは殆ど居ないので、天皇も己むなくその請を聽許あらせられた。以て藤原氏の一族が如何に朝廷に根を張つてゐたかわかる。

にも通じたまひし上に、殊に御生れつき嚴格にましませり。されば頼通は心ひそかに天皇を恐れたてまつり、天皇の御即位に先だち關白を辭して宇治に隠居し、弟教通代りて關白となれり。

教通もまた勢にまかせて、天皇の思召にそむくこと少からざりき。教通かつて、其の氏寺なる奈良の興福寺の南圓堂を再建せんため、特に請ひたてまつることありしが、天皇これを許したまはざりき。教通怒りて、ことごとくおのが一族の公卿をひきゐりて、朝廷を退出せしかば、天皇はやむことを得ず、教通の請を許したまへり。かくて教通は一度その目的を達したれども、これより大

尋常小學國史上卷より

尋常小學國史上卷より

いに天皇を恐れたてまつりて、其の行をつゝしむに至れり。

天皇は、藤原氏の勢をおさへて政治にはげみたまひ、又官吏等がおごりにふけり大いなる別荘などを作るを喜びたまはず、日々の御膳部をはじめ、すべて儉約を守りたまへり。かつて石清水八幡宮に行幸したまひし時、拜觀者の車にかざりの金物うちたるを御覽じて、ことごとく之を取去らしめたまひしことありき。かくて久しくみだれたる政治もおのづから整ひ、人心また引きしまりたり。されど御在位わづかに五年にして皇位を御子第七十白河天皇に譲りたまひ、間もなく崩じたまへ

に行はれてゐた賄賂請託も止み、宴遊行楽も少くなり、政治は凡て公道に従つて行はれるやうになつた。

【白河天皇に譲り】

攝政・關白が幼帝を挾んで政治を私するのがこれ迄の通弊であつたから、これを矯めるために上皇が政事に干與する例を開かんと思召し、讓位の後幼帝を輔けて親ら政を決せられる筈であつたが、不幸にして早く崩御になつた。



【惜しみたてまつり】

頼通はわが一族の權勢を殺がれたのであるから、寧ろ喜ぶべき立場であるが、心から惜しみ奉つたといふのは、一つは頼通が決して不忠の臣でなかつたからであるが、又實に天皇の叡邁にわたらせられたからである。大江匡房も亦、承和・延喜の聖代にも比すべきであつた」と云つて非常に惜しみたてまつつたさうである。

【御志をつぎて】

白河天皇は器度弘大で剛毅果敢、頗る御父後三條天皇の風があつた。そこで父帝の御志をついで政治は一切刈裁せられ、決して藤原氏にお任せにならなかつた。従つて教誨及びその子師實が相ついで關白になつたけれども、たゞ名ばかりの關白で實力は己に無くなつてゐた。

かくて在位十五年の後、堀河天皇にお譲りになつて、尙引續き政治をおとりになつた。これ又後三條天皇の御志を實現せられたわけである。

【院中にて】

上皇の御殿を院といふ。白河上皇は院中であつて政をお聴きになつた。故にこれを院政と云ふ。白河上皇の院政は、堀河・鳥羽・崇徳の三朝に亘つて四十四年間であつた。院の政令の出る所を院廳と云ひ、その職員を院司といふ。院司が上皇の旨を奉じて出す公文書は即ち院宣で、當時その効力は勅書よりも上であつた。又院司等の連署して下す公文書は院廳下文と云つた。

院中にて  
頼通天皇を  
まつりたて  
まつる  
院政の始  
地方に武士  
をこころ  
第十六 源義家  
藤原氏の衰ふる間に、武士しだいに勢を得るに至れり。さきに藤原氏が榮華をきはめて、地方の政治をかへり尋常小學國史上卷より

【代々功をたて】

源氏の始祖經基は藤原純友が西國に於て反した時、大宰少貳追捕凶賊使として、小野好古に従つてこれを討ち、更に命を奉じて自らその餘黨を平げ、賊魁桑原生行を誅して首を京師に傳へた。後鎮守府將軍を經、上野介となり正五位下に陞つた。

その子滿仲も鎮守府將軍となり、孫頼信はその兄頼光と共に剛果明快驍勇を以て天下に鳴り、一條天皇以後四朝に仕へて鎮守府將軍となり、平忠常の反を平定し、功によつて美濃守となつた。

【陸奥にありて】

安倍氏は代々陸奥にあつて俘囚(王民にして蝦夷の賤隸となつたもの)の長であつた。頼時の時勢益々強く、伊澤・和賀・江刺・稗拔・去波・岩手の五郡(今の岩手縣地方)の酋長となり、衣川の險によつて關を設け、名づけて衣關と云ひ、海陸を跨有して資産頗る豊饒であつたが、貢賦を納めず徭役を供せず、朝命にそむいて人民劫掠を事としてゐた。

尋常小學國史上卷より

みざりしより、才氣ありて藤原氏におさへられたる人は、地方の官吏となりて諸國に下り、遂にといまはりて武士となるもの多かりき。中にも源氏は清和天皇より出でては、やくより勢強く、代々功をたてて武名をあげしが、義家に至りて最もあらはれたり。源義家は頼義の長男にして、八幡太郎と稱す。後冷泉天皇の御代に、安倍頼時といふもの、陸奥にありて、多くの土地をかすめ取り人民を従へてをむきたれば、朝廷は頼義に仰せて之を討たしめたまふ。頼義は義家と共に、陸奥に至りて頼時と戦ひ、遂に之を誅せり。されど頼時の子貞宗・宗任等なほ勢強くして、容易に從はず。頼義進

【之を誅せり】

頼義兵を率ゐて頼時を撃つてゐたが、國府が危いといふのでこれが救援に赴き、部下をして衣川を攻めさせたが勝たなかつた。この時俘囚安倍富忠が兵を起して官軍に屬してゐたので、頼時はこれを説いて自分の味方にしようと思ひ、少數の兵を率いて出陣したのを、富忠伏兵を誑け嶮岨に迎へてこれを撃ち、交戦二日にして頼時は死んだのである。







【宗任等を捕へ】

貞任は戦死したが、宗任は降伏したので、捕虜として京都に連れて行くことになった。身長六尺有餘の大男であつたが、兄と等しく文學の心掛があつて、公卿たちに「これは何ぞ」と梅の花を見せられて『わが國の梅の花とは見たれども大宮人はいかゞいふらん』と答へてギヤフンと參らせたといふ話がある。

【前九年の役】

前九・後三の稱は古くからあるが、何時から何時までを指したものが明かでない。頼義が征討の勅命を受けた年から貞任の誅せられた年までは七年であるし、頼義が奥羽に赴任してから凱旋上洛の年までは十四年である。

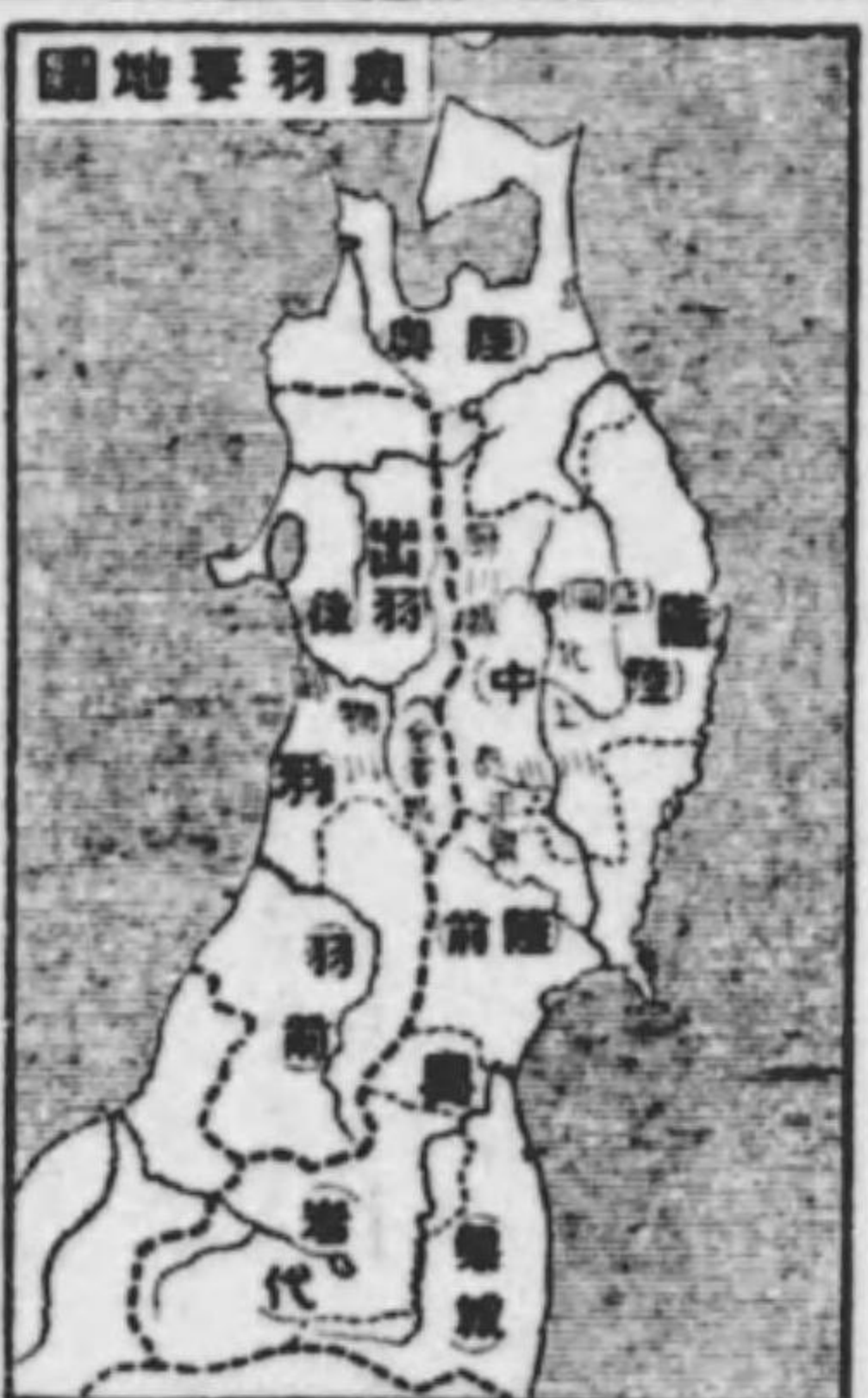
【奥羽要地圖】

昔の陸奥は今の三陸及び磐城・岩代の地で、出羽は今の羽前・羽後である。(尤も今少し前には今の奥羽全體を陸奥と云つてゐた) 陸奥はミチノオクと讀んだものであるが、ミチノクノクニと云へばノクが二つ重なるので、略してミチ

ノクニと云ふ様になり、ミチは奥羽式の發音ではムツと聞えるので、遂にムツノクニと呼ぶ様になつた。

【かへれる後】

義家が頼通の邸で手柄話をして居た時、大江匡房は別室にあつてこれを聞いたので、それは偶然に聞えたに過ぎない。これをたち聞きしたとあるのは、少し不徳義の様に聞えて穩當でないと思ふ。



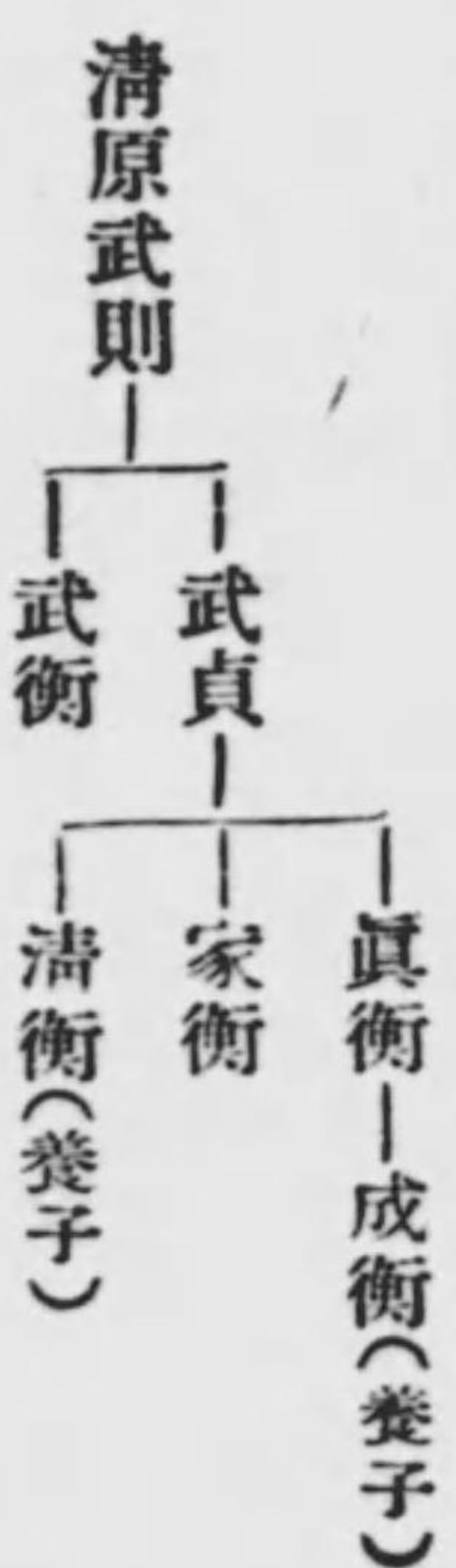
しに、大風にはかに吹きおこりて、火はたちまち城中にもえうつれり。賊軍は思の外のことなれば、上を下へとあわてさわげざるを頼義すかさず攻めよせて、遂に貞任等を斬り宗任等を捕へて、亂全く平ぎたり。世に之を前九年の役といふ。後頼義鎌倉に八幡宮を建てて神恩を謝したり。

尋常小學國史上巻より

【安倍氏に代り】

武則は前九年の役に於ける戦功によつて従五位上に叙し鎮守府將軍に任ぜられた。安倍頼時は六郡の酋長で、その時の鎮守府將軍は頼義であつたのだから、安倍氏に代り、あつても何も安倍氏の官職をとつて代つたといふ意味ではない。たゞ奥羽の勢力家としての安倍氏が滅んだので、その代りに清原氏が勢力を得たといふ意味である。

【子孫の間】



眞衡父に次で陸奥六郡を領し勢益々強く、一門一族悉くその臣僕の如くであつた。ところが家衡と清衡とはこれを快しとせず、遂に兵を擧げて眞衡に抗した。この時義家は鎮守府將軍となつて入國したので、眞衡を助けて家衡等を討つた。併し眞衡死し家衡等降参したので一旦鎮まつたが、後に家衡と清衡との争ひが出来て、清衡が義家に援を乞ふ

尋常小學國史上巻より

になるべき才を持つても、惜しいか、いまだ兵法を知らず、といへり。義家の從者怒りて、かくと義家に告げしに、義家は少しも怒らず、もつとものことなり。とて、やがて匡房を師として兵法を學びたり。さて奥羽の地方にては、さきに清原武則頼義に従ひて安倍氏の亂を平げ、遂に安倍氏に代りて勢を得たりしが、白河天皇の御代に至りて、其の子孫の間に争起りて、奥羽地方再びみだれたり。義家陸奥守となり、此の亂を平げんとせしが、武則の子武衡等は金澤に據りて義家に抗せり。ある時義家これを攻めんとして進みしに、途中にてはるかに雁の列を

たので、義家はこれを助けたが、家衡は叔父の武衡の援けを受けて共に金澤柵に據つた。

そこで義家は自ら兵數萬に將として金澤の柵(仙北郡)を攻めたのである。

【ある時】

これは寛治元年九月のことであつた。家衡等は伏兵を設けて義家の來るのを待ち受けたのである。



【果して敵の伏兵】

草の中に隠れた兵も、空から見ればよく見えるので、鳥が驚いて列を亂すのであらう。今日の戦争では飛行機が發達して空中から偵察するので、雁の役目を人間がするわけであるが、一方空中から容易に見えない様に、大砲の上に木の枝を乗せたりカモフラージュするので、現代では雁も果して列を亂すかどうかわからない。

【官を辭して】

義光は頼義の第三子である。幼にして弓馬をよくし、長じて智勇を以てその名を知られた。左衛門佐となつて京師に宿衛して居たが、兄の義家が陸奥にあつて苦戦してゐると聞いて、赴いて援けようと思つて朝廷に乞ふたが許されなかつた。そこで遂に斷然辭職して陸奥に下つたのである。その途次義光が足柄山で笙の秘曲を吹いたといふ傳説がある。それは時忠といふ人が笙の名人で、義光に教授してゐたが、義光が陸奥へ下るといふので送つて來たのを、戰場までも伴つては笙の秘曲が絶えるからと思つて、足柄から

【久しく屈せざりき】

義光力戦すれども家衡等よく防ぎ、柵中から矢や石の飛び來ること雨の如く、我が軍の死傷は頗る多かつた。その中に次第に冬も近づき、寒さが殊の外甚しいので、わが將士も頗る困惑し、大雪でも降つたら屹度凍死するに相違ないが、その時國府に來てゐる妻子は、京都に歸る旅費にも困るだらうからといふので、ひそかに甲冑を脱いだり、馬を送り歸したりして、これを賣つて旅費を作らせたといふ有様であつた。

賊も久しい間の包圍攻撃に、城中次第に糧食も乏しくなつて、到底これは叶はないと思つて、度々降伏を申し込んだが、義家はこれを許さなかつた。そこで先づ弱いものから逃げ出させたが、義家は其の逃路を絶つて糧食の盡きるのを早からしめる策をとつた。

【席を分ちて】

毎日會食する時に、その日の働きぶりによつて、勇剛であつたものと怯懦であつたものと二列に分けたので、怯の

時忠を歸らせたといふのが事實らしい。

【挿繪】

これは金澤柵に近い陣營である。正面に酒杯を上げてゐるのが義家で、それに對座してゐるのが義光である。その他は皆部下の兵士で、何れも冑を脱いで烏帽子になつてゐる。義家と義光の前には高杯が置いてあつて、一人の兵士が銚子を前に置いて酌をしてゐる。



尋常小學國史上卷より

尋常小學國史上卷より

みだせるを見  
て、たちまち兵  
法に野に伏兵  
ある時は飛雁  
列をみだると  
いへることを  
思ひ出し兵を  
發して其の野  
をさぐらしめ  
しに果して敵  
の伏兵を發見

此の頃義家の弟新羅三郎義光兄の身を氣遣ひ、官を辭してはるく京都より下り來れり。義家涙をながして喜びていはく、よくこそ來つれ、亡き父上にあふ心地すと、これより二人力を合はせて攻めたれども、敵もよく防ぎ戦ひて久しく屈せざりき。  
よりて義家は兵士の心をはげまさんとて、毎日兵士の戦ふ様を見剛の者と臆病者との席を分ちて、戦終りた後、それらの席に着かしめられたれば、兵士はいつれも

列に廻されたものは、恥かしさに飯も咽喉を通らなかつたであらう。

秀割惟弘といふ者があつた。毎日怯の列にばかり廻されるので、一日奮然として『今日こそはおれの勇氣を見せてやる』と云つて、衆に先つて進んだが、敵の矢が頭に中つて死んだ。ところがその創口から飯粒が出て來たので、一同これを見て『可愛そうに』と云つた。



【鎌倉權五郎景正】

景政は鎮守府將軍忠通の孫である。一日大に奮戦したが、賊の箭が一方の目に中つた。そこで景政その箭を折り、敵中に突進して己を射た者を捜し求め、遂にこれを射殺し胃を脱いで倒れた。その時矢の根元は尙目に残つて居た。そこでわが兵三浦爲繼が、足でその顔を踏んで箭を抜かうとしたら、景政驚起して刀を抜き『戦のために死ぬのは一向いとはないが、生きて顔を踏まれることはこの上も無い恥だ。貴様を刺し殺して己も死ぬんだ』と云つた。そこで爲繼もお詫を云つて、跪いてこれを抜いたといふ話である。

【後三年の役】

これも前九年の役と同様、何年から何年までを指すのか明かでない。義家が陸奥着任後間もなく戦争が始まつたとすれば、金澤柵が陥るまでに九年かゝつてゐる。尤も他の書物によると義家が陸奥平定を奏したのは寛治元年だといふから、これによれば五年間である。又他の書物によつて戦の始まつたのを應徳三年とすれば、平定までに二年しかか

つてゐない。何れにしても三年といふ数字は出たらめである様に思はれる。

【おのが財産を分ち】

亂平定の後義家これを太政官に報告したが、これは私闘であることになつて追討の官符を下さず、又恩賞も與へなかつた。そこで義家は賊の首を途上に捨て、京都に上り、私費を以て部下の將士を賞した。

剛の者の席に着かんと心がけて皆勇み戦へり。鎌倉權五郎景正が、わづかに十六歳にして、武勇のほまれをあげたるも此の時のことなり。かくて年月たち、城中兵糧乏しくなりて、其の勢やうやく衰へ、武衛等は遂に城を燒きて逃げいでたり。義家追ひうちて之を斬り、奥羽地方全く平ぎぬ。時に三十七、堀河天皇の御代の初にして、世に之を後三年の役といふ。亂の後義家は、戦功の賞を朝廷に請ひたるに、許されざりしかば、義家はおのが財産を分ちて部下の將士に與へたり。これより義家はます／＼武士の間に重んぜられ、源氏の勢は殊に東國にて盛になれり。

尋常小學國史上卷より

【一時は源氏に劣り】

平高望の子國香は常陸大掾であつた。その弟の子將門は勇敢にして騎射に巧であつたが、京都に於て志を得ずして下總に下つた。その時伯父の國香と争ひ、攻めてこれを殺した。國香の子貞盛、父の仇を報せんとして屢々將門と戦ひ、後太政官に訴へて將門追討の命を受け、藤原秀郷と力を合せて遂に將門を亡ぼした(天慶の亂)。その功により従五位下右馬頭となつたが晩年あまり振はず、四代を経て忠盛に至るまでは、到底源氏に及ばなかつた。忠盛は山陽・南海・西國の海賊を撃ちて功を立て、鳥羽法皇の寵任を得た。

【権力の争】

道長―頼通―師實―師通―忠實―忠通―呈子  
―頼長―多子

忠實は後鳥羽上皇の寵遇を受け、長子忠通は攝關となり次子頼長は左大臣となつた。ところで忠通の女呈子は近衛天皇の中宮となり、頼長の女多子も亦皇后となつて、兄弟の中は日に悪くなつた。そして父の忠實は常に頼長を愛し

尋常小學國史上卷より

第十七 平氏の勃興

源氏とならびて名高き武士は平氏なり。平氏は桓武天皇より出て、其の勢一時は源氏に劣りしが、平忠盛の子清盛出づるに及びて、大いに家名をあらはせり。此の頃藤原氏の一門に権力の争あり、左大臣藤原頼長は、かねてより其の兄關白忠通に代らんとし、兄弟仲よからざりき。されば七十九代後白河天皇の保元元年、頼長は天皇の御兄崇徳上皇の御子なる重仁親王を御位に

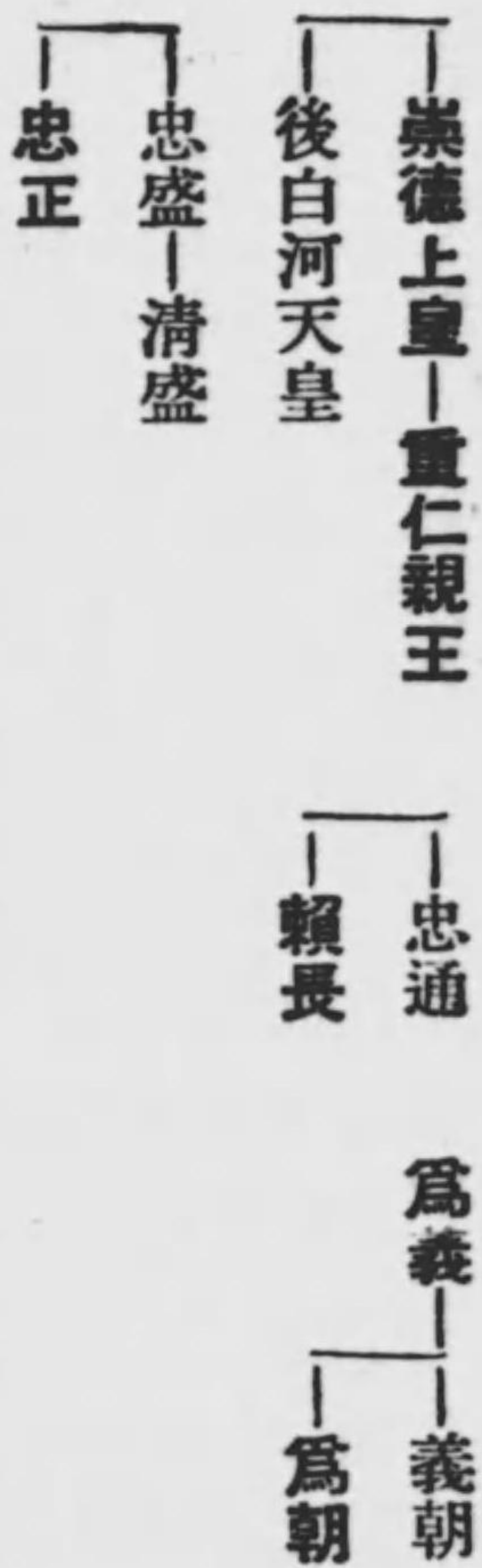
てこれを助け、忠通の内覽の職を頼長に譲らせようとしたが聴かないので、遂に忠通の宅地莊園を奪つて鳥羽法皇に獻じた。

爾來頼長益々驕恣であつたので、近衛天皇これを惡み給ひ却つて忠通を信任せられた。頼長は鳥羽法皇の寵を受けて内覽となつたが、驕傲更に甚しくなつたので、遂にその職を罷められ、心大に不平であつた。



【兵を擧げんとし】

この時の敵味方の關係は次の様になる。甚だ複雑であるから圖解して兒童に示すがよい。



併しかくも骨肉の争ひが甚しかったことは、餘程注意して取扱はないといけないと思ふ。

【體格人にすぐれ】

爲朝は身體も大きく力も強く、心も亦飽くまで剛健で、矢次早の手利であり、左手が右手よりも十二糎長かつたといふ。幼少の時から傍若無人の振舞が多かつた。

【弓の上手】

保元の亂に清盛の部將伊藤景綱及びその子忠清・忠直が進んで来た。爲朝『貴様等はおれの敵では無い。さつさと引き退れ』と云ふと、景綱怒つて爲朝を射た。爲朝『案外勇

【其の謀を用ひざりしに】

賴長は爲朝の獻策を用ひず『爲朝は年が若いから事もなげに云ふが、今兩帝が國を争はせられるのに、そんな輕々しいことに行くものではない。奈良の兵が明朝は到着するから、その上で堂々と戦ふべきである』と云つた。爲朝退きて『兄の義朝は兵機を知つてゐるから、今夜は必ず攻めて来るだらう。明朝まで待てるものか』と云つたが、果して義朝は其の夜火攻の計を用ひた。

これより前に爲義が『上皇奈良に幸せられるならば、私は止まつて敵を防ぎます。若しそれでもいけないければ、乘輿を奉じて關東に下り、箱根・足柄で守り、關東八州の兵を集め、やがて京都に上ること易々たるものがあります』と獻策したのを、やはり賴長が聽かなかつた。賴長は學問があつたが兵略には通じなかつた。而も我の強い人で、他人の言を容れないから、大きな失敗を演じたのである。

【上皇は讃岐に】

上皇讃岐にあつて五部の大乘經を血書されたが、これを保

氣のある奴だな、ちやおれの矢を一本喰つて見よ』と射返すと、忠直の胸を射通して忠清の鎧の袖に及んだ。

【三年の間】

十三歳の三月から十五歳の十月までに合戦二十餘度、城を落すこと數十箇所、謀略人にすぐれ、忽にして殆ど九州を討ち従へ、自ら九國總追捕使と稱して太宰府に住し、朝憲を忽にしたといふ剛のものである。

即けたてまつり、おのれ關白となりて權力を得んとて、上皇にすゝめて兵を擧げんとし、義家の孫源爲義を招けり、爲義これに應じ、其の子爲朝等をひきゐりて上皇の御所に参りしが、爲義の長子義朝は平清盛等と共に天皇の御召によりて皇居におもむけり。

爲朝は爲義の八男にして、體格人にすぐれ身のたけ七尺ばかり、力強くして弓の上手なりき。十三歳の時、九州に下りて、みづから鎮西八郎と稱し、多くの部下をひきゐりて、わづか三年の間に九州をうち従へんとせしほどの剛の者なり。後京都にかへり、程なく父に従ひて上皇の御所に参りしは十八歳の時なりき。

尋常小學國史上卷より

尋常小學國史上卷より

賴長爲朝を召して軍の謀を問ひしに、爲朝答へていはく、某久しく九州にありて、合戦二十餘度に及びしが、戦は夜討にかざれり、今夜皇居におしよせ、三方より火をつけて一方より攻めなば、勝れり。利うたがひあるべからず、勇氣のある敵は兄義朝のみなれど、それとて某の矢一すぢにてたふすべし。清盛等のへろく、矢何程のことかあらんとされど、賴長其の謀を用ひざりしに、義朝清盛等早くも夜に乗じて攻來り、火を風上にはなてり。爲朝等勇をふるつて防ぎ戦ひたれども、其の軍遂に敗れて、上皇は讃岐にうつされたまひ、賴長は矢にあたりて死し、爲義は斬られ、爲朝は伊豆の大島に流されたり。

存することを天皇がお許しにならなかつたので、大に悲り給ひ、『大魔王となつて天下を惱亂せしめる』とて崩御あらせられた。御陵は綾歌郡松山村にある。

【伊豆の大島】

爲朝臂の筋を断たれて大島に流されたが、附近の五島をも併せ、更に琉球に渡つてこれを従へ、後大島に歸つたが、官軍に攻められて遂に自刃した。



【功を賞せられ】

清盛は功を以て播磨守に任じ、尋で太宰大貳に叙せられ、義朝は左馬頭となつた。併し保元の亂に於て勝つことが出来たのは、主として義朝の作戦計畫がよかつたからで、清盛の戦功は遙かに下位であつた。けれども源氏は一族の大部が上皇方に赴いたに反して、平氏は天皇方に従つたものが多かつたので、義朝はその羽翼を失つて殆ど孤立の姿となつた。

【甚だ不平なりき】

清盛は當時權勢並びなき通憲と結び、これと婚を通じて益々勢力を張つたが、義朝はその女を通憲の子に嫁せしめんとして拒まれ、心頗る平かならざるものがあつた。そこで信頼と結んで、遂に兵を擧げるに至つたのである。

【高き官】

信頼は後白河上皇に寵せられて驕態であつた。そして通憲とその權勢を争つてゐた。即ち自ら近衛大將たらんことを望み、これを上皇に願ひ出た。上皇はおゆるしになる積り

【熊野の神社】

平治元年十二月清盛等は熊野に參詣した。熊野三所權現といふのは熊野座神社(和歌山縣本宮町)、熊野速玉神社(和歌山縣那智神社(那智村))の三社を云ふもので、又熊野三山とも云つてその頃最も崇敬の篤かつた神社である。朝廷に於ても度々行幸等のことあり、後鳥羽上皇は二十三年間毎年御幸になつた。従つて公卿や武士も屢々參詣したものである。

【京都を逃れ】

通憲は信頼等が兵を擧げるといふことを探知したので、直ちに三條殿に詣つて上皇に奏しようとしたが、上皇はたま／＼宴遊の最中であつたので拜謁が出来ず、密かに宮女に告げて置いて奈良に走つた。信頼等はそれを知らず、『今夜の中に通憲父子を捕へて斬つてやらう』といふので、急いで攻めたが通憲等は居なかつた。そこでその邸宅を焼いて多く婢妾を殺し、源光泰をして通憲を探させた。

【途中にて死せり】

その時通憲は田原といふ所に居て、穴を穿つてその中に隠

であつたが、通憲が『大將は重任ですから、門地の高い家柄でなくては軽々しく授けてはいけません。信頼を任命せられますと、屹度後に禍があるでせう』と申し上げてこれを阻止した。

そこで信頼は非常に怒つて、病と稱して引籠り、ひそかに義朝と結んだ。又權大納言藤原經宗・右近衛中將藤原成親、檢非違使別當藤原惟方などをも味方に引入れた。

保元の亂といふ。

世に之を保元の亂といふ。清盛義朝はそれ／＼其の功を賞せられしが清盛は其の頃勢力ある藤原通憲と親しみて、ますますおのが勢力を増せしかば、義朝心甚だ不平なりきたまへり。八段二條天皇の御代、藤原信頼といふもの、後白河上皇に請ひたてまつりて高き官を得んとせしが、通憲にさまたげられて之を得ること能はざりしかば、深く通憲をうらみひそかに義朝とむすびて之を除かんことを謀れり。



尋常小學國史上卷より

尋常小學國史上卷より

平治元年清盛その子重盛等と熊野の神社に參詣せんとて京都を發せり。こゝに於て義朝・信頼にはかに兵を擧げて通憲を討たんとせしが、通憲は早く身の危きをさとて京都を逃れ出でし。途中にて死せり。此の間に義朝等は、おそれ多くも上皇の御所を焼き



二條天皇平治の亂の圖

れて居たが、遂に光泰に捕へられ、信頼の命令で首を斬られて獄門に梟せられた。

【上皇の御所】

この時上皇の御所は三條殿であつた。義朝等夜急にこれを攻め火を縱つてこれを焼いた。そして上皇を一本御書所、天皇を黒戸御所にお遷し申し上げたが、天皇は後迎へられ、清盛の邸に幸せられた。(挿繪は『平治物語繪詞』の一部)



【ひそかに天皇を】

はじめ藤原惟方等信頼に味方して居たが、兄の光頼が『我が家は延喜の昔から代々忠孝を盡して来た。お前に至つて凶黨に與して家名を傷けるのは何事か、清盛も今に熊野から歸つて来るだらうが、大兵が來たら忽ちお前達は滅されるのだぞ』と叱りつけたので、前非を悔いてひそかに天皇に勤め、官人の服にお召しかへを願つて、車に乗せ奉つて藻壁門から出て、六波羅にあつた清盛の邸へお迎へ申し上げたのである。

【皇居を逃れ出て】

この時上皇も亦服を變じ、馬に乗つて仁和寺に幸せられた。信頼は酒を飲んで寝て居たが、藤原成親がこのことを告げると、『そんなことがあるものか、惟方等に委せてあるから』と云つて起きなかつた。併し惟方等も居なくなつたと聞いて、非常に驚き、切齒扼腕したが、最早どうにも致し方はなかつた。

【皇居に攻入り】

【馬を走らせて】

重盛進んで大庭の棕の木の下に來た時、義平僅かに十七騎を従へ、轡を並べて五百騎の敵中に斬り込んだ。義平その時十九歳、重盛は二十三歳であつた。義平部下に命じて、『小わつば共に目をかけるな、大將をやつつけろ、權匂の鎧に蝶の裾金物打ち、黄鶉毛の馬に乗つたのが重盛だ。組みついて生捕りにせよ』と、西へ東へ、南へ北へ、追ひまくり追ひつめたので、敵味方入り亂れて、右近橋・左近櫻を七八回も廻つたが、重盛の部下が百騎ばかりでとうとう義平との間をへだてた。その間に重盛逃れ出で、更に新千の五百騎で又攻め込んだが、再び義平の十七騎に追ひ立てられ、棕の木の下で五六回も揉んで、とても叶はないので引き退いた。

【家臣に殺され】

義朝その子義平・頼朝等及び二三の従者と共に美濃より尾張に入り、野間といふ所の長田莊司平忠致といふものにしたより、更に關東に赴くつもりであつた。この忠致は家臣鎌

平氏の軍が來たので、紫宸殿に居た信頼は、甲を着て階段を下らうとしたが、足が震えて降りられない。人に助けられて馬に乗つたが、忽ち落ちてひどく鼻血を出した。重盛五百騎を以て待賢門を攻めたので、信頼は部下に向つて『進め防げ』と命じながら、眞つ先に逃げ出したので、誰も防ぐものがなく、みんな逃げてしまつて、重盛はわけなく皇居に攻入つた。

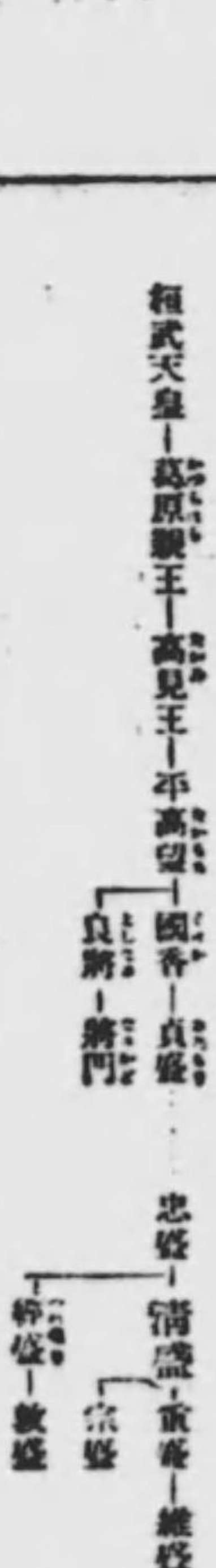
清盛の軍を破る

上皇と天皇とを皇居におしこめたてまつれり。清盛は途中にて此の事を聞き、重盛のすゝめに従ひて急ぎて京都に引きかへし、ひそかに天皇をおのが邸に迎へたてまつりしが、ついで上皇もまた皇居を逃れ出た。たまへり、天皇清盛に勅して義朝等を討たしめたまふ。義朝等は皇居にたてこもり、白旗數多うち立てて、清盛の軍を待ちうけたり。清盛すなはち重盛等をやりて之を攻めしむ。平家の赤旗朝風にひらめきて勇ましく進めり。重盛兵士をばげましていはく、年號は平治土地は平安我等は平氏なり。此の敵必ず平がんと。重盛敵を破りて皇居に攻入り紫宸殿の前に至りしに、義朝の長

尋常小學國史上卷より

尋常小學國史上卷より

子義平馬を走らせて迎へ戦ひ、左近櫻右近橋をめぐりて追ひかければ、重盛かなはずして引退きたり。義朝平氏の軍の逃ぐるを追ひて兵を進めしが、遂に戦敗れて退かんとせしに、皇居はすてに平氏の軍に占領せられたり。こゝに於て義朝は東國に走らんとし、尾張に至りて家臣に殺され、信頼義平等は捕はれて誅せられたり。世に之を平治の亂といふ。



田政家の妻の父である。厚く義朝を待遇してゐたが、密かにこれを殺して清盛の恩賞にあづからうと思ひ、義朝の出發を押し止めて正月三日の晩に風呂に入れて殺さうと謀つた。従者金玉武器をとつて浴室に侍したので隙が無かつたが、義朝が浴衣を求めても容易に持つて來ないので、金玉が走つて取りに行つた。そのすきに三人の壯士が躍りかゝつて遂に義朝を斬つた。



【全く衰へ】

保元の亂は骨肉の争であつたが、平治の亂は全く源平二氏の争であつたと云つてもよい。そして破れた源氏は一族多くは殺され、頼朝は伊豆に流され、義経は鞍馬山にやられるといふ風で、京都に残つてゐたのはたゞ源三位頼政のみであつた。

【十年ならずして】

清盛は平治の亂後正三位參議となり、次で權大納言になつたが、仁安二年には従一位太政大臣となつた。平治の亂からこれまで僅かに八年である。清盛の妻時子が皇太后の姉であつた關係もあるが、榮達の早いこと驚くべく、上皇これを悪まれたけれども、如何とも出来なかつた。

【一族もそれぐ】

清盛が太政大臣になつて間もなく重盛と宗盛とは兄弟相ならんで左右大將となつた。而してこの時一族の朝官に列するもの六十餘人であつたといふ。茲に於て藤原氏の勢力は殆ど平氏にとつて代られた形である。

【ほころものさへ】

清盛の妻の兄に大納言時忠といふものがあつた。『平氏の一族でないものは、皆人非人だ』と云つたとの事である。清盛の邸は六波羅にあつたが、衣服の着様も烏帽子の冠り様も、凡て『六波羅風』といふものが流行して、人々争つてその眞似をしたといふ。眞に飛ぶ鳥も落ちる勢とはこんなことを云ふのであらう。

第十八 平重盛

保元平治の兩度の亂によりて、久しく勢ありし源氏は全く衰へ、平氏はしだいに盛大となれり。其の後清盛の威勢日に加り、官位もしきりに進みて平治の亂の後未だ十年ならずして、遂に太政大臣に任ぜられしが、程なく之を辭して髪をそりたれば、世に太政入道といへり。又その一族もそれぐ、高き官位にのぼり、一門の領地は三十餘國にあたりて、遂には藤原氏にもまさる榮華をきはめ、平氏にあらざるものは人にあらずとほころものさへあるに至れり。清盛は勢の盛なるにつれて、我がまゝのふるまひ多か

尋常小學國史上卷より

【我がまゝのふるまひ】

二條上皇崩御の時、諸大寺の僧侶が集つて争ひを生じた。その時流言あり『後白河上皇が僧兵をして清盛を討たしめられる』と。清盛即ちその邸に兵を集めた。上皇大に驚かれ、親ら清盛の第に幸して辯解しようと思はれたが、清盛病と稱して出なかつた。不都合極まる振舞である。

清盛別荘を西八條に造り、土木の妙を盡し贅を極めた。又攝津の福原にも別荘を建てた。そして平氏の悪口を云ふものを搜し出して罪するために、三百人の童子を京の町に放つた。人々はこれを腫れ物に觸る様に恐れた。

【近臣等の中に】

藤原師光は後白河法皇の寵臣である。清盛の無禮を惡み、『驕りて禮無きものは天の惡むところ、平氏は屹度亡びるだらう』と云つた。權大納言藤原成親は、大將に成らうとして重盛・宗盛に先んぜられたので不平であつた。そこで兩人相謀り、更に法皇の密旨を以て源行綱・平康頼・法勝寺執行俊寛等と約し、こゝに鹿谷會議となつたのである。併し

尋常小學國史上卷より

りしかば、後白河上皇これをおさへんと思召せしも、御心にまかせず、遂に御髪をそりたまひて法皇となりたまへり。時に法皇の近臣等の中に之を憂へいきどほるものあり、僧俊寛の鹿谷の別荘に會して、ひそかに平氏を滅さんことを謀れり。清盛これを知りて大いに怒り、其の人々を捕へてまことに之を斬らんとす。重盛は温順にして忠孝の心厚き人なれば、父を諫めてはいはく、私の怨を以て官人を殺すはよろしからず。わが家今まことに全盛をきはむ願はくは善き行を積みて子孫の繁昌をはかりたまへ。たとひ御心のまゝにならぬことありとも、われ等子孫のためと思召して忍びたまへ。と。

行綱が裏切つてこれを清盛に告げたので事が露はれた。

【之を斬らんとす】

重盛が諫めたにも拘らず、清盛は師光を朱雀の巷で斬り、成親を備前に、その子成経及び康頼・俊寛を鬼界島に流し間もなく人を遣はして成親を殺さしめた。そして成経と康頼とはその翼年に召し還されたが、俊寛は遂に赦されないで、鬼界島で死んだ。



【更に法皇を】

清盛が後白河法皇を幽しまつらんとしたことは、平家物語や源平盛衰記に出て居て有名な話である。併し事實かどうか頗る疑はしい。法皇が鹿谷の會議に御關係になつたことは事實であり、法皇御親らその會議に臨まんとせられたのを僧靜憲が諫止し奉つたことも事實であるが、清盛がこれを幽しまつらんとしたことは正確な記録には見えない。九條兼實の日記玉海には、人々が疑はれるのを怖れて、院中へ参入しないので、清盛大に怒つたとある位だから、この時はまだそんな考は持たなかつたらしい。併し重盛が薨去した後は、清盛も愈々我儘がひどくなつて、遂に法皇を幽しまつるに至つた。

【常の装束】

平家物語によると、この時清盛は西八條の邸に居て兵を集め、『馬には鞍を置き、著背長鎧取り出せ』と命じた。主馬判官盛國これを見て、大變だと思つて重盛の居る小松殿へ馳せつけた。重盛その様子を聞いて、急ぎ車を飛ばせて

清盛の第に行つた。故に服装は平素のまゝで、烏帽子、直衣に大文の指貫を穿いてゐたのである。(次頁挿繪)

【襟の間よりきらめき】

法衣を着ても胸板の金物が見えるので、頻りに襟をかき合せたといふ。又無理にかき合せて居たら、襟の處が破れて一層よく見える様になつたともいふ。勿論想像で云つたことである。

然るに清盛の怒をほやまず、更に法皇をおしこめたてまつらんとし、一族を招きければ、人々武裝して其の邸に集れり。重盛はひとり常の装束にて、おかれて至る。宗盛これを見、袖を引きていはく、これほどの大事に當つて、何故に武裝したまはざるか。父上もすてに鎧を着けたまへり。と。重盛いはく、大事とは何事ぞ。朝敵いづこにかある。われは近衛大將たり、朝廷の大事にあらずばみだりに武裝すべからず。と。清盛これを聞きて恥かしく思ひたれど、鎧をぬぐべき暇なれば、法衣引きかけて重盛に逢ひ、わざとおちつきたるふりはしたれども、鎧の金物襟の間よりきらめきたり。重盛はらくと涙

尋常小學國史上卷より

【恩の中にて】

平家物語によると「第一に我が國では太古からこの方太政大臣が甲冑を鎧ふた例はありません。又御出家の御身分でありながら法衣を脱いで甲冑を鎧ひ、弓箭を帶せられるといふことは破戒無慙の罪があります。世に四恩と云つて天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩があります。その中最も重いのは朝廷の恩であります。普天の下悉く王土でありますから、首陽山に蕨を折つた賢人も、勅令を背かぬといふ禮儀は知つて居たと申します。況や父上は先祖以來未だ聞かざりし太政大臣の極官にお上りになり、無才闇愚の重盛さへも内大臣・左大將に任せられ、且又國郡の半分は一族の所領となつて居ります。これ全く君恩ではありませんか」云々と諫めたといふことである。

【挿繪】

重盛が清盛を諫めたことは事實であらう。重盛の薨後清盛の専横が一きは目立つて來たのを見ても推察せられる。併し世に傳へるこの話の様に、一族郎黨雲の如く並み居る間

尋常小學國史上卷より



に於て『抑も世に四恩あり』だの、『破戒無慙の罪』がどうのと、自分一人が聖人君子であるかの様な云ひ方は、謹厚な重盛には似合はぬ話であるし、又事實であつたとすれば重盛を忠孝兩全の人として推稱するのともどうかと思ふ。重盛が父を諫めたといふのは、もつとおとなしく、人の居ない所で内密にやつたことと思はれる。併しあまり名高い話だから、敢て抹殺しなくてもよい。この繪は想像畫である。



【高き官位】

承安元年権大納言、四年右大將を兼ね、治承元年左大將に轉じ、尋で内大臣に任じたが、鹿谷事件以來憂懼甚しく、間もなく左大將を辭し、三年に内大臣をも辭した。

【聞入れたまはずば】

清盛兵を率ゐて院に推参するとすれば、重盛は左近衛大將の職務上兵を以て法皇をお守りしなければならぬ。さすれば父に向つて弓を引くこととなるので、『忠ならんとすれば孝ならず、孝ならんとすれば忠ならず』といふ苦しい立場に置かれることとなる。そこで進退谷まつて、『たゞ重盛の首をはねられよ』と云つたわけである。重盛としては實際これ位のこととは云つたであらう。そして清盛も、まさか重盛の首をはねてまで院に上らうとする心は無かつたことであらう。

【いつたんは】

清盛は法皇を幽し奉らんとしたのではなかつたにしても、成親等の一族を悉く斬らうとしたのを、重盛の諫によつて

一應流罪にすることにした。兎に角清盛は横暴ではあつたが、重盛の在世中はあまりひどいことはなし得なかつたのである。

【病にかゝり】

重盛は仁安三年にも病氣のため辭職し、二三年後に又仕官したが、治承三年に辭職してから病氣がひどくなり、八月に四十二歳で薨じた。病氣は胃痛であつたらしい。

高き官位をいたゞけるは、これ皆君の御恩をり、今この御恩を忘れて皇威をかろんじたてまつらば、神罰たちまちいたりて、一族日ならず亡ぶべし。父上聞入れたまはずば、重盛兵をひきゐて法皇を守りたてまつるべし。されど父上にてむかひせんもまた忍びがたし、必ず此の御金をとげんと思召さば、先づ重盛が首をはねられよ。と、さすがの清盛も、此の諫を聞き、いつたんは思ひとゞまりき、重盛の如きは、まことに忠孝の道を全うしたる人といふべし。

【法皇をおしこめ】

治承三年十一月、清盛は福原に居たが、中納言の任官に就て清盛の願を法皇がお許しにならなかつたといふので、兵數千を率ゐて上洛し、關白を更迭させ、太政大臣以下法皇に親近せる三十九人の官職を褫ひ、前關白の基房を太宰權師に貶し、子宗盛を遣はして法住寺殿を圍ましめ、法皇を鳥羽殿に幽しまつた。

【源頼政】

頼政は頼光の玄孫にあたる。平治の亂に清盛に屬し、その後も耻を忍んで平氏に仕へ、時の來るのを待つてゐた。官は右京大夫で従三位に敘し昇殿を許されてゐた。七十七歳にして平氏討滅の計畫を立て、以仁王に説いた。王は白河法皇の次子で英邁であつたが、法皇の寵を得ずして年三十になつて親王に冊せられないで、快々たりし人である。

【宇治の戦に敗れ】

諸國の源氏がまた集まらないうちに、清盛これを知つて福原より歸り、以仁王を土佐に流さうとしたので、頼政これ

尋常小學國史上巻より

平重盛は常に清盛の悪行を憂へしが、病にかゝり父に先だちて薨せしかば、其の後は清盛は、かかるところなく横暴をきはめ、遂に後白河法皇をおしこめたてまつり、こゝに於て源頼政平氏を滅して法皇をすくひたてまつらんとて、法皇の御子以仁王を奉じて兵を擧げんとし、王の命を諸國の源氏に傳ふ。然るに兵未だ集らざるうちに、頼政宇治の戦に敗れて自殺し、王も矢にあたりて薨じたまひきざれど、これより源頼朝をはじめ諸國にひそみたりし源氏は王の命に従ひて一時に起れり。

【諸國にひそみたりし】

當時源氏の一族近江・美濃・尾張・信濃・甲斐・伊豆・常陸等主として東國の各方面にひそんで居た。



【二十年の久しき間】

頼朝は幼より器局あり、父義朝は殊の外寵愛してゐた。平治の亂には十三歳で従五位下、右兵衛權佐であつた。翌年捕へられて斬られるところを、清盛の母池禪尼の情けによつて助けられ、伊豆の蛭島に流された。北條時政は清盛の命によつてこれを監視して居たのであるが、その將來を見込んで大に好遇した。永曆元年伊豆に流されてから、治承四年の舉兵まで足かけ二十一年である。

【まつさきに】

頼朝の舉兵は治承四年の八月で、義仲の舉兵は九月であつた。以仁王の令旨は四月九日付になつてゐるが、頼朝はこれをお受けすると、直ちに北條時政と相談して準備にかゝつた。ところが五月に以仁王宇治の戦に敗れ、流矢にあたつて薨せられると、三善康信がこれを頼朝に報じ、『用心しないと、清盛は源氏の一族を悉く除く計畫を進めてゐるから』と云つた。そこで頼朝も大に急いで、部下を各方面に遣はして東國の兵を集めさせた。そして愈々八月に兵を舉

げたのである。

【其の地方を定め】

頼朝は時政と共に先づ目代平兼隆を滅し、石橋山に陣したが、大庭景親と戦つて敗れ、僅かに身を以て逃れて安房に赴いた。かくて上總から下總に入り、十月武藏に入った時には兵三萬となり、東國の豪傑來り屬するもの日に多く、兵勢益々盛になつた。

流されしより二十年の久しき間その地の豪族北條時政にたよりておもむろに回復の時を待ちしが今や以仁王の命を受くるに及びて時政等と共にまつさきに兵を擧げたり東國にはかねてより心を源氏によする武士多かりしかば頼朝はこれ等の人を従へ早く其の地方を定めて遂に鎌倉に據れり。



【大兵をひきゐ】

維盛は兵五萬を率ゐて富士川の西岸に陣したが、頼朝は兵二十萬を率ゐて黄瀬河に至り、更に武田信義は兵二萬を以て甲斐から來て頼朝を助けた。この狀況を聞くと、平氏の軍は大に懼れ、全く鬪志を失つてしまつた。西國の武士は概して柔弱であるのに、東國の武士は最も勇敢であり、馬も亦逸物が多かつたといふ。その上四倍以上の兵數があるのだから、平家方が戦はずして逃げたのも無理は無い。

【源氏の二隊】

甲斐から來た武田信義(源義光の曾孫)の兵二萬が、夜潜かに間道から出でて平氏の軍の後方を襲つたのである。すると富士沼に集つて居た水鳥が驚いて立つた。ピク／＼して居た平氏の軍はその音を聞いて『すはこそ大軍が殺倒した』と云ふので、上を下への大混雜をやつて、武器も糧食も捨て、おいて逃げた。恰も滿洲の匪賊が、日本軍の來るのを知ると大あはてにあはて、逃げるのと同様であつたらうと思はれる。

尋常小學國史上卷より

清盛頼朝を討たんとて孫維盛等をつかはせしかば頼朝大兵をひきゐ駿河に進みて平氏の軍と富士川をはさんで陣せりある夜源氏の二隊ひそかに平氏の軍の後へまはらんとせしに、あたりの沼より水鳥數多飛びたちたれば平氏の軍その羽音に驚き敵兵大いに至れりと思ひ弓矢をすてて逃げかへれりされど頼朝は之を追はず、なほ東國をかためんとて兵を鎌倉にかへさんとせし時たま／＼弟義經來り會せりはじめ平治の亂の後義經は幼くして鞍馬寺にあづけられしに、ある日寺にておのが家の系圖を見て其の家柄を知り必ず平家を滅さんと心がけ、これより學問武藝にはげみた

【之を追はず】

頼朝は直ちに維盛を追ふて西上せんとしたが、千葉常胤等がこれを諫めて、『常陸その他に尙従はぬものがあるから、先づ東國を定めた後に西進するがよい』と申し出たので、頼朝即ち武田信義に駿河を、安田義定に遠江を守らせて置いて、軍を返して相摸の國に入り、居を鎌倉に定めてこゝを本據とした。



【起せしことを聞き】

以仁王の令旨は直接奥羽までは届かなかつたが、頼朝が兵を擧げたと聞いては、兼て再擧を計つてゐた義経は矢も楯もたまらず、秀衡が形勢を觀望して留めるので、とう／＼抜け出して、僅かに二十餘騎を従へて頼朝の處に來た。

【義家・義光兄弟の昔】

義光が兄を助けんとして遙かに京都から奥羽に下つた事實（六九頁参照）と非常によく似てゐる。頼朝はこの時維盛と對陣して黄瀬川に居たのであるが、『御身を見るのは父上に會ふ様な心地がする』と云つたといふ。それは義家の云つたのと同じ言葉であるが、事情が事情だけに義家よりもつと痛烈であつたと思はれる。（國語二の三牛若丸）

【木曾山中】

義仲二歳の時、父義賢は姪義平のために殺された。義平は義仲をも殺さんとして畠山重能に命じたが、重能は義仲を憐んで齋藤實盛に託した。實盛は信濃に居る乳母の夫中原兼遠の處に義仲を送つたので、義仲は兼遠の手で大きくな

【西國に】

義仲の兵東山・北陸の二道から進んで延暦寺に據つた。後白河法皇は夜、宮を出て延暦寺に幸せられた。そこで宗盛は一族を率ゐ、安徳天皇及び神器を奉じて九州の太宰府に至り、更に四國を循へて屋島に據つて居た。義仲がこれを討つてゐる間に、義経の兵が京都に入つたので、義仲も京都に歸つたのである。

【亂暴の行多く】

義仲京都に入つた時、天皇は西海に赴かれて京都に主が無いたので、法皇は高倉天皇の子尊成を立てられた。これ即ち後鳥羽院である。併し義仲は以仁王の子北陸宮を立てんとしたので、法皇との間に圓滿を缺く様になつた。而して義仲の兵五萬京都にあつて民家を奪掠するので、法皇これを止めんとせられたが、義仲は『官から糧秣を給せられないから、兵士は掠奪しなければ餓死する外は無い。又馬が弱つては戦争は出來ないから、近郊の麥を刈つて食はすのだ』と云つて命を奉じなかつた。又妻の兄權大納言師家を攝政

つたのである。木曾山中に育つたと云つても何も猿か何かの様に山林の中で育つたといふ意味ではない。長するに及び度々上洛して形勢を窺つてゐたが、以仁王の命旨により兵を集め、石橋山の戦後遂に兵を擧げた。

【追落し】

牛數萬を敵の背後に廻し、炬を角に縛して追ひかけたので維盛の軍谷に落ちて死するもの一萬八千。（國語六の六）

り、後奥州平泉に下りて、其の地の豪族藤原秀衡の家に隠れりたりしが頼朝の兵を起せしことを聞きて上り來りしなり。こゝに於て頼朝は先祖義家義光兄弟の昔をもの語り、其の手を取りて喜びをけりといふ。  
頼朝の從弟義仲は、さきに二歳の時父を失ひてより、信濃の木曾山中に育ちしが、頼朝の兵を擧ぐると同時に兵を起し、信濃より北國にうつて出て、維盛の大軍を越中の俱利伽羅谷に追落し、進んで京都にせまされり。此の時清盛はすてに病死し、其の子宗盛は一族と共に、安徳天皇を奉じて西國におち行きたり。  
義仲はたゞちに京都に入りて、後白河法皇より平氏追

尋常小學國史上卷より

尋常小學國史上卷より

討の命を受けしが、勢にまかせて亂暴の行多く、遂にそむきて法皇の御所を襲ふに至れり。頼朝すなはち弟範頼義経を京都につかはして之を討たしむ。此の時佐々木高綱は梶原景季とおの／＼頼朝より賜はれる名馬にうち乗りて、宇治川の先陣を争ひ、高綱まづ渡り着きて諸兵これにつき、大いに義仲の軍を破り、義仲は遂に近江の粟津にてうち死せり。  
かゝる間に平氏は再び勢を得て、京都を取りもどさんとし、攝津の福原に引きかへせり。頼朝さらに範頼義経に命じて之を討たしむ。二人道を分ちて進み、範頼は生田、森より義経は一谷より福原に向ひしが、義経は鶴越

にしようとして基通の攝政を褫ひ、法皇の親臣中納言朝方以下四十九人の官職を褫つたりした。かくて遂に兵を擧げて反し、法住寺を圍んでこれを焼き、後鳥羽院を閑院に、法皇を攝政の第に徙しまつた。

【賜はれる名馬】

高綱の貰つたのは生暖、景季のは磨墨と云つた。生暖の方が勝れて居て頼朝の最も愛した馬である。



【敵の後に出て】

平氏の本陣たる福原は今の神戸市附近で、その東門は生田森(神戸市東端)、西門は一谷に構へられ、兵士十萬その中に充滿し、海岸には船數萬艘を設けて水戦に備へて居た。山陽・南海の諸國は悉くこれに屬して兵勢大に振つた。

そこで範頼は兵五萬を率ゐて池田附近・西宮を経て東門に向ひ、義經は丹波路即ち鞆岡・園部・篠山を経て一谷に向つた。而して義經は部下の土肥實平等をして西門に向はせ、自ら熊谷直實以下精銳三千騎をすゞつて鴨越から直ちに會下山の麓に出て敵の背後を衝いたのである。福原の背後は摩耶山から續く一連の峻嶺で、もとより道といふほどのものなく、この方面から攻めて來るだらうとは夢にも想像しなかつた。あまりのことに城兵度を失ひ、混亂の極に達した。そこへ火をつけられ、風が烈しく吹いたので烟塵晦冥、東西の門も守備を失つて全軍總崩れとなり、争つて船に乗つたのは全く滑稽を通り越して悲惨であつた。

【たゞ一人】

【大風をおかし】

一谷の戦は壽永三年二月であつたが、この頃から頼朝と義經との仲がわるくなり、平氏の追討は範頼に命じて義經には命じなかつた。併し範頼が周防から豊後の方面に進んで糧食に窮してゐたので、翌年二月義經強ひて願つて船を攝津の渡部(大阪附近)から出した。(國語四の十 七扇の的)

【西海に走れり】

宗盛が安徳天皇を奉じて屋島にある時、知盛は九州の兵を以て門司關を固め彦島を本營として居た。そこで屋島から志度に遁れた宗盛の軍は、義經の急追に己むなく西に走り筑前の箱崎に至つたが、範頼が大軍を擁して豊後に居るので、又船を返して長門の壇浦に至つたのである。

【義經の身代】

平教經が自慢の強弓を以てしきりに義經を覗ふので、麾下の勇士は義經の馬前に出てこれを遮り、十餘騎悉く殲されたその中に繼信もあつた。弟の忠信と共に秀衡の命によつて奥羽から従つて來たものであるが、遂に二十八歳を以て

敦盛たゞ一人が船に乗り後れたといふので、如何に敵が狼狽したか分かる。船ではあまり澤山乗り込んで覆つた大船も三艘あり、首を斬られたもの二千、溺死したものは無數であつた。

【たゞちに馬を】

「敵に後ろを見せるは卑怯だ」と云はれると、直ちに馬を乗り戻した。名を重んずる武士の意氣地である。



尋常小學國史上巻より

より敵の後に出て急に攻めたてしかば平氏の軍かまはず宗盛天皇を奉じて讃岐の屋島に逃る時に平敦盛はたゞ一人舟に乗りおくれたれば騎馬のまゝ海に入り沖の舟におよぎ着かんとしけるに義經の部下熊谷直實扇をあけて之を呼びかへせり敦盛は少年ながらたゞちに馬を

尋常小學國史上巻より

返して直實と組打し遂に首をうたれたり敦盛の如きは實にけなげなる若武者といふべし。義經さらに大風をおかして船を發し早く屋島の城に攻めよせて火を放ちたれば宗盛また天皇を奉じて西海に走れり此の戦に義經の部下那須餘一は扇のなまめを射て譽をあけ奥州より義經に従ひ來りし勇士佐藤繼信は義經の身代となり敵の矢にあたりて忠死をとげたり。義經また平氏の逃ぐるを追ひて大いに長門の壇浦に戦ふ平氏の軍遂に全く敗れ宗盛は卑怯にして敵に捕はれて後殺されしが其の他の一族は或は戦死し或は文字通り君の馬前に討死したのである。

【宗盛は卑怯にして】

一族或は戦死し或は海に投ずる中であつて、大将の宗盛のみはぐすくしてどうしても自決することが出來ず、遂に捕虜となつた。後宗盛は義經に伴はれて鎌倉に送られ、頼朝の前に出てしきりに助命を乞ふたが許されず、更に義經に伴はれ、西上の途次、近江の篠原で斬られた。(國語六の十号流し)



【こゝに亡びたり】

平家の一族は或は戦死し或は溺死し、捕へられたものも後に斬られなどして、こゝに全く滅亡したのであるが、尙多少の残黨が逃げのびたものもあるかも知れぬ。今日九州の五箇莊などの様な山奥の孤村や海中の孤島に、平家の子孫と稱する者のあるのは、全然信用は出来ないにしても多少の關係があるかも知れない。

【いだかれて】

或は云ふ、二位尼は神璽・寶劍を挟み、按察局は天皇を抱きまつて海に投じた。天皇の御遺骸は戦後土人が海中に求めて今の阿彌陀寺陵に葬つた。神鏡は典侍が奉じて將に海に入らんとする所を抱き止めた。神璽は海上に浮び出たが、神劍は遂に沈んだ。後に範頼が搜索したけれども、得られなかつた。

義經が神鏡と神璽を奉じて入京すると、朝廷は儀式を定めてこれを迎へまつり、後鳥羽院は始めて正式に即位せられたことになる。神劍は後に伊勢の神庫の劍を以て代用せら

れたが、沈んだのは崇神天皇の摸造せられたもので、神代からの御劍は今も熱田神宮に鎮まりますのである。

【義經をいみて】

義經は精悍で頼朝とは氣の合はない所がある。朝廷義經の功を賞して左衛門少尉に任じ昇殿を許されたのを猜疑し、梶原景時が義經と合はないために極力頼朝に讒したので、遂に義經を除かんとするに至つた。

平氏亡ぶ	海に沈みて平氏こゝに亡びたり此の時天皇は御年八歳にましませしが清盛の妻二位尼にいだかれて海に入りたまひしはまことにおそれ多き御事なり。
頼朝の死	義經はかく頼朝のために平氏を滅して大功を立てたれど頼朝は義經をいみて遂に之を除かんとするに至れり義經また平泉に逃れて秀衡にたよりしが秀衡の死せし後その子泰衡は頼朝の命によりて義經を殺せり然るに頼朝は泰衡がながく義經をかかまひたるを責めみづから大軍をひきわて奥州をうちやがて泰衡を滅したり。
頼朝の死	こゝに於て國內ことごとく頼朝の威勢になびき従ひ

尋常小學國史上巻より

【義經を殺せり】

秀衡は義經を奉じて鎌倉に對抗しようといふ考があつたので、これを衣川の館に置いて優遇し、朝廷及び頼朝から何と命ぜられても言を左右にしてこれに従はなかつた。然るに文治三年十月に秀衡卒し、長子泰衡に『義經を戴いて大將軍とし、よくその命を聴くやうに』と遺命したが、泰衡は年が若くて思慮足らず、鎌倉の勢力の盛なのを見て、遂に文治五年閏四月になつて義經を襲ふた。義經は妻子を刺し殺して自刃した。

義經が北海道に遁れたとか、蒙古に渡つて成吉思汗になつたなどは勿論作り話である。

【おごる平家】

『平家物語』の冒頭に「奢れるも久しからず、唯春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ」といふ句がある。清盛が太政大臣となつてから僅かに十九年、平治の亂に源氏を叩きつけた時から數へても、二十七年にしかならぬ。眞に權花一朝の夢の如く短い一族の榮華

尋常小學國史上巻より



しが頼朝はおごる平家が久しからずして亡びしにかんがみみづからは清盛等の如く高き官位にのぼりて、京都の人々と交ること好まず鎌倉に居りて質素なる生活をなし部下にも儉約をすめたりか

であつた。

【質素なる生活】

子供の時から不自由な中に育つて来た頼朝は、京都へ上つても長居しないで鎌倉に歸り、公卿や平氏の驕つた生活には全く目を閉ぢた。嘗て四天王寺に赴かんとした時、藤原能保が所領の莊園に課して酒食を獻じようとしたら、無益に財を費すのはいけないと云つて斷つた。



【ある人】

ある人は筑後権守俊兼で、壽永三年十一月の事であつた。

【武藝をはげまし】

將士をして浮華柔弱に流れしめないために、極力武術を奨励して質朴剛健の氣風を養ふことに心掛けた。故に鎌倉の武士は、遊戯と云つても流鏑馬・笠懸・犬追物などの様に騎射を主とするものばかりで、放鷹や狩獵も亦たび／＼各地で行はれた。京都に於ける詩歌・管絃・圍碁・雙六などは全く別のものであつた。

【狩をもよほし】

那須野の狩獵は建久四年四月に行はれ、富士野の卷狩は同年五月八日に鎌倉を出發して六月七日に歸着するまで約一ヶ月に亘つて行はれた。曾我兄弟の復讐はこの際の出來事で、實に五月二十八日の夜半であつた。(國語四の廿) 四曾我兄弟かゝる大規模の狩獵は、一は將士の武を練るためであるが一は勞威を天下に示さんが爲である。近頃の特別大演習が假想敵國への示威であるのとよく似てゐる。

【天下の政治】

治承四年に頼朝は鎌倉に居を定め、先づ東國に於て根據を固めようとした。富士川の戦の後侍所を置いて軍事を司らせ、一谷の戦後公文所(後に政所)を置いて政務を司らせ、次で冊註所を置いて訴訟を裁判させた。この三つの役所が所謂幕府の組織であつて、簡單にして實効を尙ぶ武家政治の特徴をあらはしてゐる。(國語十二) (の七鎌倉)

つてある人十餘枚の衣服を着かざりて頼朝の前に出てたるに、頼朝たゞちに刀を取りて其の衣服のつまを切り、大いに其のおごりを戒めたることあり、又常に武藝をはげまし、富士の裾野をはじめ所々にしば／＼狩をもよほしなどして、武士の勇氣を養ひたり。かくて鎌倉の勢いよく、強くなり、紀元一千八百五十二年、建久三年頼朝征夷大將軍に任ぜられて、遂に天下の政治をとるに至れり。將軍の政廳を幕府といふ。これより凡そ七百年の間武家の政治つゞきて、朝廷の御威光衰へたるぞ遺憾なる。

尋常小學國史上卷より

【系】

頼光—頼國—頼綱—仲政—頼政—仲綱  
頼信—頼義—義家—義親—爲義

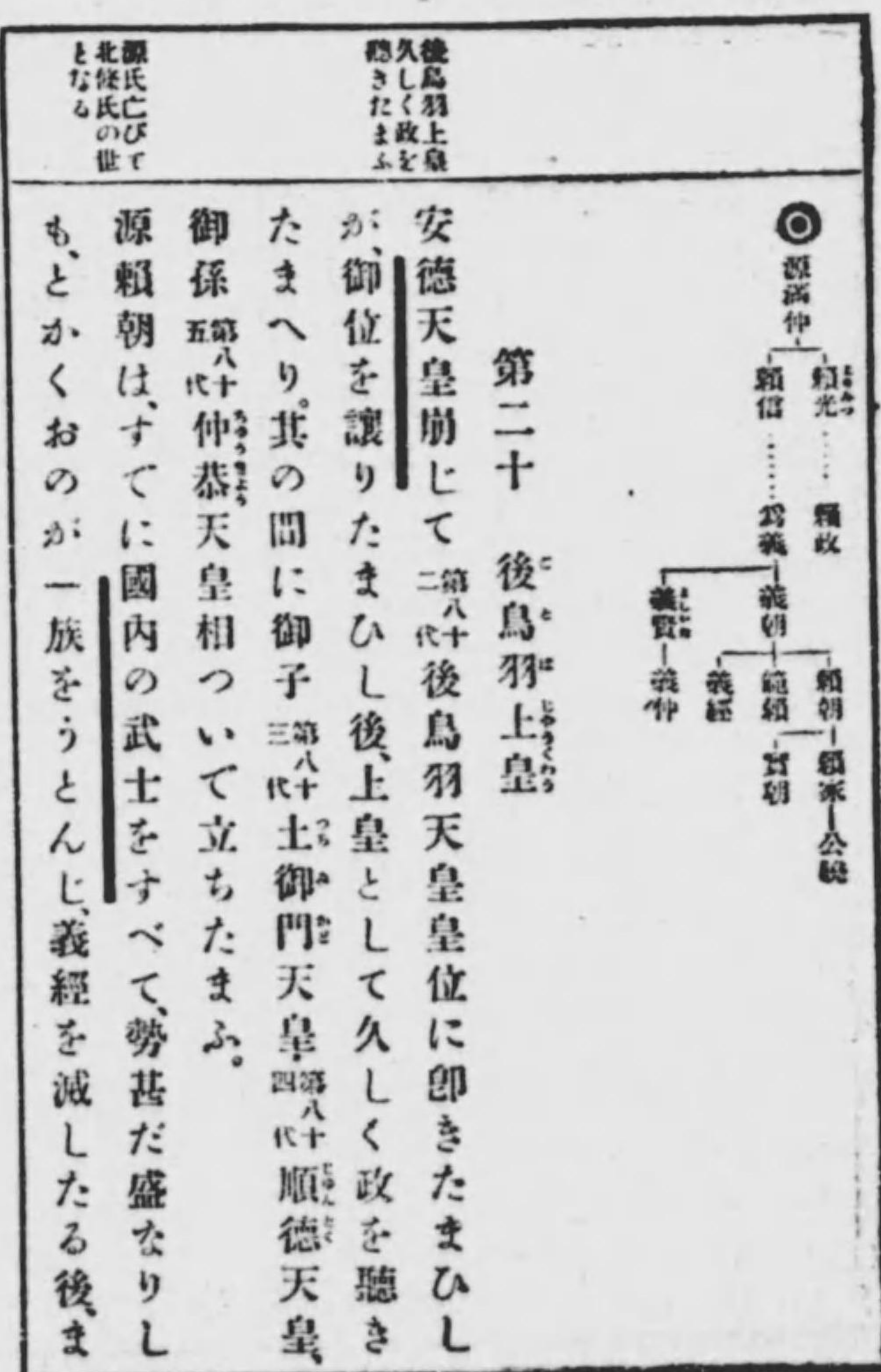
【御位を譲り】

後鳥羽天皇が位におつきになつた時は、頼朝が天下の政權を握り、公卿は攝政藤原兼實をはじめとして多く頼朝に黨し、宮人にも丹後局の如く常に京師の消息を關東に漏すものがあつて、御政事が意の如くならなかつたから、僅か四歳の皇子を立て(土御門天皇)院中にあつて政を決せられた。ところが土御門天皇は極めて温順な方であつたので、剛健におはしました御弟の順徳天皇に位を譲らしめられ、た。その内に後鳥羽上皇は關東をお惡みになること益々甚しく、承久三年これを討伐せんと御企があつて、天皇もその謀議にあづからせ給ふには、讓位せられる必要があつたので、更に仲恭天皇に御譲りになつた。かくて一度に三上皇があつたので、本院・中院・新院と申し上げた。

【一族をうとんじ】

第二十 後鳥羽上皇

尋常小學國史上卷より



頼朝は賢明の士であつたが猜疑心が強く、讒佞の言に動かされて多く骨肉を害し功臣を殺した。武勳赫々たる義經を除き、以仁王の令旨を傳へた源家勃興の首唱者行家を殺し、温厚でよく頼朝に仕へた範頼をも些細のことから遂に亡ぼした。又功臣にして誅戮されたものに平廣常・一條忠頼・安田壽定等がある。かくてその結果は子孫を孤立せしめて北條氏に乗せられたのである。



【うたがひて】

富士の卷狩の時曾我兄弟の讐討があつた。然るに鎌倉では頼朝も害せられたといふ流言があつたので、範頼は頼朝の夫人政子を慰めて「私が居ますから御心配なさいますな」と云つたのを、後に頼朝が聞いて範頼に異圖があるかと疑つた。そんなことが原因でとう／＼除かれたのである。

【時政のために】

頼家は不肖の子で暗愚であつたから、將軍になつても母の政子が主として政務を見て居た（尼將軍と云はれた）。ところが頼家の淫逸、嬌侈度なく、日に宴樂に耽り群小を近づけて功臣を殺さんとしたりした。政子が屢々これを戒めたけれども、毫もその行を悔めないで、遂に廢せられ、後に殺された。時政は政子の父で實際の政權を握つてゐた。

【實朝を怨み】

公曉は父の頼家が殺されたのは實朝のためだと信じて、父の讐を報じようとして三年前からつけねらつて居たのである。頼家の殺された時は公曉は四歳であつた。而して實朝

【諸事を行ひ】

何事も日課を定めて嚴重に行はせられた。極めて趣味廣くまじし、歌人を召して和歌を詠ぜられ、琵琶・蹴球なども學ばせられ、又常に武を練り、宇治に幸して親ら水泳の技を練られ、流鏑馬などを行はれ、又院中に刀工を召して鍛錬せしめられ、親ら刀劍を鍛へて武士に賜はるなどの事があつた。

【ほしいまゝに】

頼朝が全國に守護や地頭を置くことを願つた時には、己むなくこれをお許しになつたが、そのために政權は全く武門に歸した。これは上皇の最も遺憾に思召したことで、折あらば政權を回復したいとお考へになつたのは當然のことである。

【しばく】

上皇の寵妓龜菊の莊園の地頭が租を納めないで、これを罷免するやうに義時に命ぜられたが、義時勅を奉じなかつた。仁科盛遠が朝廷に仕へて西面の武士となつたのを怒つ

を殺した時は十九歳になつて居た。或は義時が公曉を、のかして、實朝を殺させたのだとも云ふが、確證は無いがさうかも知れない。

【いさゝかの血縁】

頼朝の妹の娘が西園寺公經に嫁し、その娘が藤原道家に嫁して生んだ頼經を迎へるのであるから、頼朝の父義朝から數へて五代目の孫である。この時年二歳であつた。

大範頼をもうたがひて之を除きたれば源氏の勢おのづから衰へたり然るに頼朝の妻の父北條時政は頼朝が始めて兵を挙げし時より之を助けて力をつくし、幕府を開くに及びてはおもに其の政治にあづかりしを以て、其の勢甚だ強くなれりされば頼朝薨じて長子頼家將軍となりしが、時政のために廢せられ頼家の弟實朝職をつげり頼家の子僧公曉實朝を怨み實朝が鶴岡八幡宮に參詣せし時ひそかにうかひよりて之をさし殺し、公曉もまた時政の子義時に殺されたり。こゝに於て頼朝の子孫全く絶えたれば、義時は京都より頼朝といさゝかの血縁ある幼主を迎へ、みづから執權とな

尋常小學國史上卷より

尋常小學國史上卷より

りて、幕府の權をもつばらにするに至れり。後鳥羽上皇は御生れつき嚴格にましく、常に日課をたてて諸事を行ひたまひ、風雨の日といへども決して之をマめたまはざりしほどなり、されば上皇はかねてより幕府がほしいまゝに天下の政治を行ふを御いきどほりあり、折もあらば政權を朝廷に取りもどさんと思召されたり。たま／＼頼朝の子孫絶えたるに、幕府の政治はもとのまゝなるのみならず、義時しばく上皇の仰にそむきしかば、上皇大いにいきどほりたまひ、仲恭天皇の承久三年、遂に國々の武士を召して義時を討たしめたまへり。

て、義時その領地を沒收し、上皇の御命令があつても遂に返さなかつた。これ等は承久亂の近因として數へられる。

【國々の武士】

承久三年五月、流鏑馬に託して近畿十四國の兵を集め一千七百を得られた。そこで幕府黨の西園寺公經を幽し、京都守護伊賀光季を攻め殺し、陣宣を五畿七道に發して義時の追討を命ぜられた。



【大軍をひきあて】

關東ではまだ兵が集まらなかつたが、ぐずぐずしてゐると  
どんな變が起るかも知れないといふので、大江廣元等の意  
見により、泰時はその子時氏、弟有時以下僅かに十八騎を  
率ゐて出發した。併し諸將の軍争ふてこれに従ひ、忽ち雲  
霞の如き大軍となつた。即ちこれを三軍に分つて三道から  
進ましめた。

東海道 泰時・時房の率ゐる十萬騎

東山道 武田信光等五萬騎

北陸道 朝時等の四萬騎

即ち合計十九萬騎で、義時は鎌倉に残つて軍務を總べ徵發  
を督したのである。

【或は斬り或は流し】

西面の武士後藤基清・平有範・佐々木廣綱・大江能範の四  
人を京都に斬り、主謀の公卿、前權中納言藤原光親、權中  
納言藤原宗行、右兵衛督源有雅、參議藤原範茂等を捕へて  
關東に送り、途中でこれを斬らせた。

【義時の無道】

後鳥羽上皇の舉兵はその時機をあやまり、計畫の宜しきを  
得なかつた點がある。併しそれだからと云つて義時の罪が  
軽くなるわけは無い。泰時鎌倉を出發の際、義時はこれを  
戒めて『君の御輿に向つて弓は引くな。兜を脱ぎ弦を切つ  
て偏に畏まり身を任せ奉れ』と云つたのは當然ながら感心  
であるが、後にしたことは君の御輿に弓を引いたと同じ事  
である。政權が朝廷に返らなかつたことが、却つて後の善  
政となつて人民に幸したとしても、その結果が義時の無道  
を償ふことは出来ぬ。實に義時の無道は空前絶後である。

【六波羅に置き】

承久の變後泰時は六波羅(今の方廣寺附近)の北亭、時房はその南  
亭に居つた。その後代々北條氏の一族を六波羅探題に補し、  
表面は近畿西國の政を執らせ、内實は朝廷の動靜を探らせ、  
以て朝廷の權力を抑へて自己の勢力を張つたのである。故  
に承久の變は、政權を朝廷に恢復せんとして却つて幕府の  
基礎を堅固にし、朝廷は幕府のためにひどく束縛せられて

【土御門上皇を土佐】

土御門上皇はこの度の謀に與かられなかつたので、北條  
氏の方でも別に咎めなかつたのであるが、御父後鳥羽上皇  
御弟順徳上皇が共に遠方に遷幸せられるのを見ては、獨り  
京都に止まるに忍びないと仰せられて、特に義時に諭され  
て土佐の幡多に遷幸あり、間もなく阿波にお遷りになつた  
が、十年ぶりに御病氣で崩御になつた。

承久の變

北條義時の無道

義時これを聞き、子泰時等をして大軍をひきあてて京都  
に向はしむ。泰時等官軍を尾張美濃近江等に破りて、遂  
に京都をおかせり。義時すなはち上皇に從ひたてまつ  
りし人々を、或は斬り或は流し、おそれ多くも後鳥羽上  
皇を隠岐に、順徳上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐(阿波に  
隣りて)にうつしたてまつり、又仲恭天皇を廢して、  
天皇を立てたてまつり、世に之を承久の變といふ。武  
人天皇の思召にそむき、みだりに兵を擧げて京都をお  
かしまつた。さへ天皇を廢立し、三上皇を遠島にうつし  
たてまつりしが如きは、かつて例なき大事變にして、義  
時の無道こゝに至りて極まれりといふべし。

尋常小學國史上卷より

尋常小學國史上卷より



後鳥羽上皇の御所に於て月夜を眺むるに似たる

かくて後鳥羽上皇の御  
志はむなしくなり、これ  
より後、北條氏は一族の  
ものをかへるゝ京都の  
六波羅に置き、畿内、  
西國の政治を行はしめ、  
其の勢ますゝ盛にな  
りたり。其の間に三上皇  
はいづれも憂き年月を  
遠島におくりたまひて、  
遂に其の地に崩じたま

手も足も出ない様になつた。これから後醍醐天皇北條氏討  
滅計畫までは百年以上を經過してゐる。

【遂に其の地に崩じ】

土御門上皇は寛喜三年(一八九一)十月、壽三十七。  
後鳥羽上皇は延應元年(一八九九)二月、壽六十。挿繪は  
海上を望見して遙に都の空を偲ばせ給ふ有様である。  
順徳上皇は仁治三年(一九〇二)九月、壽四十六。



【隱岐の御所】

後鳥羽上皇は七月六日、四辻の仙洞より鳥羽殿に遷幸、三日隱岐に向つて御發聲、二十七日出雲の大濱港に御着、それから船で隱岐に向はせられ、八月五日に菊田郷（今海士郡海士村）の行宮に入らせられ、それから十九年の憂き年月を過されて延應元年二月二十二日崩御あらせられた。

その行宮といふは人里離れた山蔭で、海から少し入り込んだ所に、大きな岩のあるのを便りに、松の柱に葦の屋根を葺いた、文字通りの柴の庵で、はる／＼と眺められる海は何千里も続くかとはばかり、風の強い日などは、いかばかり御心を痛めまらせた波の音であつたことか、『われこそは』の御製を拜するにつけても、眞に恐懼に堪へないものがある。

【御食事を絶ちて】

順徳上皇は承久三年七月二十日に佐渡に遷幸せられた。花山院少將能氏朝臣、左兵衛佐範經、上北面左衛門大夫康元及び女官二人が供奉したのみである。御舟が眞野灣内懸ヶ

浦についた時

いざさらばいそうつ浪にこと問はん  
おきの方には何事かある  
と御製遊ばした。それから暫く國分寺を假宮とせられ、後に黒木御所（今金澤村に址あり）に移らせられた。隱岐から後鳥羽上皇崩御の報はつてからは殊の外悲しませ給ひ、遂に仁治三年九月十二日に崩御あらせられた。

ひしが中にも後鳥羽上皇の隱岐の御所は、わづかに雨風をしのぎたまふばかりの假屋にて、しほ風のはげしく吹きける時

われこそは新島守よおきの海の  
あらしなみ風こゝろして吹け

とよみたまふ上皇はこゝにいますこと十九年に及び、御年六十にて崩じたまふ之を傳へ聞きたまへる順徳上皇はあけくれ悲しみの御涙にくれたまひしが、これより三年の後御みづから御食事を絶ちて、佐渡の島にてかくれたまへりまことにおそれ多きしだいならずや。

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

【無道の行をなせしが】

義時の無道は寸毫も假借の餘地がないが、その子泰時及び泰時の孫時頼は善政を布いたので、天下はよく治まつて、後の外寇に際してよく國威を發揚するの素地をつくつた。泰時は仁慈を以て下に對し、聽訟最も公平で、百姓その徳に懐き、時頼は節儉を守り尙武の氣を養ひ、博奕・造酒を禁じなどした。陪臣を以て政權を左右しながらよく百餘年の太平を保つたのはその善政の賜である。  
（國語十の十 二、鉢の木）

【時宗】

時宗は時頼の子である。時頼が病氣のため職を罷めた時、時宗はまた幼年であつたから、時頼の從兄弟半にあたる長時が執權となり、八年の後長時の叔父の政村がこれをつぎ四年にして時宗に傳へた。その時時宗は十八歳であつた。時宗は生れつき剛毅果斷でも信仰心敦く、大覺禪師・佛光禪師などに參禪して心膽を鍊り、又これ等の人について支那や蒙古の事情を聽いて、よく敵を知り己を知つて、かの大英斷を下したものであらう。

併し一面に於て彼の苦心も非常なものであつた。即ち自ら大部の佛經を血書して祈禱を凝らした位である。『その一字一句が悉く化して神兵となり、魔軍必ず降伏するであらう』と佛光禪師も云つてゐる。

【武人を召して】

時宗十一歳と云へば、その時の將軍は宗尊親王であつた。當時は最も武藝を重んじ、これを奨励した時代である。

北條時宗の事  
北條時宗の事  
北條時宗の事

第二十一 北條時宗

北條義時はかく無道の行をなせしが、後時宗の代に至り、たま／＼未曾有の外寇ありて時宗もつばら之にあたり、大いに我が國威をあぐることを得たり、時宗は時頼の子にして、相模太郎といふ生れつき豪氣にして弓の上手なり、かつて將軍武人を召して弓を射させたる時人々みな射そんぜんことを恐れて、ためらひたるに、わづかに十一歳なる時宗は、少しも臆する色なく、ひと



【十八歳にて】

時宗が執権となつたのは文永五年三月で、蒙古の使が始めて九州の太宰府に來たのはその年の正月であつた。尤も時宗は已に四年前、政村が執権となつた時から連署といふ役になつて、實際幕府の政治に關係してゐたのである。

【國々を攻取りて】

蒙古は今の外蒙古、オノン・ケルレン兩河の附近、即ちバイカル湖の南東方に遊牧を事とする一部落であつたが、部長鐵木真大略ありよく兵を用ひ、連りに近隣の諸部を併せて、遂に殆ど内外蒙古を統一し、帝位に上つて成吉思汗と號した。これが土御門天皇の建永元年（義時執権）であつた。それから子の窩淵臺の時になつて金を滅し宋を侵し、朝鮮半島に入つて高麗を従へ、又一方は中央アジアから西ヨーロッパの諸國を討ち従へた。

【無禮なる書】

蒙古の國書には「小國といふものは凡て大國と仲よくするものだ。高麗も已に來朝したから日本も來朝してはどうか。

朕は四海を一家と考へてゐる。兵を出して征伐するなどは好まない」とある。又高麗王の書には「わが國已に蒙古大國に臣事してゐる。今皇帝貴國と通好せんとするのは、後世に残さん爲である。宜しく使を遣はされたい」云々。

【しりぞけたり】

朝廷では答書を草して鎌倉に下されたが、時宗その不可を奏したので、使は太宰府に止る五ヶ月の後空しく歸つた。

り馬に乗りて進み出て、一矢にて的に射あて、大いに譽をあげたることあり。第九代龜山天皇の御代、十八歳にて幕府の政治を執れり。

これよりさき、支那の北方に蒙古といふ國おこり、しきりに國々を攻取りて、其の勢、西の方は今のロシアの西部より、東の方は朝鮮半島に及べり、時に半島にては、新羅すてに亡びて、高麗これに代りあたり。

蒙古王はすてに高麗を従へ、さらに我が國を小國とあなどり、我をも従へんとて、高麗王に命じ無禮なる書を送らしめたり。時宗これを見大いに怒りて、其の使をしりぞけたり。

尋常小學國史上卷より

【支那の大部分】

支那は南宋の時代であつたが、次第に元に壓迫せられ、遂に弘安二年には全く滅亡して、その領土は悉く元のものとなつた。而して蒙古が國を元と名づけたのはそれより九年前わが文永八年の十一月であつた。

【對馬・壹岐をおかし】

その後文永六年にも同八年にも九年にも十年にも使が來たが、何時も答へないで放逐した。そして九州沿岸の防備を益々嚴重にした。

然るに文永十一年十月、元軍一萬五千、高麗軍八千、水夫七千八百、戰艦九百餘艘を以て先づ對馬を侵し、守護代宗助國一族戦死した。次で壹岐では守護代平經高等も戦死し賊は土民を殺し、女子の手に穴をあけ綱を通して船側に吊し、次で肥前を寇し、同月二十日博多に上陸した。

【我が將士】

太宰府は急を京師に報じ又九國の兵を徵發す。少貳・大友を始めとして臼杵・松浦・菊池・原田の諸氏、總勢十萬二

尋常小學國史上卷より

文永の役

元兵來寇の圖

やがて蒙古は支那の大部分を取りて國を元と名づけた。第九代後宇多天皇の文永十一年、元の軍高麗の軍を合はせ四萬人を以て、對馬壹岐をおかし、筑前によせ來りて博多附近に上陸せしが、我が將士勇敢にして、よく之を防ぎしかば、敵軍遂に逃去りたり。世に之を文永の役といふ。

千餘人集つた。蹄の音は地を響かして雷の如く、旗の濱風に翻る様は枯野の尾花の如くであつた。敵一人に味方十人もかゝらねばならぬので、功名の得難きを歎き、誰一人として負けるだらうかといふ心配をするものは無かつた。

【元兵來寇の圖】

元の都は今の北平、高麗軍の出發地は合浦（馬山）元軍の出發地は今の杭州附近。鷹島は伊萬里灣外にある。



【また使を】

建治元年四月杜世忠等又修好を求めて長門に來た。時宗これを倉に護送させ、九月七日に龍口で斬つた。そして時宗は進んで元を攻撃しようとして出征の準備を進めた。

弘安二年六月に又使をよこした。幕府はこれを筑前の博多で斬つた。一方益々防備を嚴重にしたことは勿論である。

【石壘】

文永の役の経験に鑑み、敵をして上陸せしめるの不利を考へて沿岸に石壘及土壘を築かした。その延長數千米、高さ三米餘、外側を險にし内側を緩にし、外からは攀ぢ難く内からは馬で駆け上る様にした。そしてこの石壘に據つて弓を射させたので、賊は全く近づくことが出来なかつた。石壘の址は博多灣内今津附近その他にある。

【再び筑前】

蒙古軍高麗軍等合して四萬(東路軍)は戰艦九百に乗じて五月二十一日に對馬・壹岐を侵し、慘虐至らざるなく、更に太宰府を攻めんとして六月五日博多灣口の志賀島に來た。

別に支那を發した江南軍十萬は、六月十五日迄に壹岐に於て東路軍と合する約束であつたが、七月になつて漸く博多に迫つた。

【敵艦を襲ひて】

草野次郎經長は夜襲して賊船一隻を燒き二十一人を斬る。河野六郎通有は帆檣を仆して梯とし、敵艦中に躍り入りて數人を斬り、賊將を捕へて還つた。

時宗の決心

されど元の勢ますく強く、また使を我が國につかはし來れり、然るに時宗は決心いよく堅く命じて其の使を斬らしめ、又石壘を博多灣の海岸に築かして、元軍の來寇に備へたり。

弘安の役

かゝる間に、元は全く支那をあはせ其の勢に乗じて弘安四年四萬の兵を發して朝鮮半島より再び筑前に向はしめ、別に支那より十萬の兵を出したり、朝鮮半島より來れる敵兵は壹岐を侵して博多にせまりしが、菊池武房河野通有等の勇士或は石壘に據りて之を防ぎ、或は敵艦を襲ひて之をなやましたり、ついで支那より來れる大軍これと會して、まさに攻めよせんとせし折し

尋常小學國史上巻より

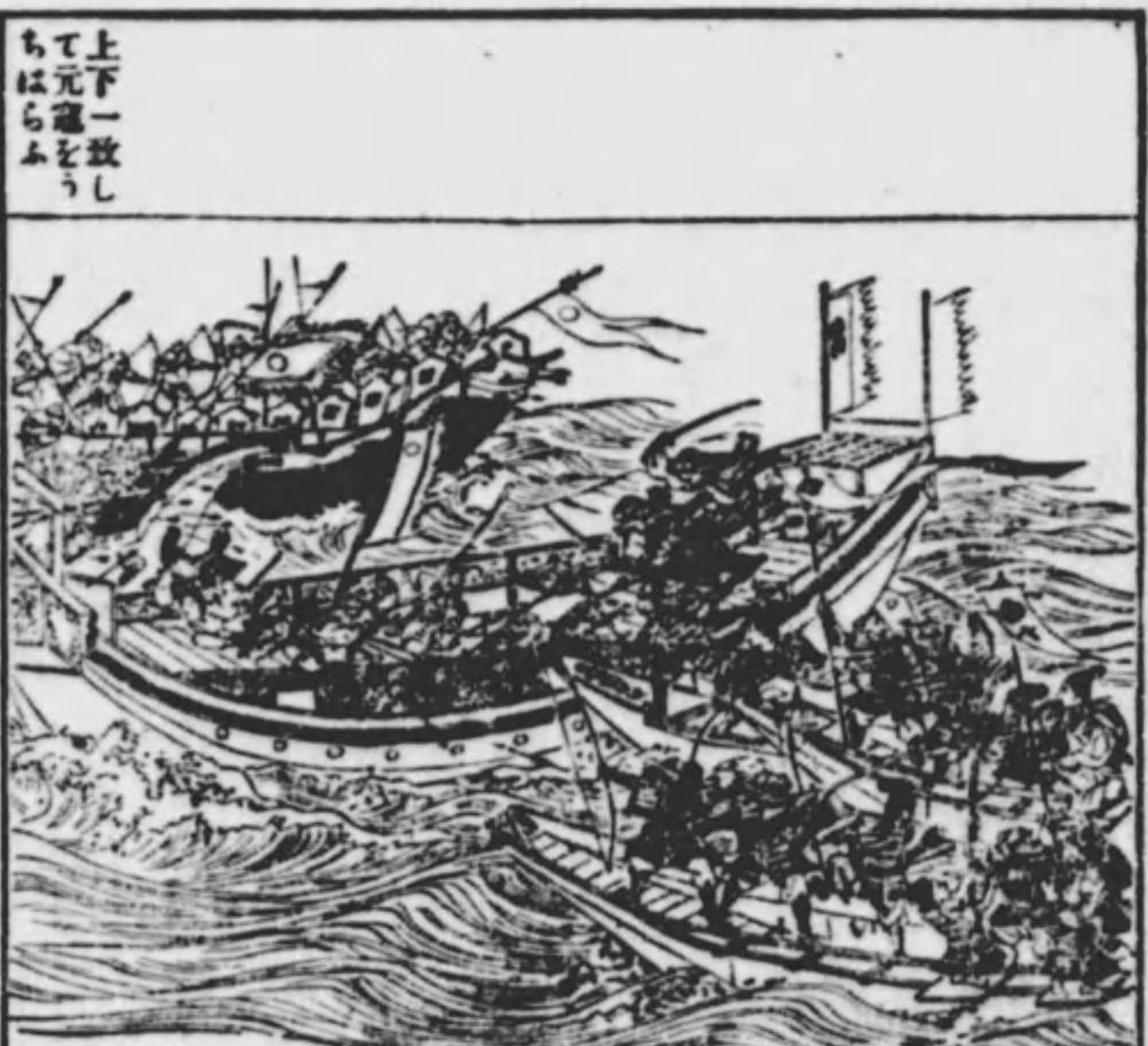
【弘安の役】 (挿繪)

この繪は『蒙古襲來繪詞』の一部で、わが將士が敵艦に飛び込んで奮戦する有様である。これは親しく文永・弘安の兩役に出征した肥後の人竹崎五郎兵衛季長が、その實見した戦争の状況を畫工に描かせたものである。敵艦内で敵を組み敷いて首を斬らんとしてゐるのが季長である。

【大風にはかに起り】

七月三十日の夜半から翌日(閏七月一日)にかけて大暴風が襲來した。この時賊船は博多沖から移つて鷹島附近に據つて居たが、海上不案内で暗礁を恐れて伊萬里灣内に入つて居なかつたので、波頗る高く船皆覆没破壊して溺死するもの算無く、死屍海上に浮んで島の如く、海岸は漂着した死骸で塞がった。時恰も二十日に近い頃であつたから、本邦特有の颱風の襲來したものであらうが、文永の役(十月二十日)にも颱風があつた爲め賊軍は敗走したのであり、近くは日本海々戦にも『天氣清朗なれども波高』かりしなど實に不思議な『神風』といふ外無いのである。(國語六の廿三、神風)

尋常小學國史上巻より



も大風にはかに起りて、敵艦多く沈没し溺れ死するもの數を知らず、諸將われ先にと逃れ去り、取殘されたる兵士は肥前の鷹島に集りしが、或は殺され或は捕はれたり、世に之を弘安の役といふ。此の二度の役はまこ

【取殘されたる兵士】

鷹島に漂着したものの數千人、壞船七八艘を修繕して逃げ歸らうとして居たので、少貳景資兵船數百を以て掩撃し、降を請ふもの千餘人悉く那珂川で斬つた。元軍十萬、生還するもの僅かに三人と傳へられる。これは『元史』に書いてあるが、諸般の事情を考へると高麗軍一萬の中三千、元軍十萬の中二三萬は生還したであらうといふ。(一〇三)



【始めての大難】

文永・弘安の兩役は實に前古未曾有の大事業であつた。これまでもわが國から進んで大陸に兵を送つたことは、神功皇后の時以來數度に及んで居るが、外國からわが國土を侵されんとしたことは一度もなかつた。齊明天皇の時百濟を助けて唐と戦つた時には、或は唐から攻めて來るかも知れぬといふので大に警戒して居たが、遂にその事なくて唐とは平和の交際が續けられたのであつた。

【上下心を一にし】

泰時・時頼の善政で天下よく治まり、民力大に蓄積されて居たからでもあるが、併し承久の變に勤王軍に加つて、領土を奪はれたものゝ子孫など、北條氏を敵視するものも少くはなかつたであらう。然るに一旦緩急あるや、北條氏に對する宿怨などは一切忘れて、國民が皆一致協力して事に當つたのは、全くわが國民性によるのである。日清・日露の役にあたつても、政争などは全然中止して國民は直ちに一致した。これ敵國の豫期しなかつたことである。

【御生れつき】

後醍醐天皇は幼より穎悟にましましたので、龜山上皇はこれを愛し給ひ(幕府討滅のことをお考へになつたであらう)御兄後二條天皇を措いてこれを立てんとせられたほどである。故に花園天皇は御年二十二歳で、まだ御讓位の御つもりは無かつたが、後宇多法皇屢々鎌倉を促がされて、遂に後醍醐天皇の御即位となつたのである。

【學者を召し】

天皇に召されたものに文章博士日野資朝、萬里小路宣房、同藤房、北畠親房などがある。天皇廣く書史に涉り、又佛教を信じ眞言・禪宗等を深く研究せられた。時々朝臣を召し、題を與へて文を作らせ、又は詩を作らせ歌を詠ませなどしてその才を試みさせられた。

【はやくより】

後醍醐天皇の御即位の初めは、御父後宇多法皇の院政であつたが、間もなく天皇の御親政となつた。天皇は兼て北條氏が皇位の繼承に干渉し、皇室の權を殺ぎまつるばかりか

而してこの役がわが國民に『國民的自覺』を與へた點の少くなかつたことを見逃してはならぬ。

【再び我が國を】

元の忽必烈は兩度の失敗にも懲りず、更に部下に命じて準備をととのへ、幾度か來寇しようとしたが、臣下に極力諫止するものがあつて、遂に志を果さなかつた。わが國が防備を嚴重にしてこれに備へて居たことは勿論である。

とに我が國始めての大難にして、龜山上皇は大いに之を憂へたまひ、かしくも御身を以て國難に代らんことを伊勢の神宮に祈りたまひ、時宗は大いなる決心を以て事にあたり、國民も皆奮ひおこり、上下心を一にして、遂に此の強敵をしりぞくることを得たり。これより後、元は再び我が國をうかふことなかりき、近く明治天皇は、時宗の大功を賞したまひて、特に従一位を贈りたまへり。

第二十二 後醍醐天皇

弘安の役の後凡そ四十年にして、第六十九代後醍醐天皇御位

尋常小學國史上卷より

尋常小學國史上卷より



に即きたまふ天皇は後宇多天皇の御子にして、御生れつき英明にましましてしかば、幼き御時より御祖父龜山上皇に愛せられたまへり、ずてにして天皇學者を召してひろく學問を修め、又深く御心を政治に用ひたまひはやくより鎌倉

大覺寺統に對しまつては宮に持明院統に對しまつるよりも述べた態度があつたので、(當時は兩統迭立の時代、大覺寺統より出でられた天皇は憤りに堪へず、ひそかに討幕の計畫をめぐらされたのである。

幕府の專横であつたことは、後宇多法皇が天皇に政をお還し遊ばされる場合にも、先づ使を關東に遣はして幕府の同意を求められた事實によつても推測が出来る。



【高時政治を執り】

高時は幼時脳病に罹つたものか非常な低能であつたが、正嫡であるため十四歳で職をついだ。併し無論政治は出来なから、外舅安達時顯等がこれを輔佐して天下無事であつた。然るに長崎高資が代るに及んで、高時の暗愚に乗じて權を恣にし、賄賂横行して政道全く亂れた。而も高時は日夜田樂を催し、大酒を飲んで酔ひつづれたり、數百匹の犬を庭前で鬪はせては物したり、それ等の犬には魚鳥を喰はせ金銀の鎖でつなぎ、錦を着せ輿に乗せて昇ぎなどした。

【人望を失ひ】

陸奥の人安藤季長の一族が嫡長を争ひ、遂に幕府に訴へたが、高資が双方から賄賂をとつて久しく裁斷を下さないで、怒つて國に歸り反旗をあげた。そこで幕府は兵を出して撃たせたが、克たなかつた。

高時病にかゝつたので、高資は貞顯を執權に立てたが、高時これを殺さんとしたので貞顯は薙髮して引退した。そこで更に守時を執權としたが、衆これに服せず政いよく亂

れた。その後何度も陸奥の亂を鎮めんとして兵を出したが、容易に勝つことが出来なかつた。

【ひそかに武士を】

日野資朝は綾繪笠を戴き柿紅衣を着、修驗者の風をして東國に下り、日野俊基は紀伊の温泉に行くと云つて京都を出ひそかに勤王の士を求めた。楠木正成が勅を奉じたのもこの際であつたらう。

幕府の専横を御いきどほりあり、後鳥羽上皇の御志をつぎて、政權を朝廷に取りもどさんと思召したまへり。此の頃幕府にては、北條時宗の孫高時政治を執りしが、生れつき愚にして、日夜酒宴にふけり、數千匹の犬を集めて、其のかみ合などを見るを樂しむと、少しも政治に心がけざりしかば、大いに人望を失ひたり。天皇よりかねての御志をとげたまはんとて、ひそかに武士を召したまふ。然るに其の事早くも鎌倉にもれ聞えしかば、高時大いに驚きて兵を京都に上せたり。天皇難を避けて笠置山に行幸したまふ。  
こゝに楠木正成といふものあり河内の國金剛山の麓

尋常小路の上巻より

【天皇の御召】

太平記には「二人の童子が木の南に座席を設けて陛下をお迎へしたといふ夢を御覽になつて、それによつて楠氏を召された」といふ話が載つてゐるが、勿論これは作り話で、正成は早く已に勅を奉じてゐたのである。天皇笠置に兵を召されると、大和・河内・伊賀・伊勢などから澤山兵が集つたが、正成は兼てから頼みに思召された。(修身五の三)

【赤坂に築き】

赤坂の城は急に築いた假の城であるから、方二百米ばかりの小城で、塀一重をめぐらしたのみで堀もほらず、二十五六の櫓を置いたのみであつた。菊水の旗は葛城おろしの西風に翩翩とひるがへつても、僅か二千足らずの兵力で、三十萬の敵を防ぐことは到底出来るものではなかつた。

【藤房等】

この時護良・尊良兩親王は已に笠置を出で、楠木正成の赤坂城におはしたので、天皇も赤坂へと志して行宮を出でましたのである。従ひまつるもの尊澄法親王・花山院師賢・

尋常小路の上巻より

に住めり。天皇の御召により、笠置の行在所に至りて奏しけるやう、賊軍強しといへども、謀を以てせばうち破ること難からず、されど勝敗は軍の習なればたまぐ敗るゝことありとも、御心をなやましたまふべからず。正成一人生きてありと聞召さば、御運途には開かるべしと思召したまへと、正成かへりて城を赤坂に築き、天皇を迎へたてまつらんとせしが、賊軍間もなく笠置をおとしいれたり。  
天皇藤原藤房等をしたがへ、かしこくも御徒歩にて笠置を逃れ出でたまひしが、途中の御困難ひとかたならず、晝は隠れ、夜はさまよひ、藤房等は三日まで食せざり

萬里小路藤房・同季房・北畠具行等のみであつた。

【美中の御困難】

取るものもとありあへず、たゞ神器のみを奉じ、夜にまぎれて立でましたのであるから、折から風雨は烈しく道は暗く敵の圍の聲此處彼處に聞えて、御供の者も別れくとなり後には藤房・季房の二人しか御手を引きまゐらすものも無くなつた。



【遂に賊の手】

行在所を出でましてから三日の間、一食もとらせられず山道を迷はせられて、有王山（櫻喜郡多賀村附近）の麓に出でられ、殆ど人事不省の状態にて打伏せられた時、深須入道・松井藏人の兩人遂に尋ね出し奉った。そこで極めて粗末な張輿に乗せまゐらせて宇治の平等院に、翌月（十）六波羅に入らせられた。尊澄法親皇・北畠具行・千種忠顯等も皆執へられて賊の邸に拘留せられた。

【隠岐の島に】

元弘元年十二月、幕府は後醍醐天皇を隠岐に遷しまゐらせ尊良親王を土佐に、尊澄法親王を讃岐に遷さんことを奏した。翌年二月三日、天皇京都を出でて隠岐に遷幸し給ふた。一條行房・千種忠顯は内侍阿部廉子その他と共に天皇に扈從し、幕府の將千葉貞胤等兵を率ゐて乘輿を護衛し奉った。その禮は承久の時、後鳥羽上皇の遷幸に比すれば頗る町重であつたが、觀る者悲憤して哭聲巷に満ちたといふことである。途上美作に於て御病氣のため二三日御駐輦があつた。

【護良親王】

親王は始め赤坂城に居られたが、その陥るに及んで從者數名と共に修驗者を装つて熊野に逃れ、次で吉野・高野を往來して民望を得、遂に二年八月兵を起して高野山に據り、寺を以て城とし、令旨を諸國に下して義兵を招かれた。ために勤王の兵各地に起つて北條氏の滅亡を見るに至つた。

【賊の大軍】

正成は千早城に據り、赤坂を回復し紀伊・河内・攝津をとらへ、大に威を振つた。そこで幕府は大佛高直等を將として大軍を西上せしめた。赤坂・吉野等の陥つたのは三年二月のこと、その後は全軍千早城に集つた。總勢百萬騎と太平記にあるが確かなことはわからぬ。（國語六の廿三、千早城）

【種々の謀】

城兵は千人足らずであつたといふ。或は石を投げ、材木を落し、又薬人形で敵を誘ひ、敵梯（カキ）を作つて城に登らんとすれば油をそゝいで火をつけるなど、奇計をめぐらして敵をなやました。一方には野武士ども數千、護良親王の命によ

兒島高德の話はこの時のことである。（事實は確か）四月出雲より發船、隠岐につき國分寺を行宮とせられ、守護佐々木清高幕命により護衛しまつた。（國語十の二十）  
【正成逃れて】

赤坂城は急造のものであつたが、正成奇策を以てよく大軍を防いだ。併し城中糧食正に盡きんとしたので、城を焼いて走り金剛山に入つたのである。

ければ身も心もつかれはてしはし木かけに休みしに、こずゑの露おちて天皇の御衣をぬらせしかば、さしてゆく笠置の山を出てしより、あめが下にはかくれがもなし、とよみたまふ藤房涙をおさへて、いかにせん頼むかけとて立寄れば、なほ袖ぬらす松のしたつゆ、とこたへたてまつれり天皇遂に賊の手におちたまひ、やがて隠岐の島にうつされたまふ、笠置破れし後、賊軍また赤坂城を圍みしが、城遂におちいりしかば、正成逃れてしばらく其の身をかくせり程

學國史一巻より

尋常小學國史一巻より

なく正成再び兵を集めて城を金剛山の千早に築き、天皇の皇子護良親王もまた吉野に據りて、義兵を四方に募りたまへり。賊の大軍來り攻め、吉野まづおちりしが、村上義光は親王の御鎧を賜はり、之を着てみづから親王といつはり、自害せし間に、親王は難をのがれたまふ。又正成は、僅かの兵を以て千早城にたてこもり、種々の謀をめぐらして、しきりに賊軍をなやましたり。此の間に諸國には、親王の命を奉じて、勤王の軍を起すもの多かりき。

天皇は此の有様を聞召し、ひそかに隠岐を出でて、伯耆に渡り、其の地の豪族名和長年を召したまふ。長年命を以てて、賊の背後を脅かし糧道を絶ちなどしたので、包圍は疲勞困憊して變心するものも多かつた。

【勤王の軍】

櫻山慈俊は備後に、赤松則村は播磨に、土居通増・得能通綱は伊豫に兵を擧げ、大山寺の集徒は赤松則村を援けた。尙陸奥に結城宗廣、肥後に菊池武時、筑前に少貳貞經、豊後後に大友貞宗があり、前後して何れも兵を擧げた。



【家の面目】

名和長年は伯耆の豪族で、早くから勤王の志をもつてゐた。その弟の泰長は隠岐にあつて守衛の士に加はつてゐたが、ひそかに天皇と謀つて御脱出の計畫を進めたのである。長年の一族が『家の面目』であると云つて、一死奉公の誠を表明したのは、決してこの時急に思ひ付いたのでは無く、日頃から其の志のあつたことは推察し得られる。

【諸將を遣はし】

千種忠顯を左近衛中將に任じ、三月十五日兵を率ゐて船上山を發し、丹波より京都に進ましめられた。忠顯即ち六波羅の兵と戦つたが、勝つことが出来なかつた。

【にはかに歸順】

尊氏はかねて北條氏にとつて代らうとする志があつたので勤王といふよりも寧ろ自己の野心のために反復したのである。命を受けて京都に上る途中、使を發して伯耆の行在に詣り綸旨を乞はしめた。併しそれを秘密にして置いて四月十六日京都に着し、更に伯耆に向つて進撃した。この時弟

の高家は山陽道から進んだが、赤松則村と戦つて死んだ。そこで尊氏は丹波の篠村八幡(桑田郡篠村)の祠前に於て、始めて綸旨を出して衆に示し、歸順の意を發表した。

【勤王の人々】

かくて高氏は千種忠顯・赤松則村と道を分つて京都に攻め入つたので、六波羅探題時益は戦死し、同仲時は近江に逃げて自殺した。元弘三年五月七日のことである。

拜して大いに感激し、一族を集めて之を告げしに皆ふるつていはく、此の度の仰をうけたまはるは家の面目なり、天皇の御爲に屍を戰場にさらすとも、名を後の世に残すべし、急ぎ御迎に参るべしと、長年すなはち行宮を船上山に造り、兵を集めて之を守りたてまつれり。こゝに於て天皇諸將を遣はして、京都の六波羅を攻めしめたまふ高時これを聞き、足利尊氏等に命じ兵をひきゐて京都に上らしむ。尊氏は源義家の子孫にして、かねてより北條氏に従ふを好まざりしかば、此の時にはかゝり歸順し、勤王の人々と共に賊軍を討ちて六波羅をおとし、いれたり。天皇すなはち船上山を發して、京都に

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

【稻村崎より】

義貞は五月八日(元弘三年)に上野に兵を擧げた。鎌倉震駭し、諸將を遣はしてこれを防がせたが連戦皆敗れた。次で高時の弟泰家進んで義貞の軍を破つたが、三浦義隆が義貞を助くるに及んで遁げ歸つた。かくて義貞は十七日には鎌倉を圍み、兵を三道に分つて極樂寺切通から十萬、巨福呂坂から十萬、假粧坂からは義貞自ら五萬騎を以て攻めた。二十一日に義貞は極樂寺坂の方に向つたが、守備嚴重で容易に入れない。そこでその夜の明け方、干潮を利用し稻村崎を徒渉して、由井ヶ濱に出たのである。(國語七の六鎌倉攻)

【北條氏を滅せり】

義貞の大軍鎌倉に雪崩れ込んだので、北條氏の軍も死力をつくして戦つたが衆寡敵せず、やがて火は高時の屋形近くまで燃えて來たので、高時千餘騎で葛西谷(カセノヤ)に逃れ連勝寺に入つた。こゝは父祖代々墳墓の地であるから、高時以下一族悉く自刃したのである。かくて北條氏全く滅亡したが、それは五月二十二日、六波羅の陥落から僅かに十六日目の

第二十二 後醍醐天皇

向ひたまへり。  
新田義貞もまた義家の子孫なり、さきに賊軍に従ひて千早城を攻めしが、歸順の志をいだき、ひそかに護良親王の命を受けて病と稱し、上野に歸りて義兵を擧げ、進んで鎌倉を攻め、稻村崎よりうち入りて、高時等を誅し、北條氏を滅せり。こゝに於て頼朝以來百四十餘年の間、つゝきたりし鎌倉幕府は遂に倒れたり。  
天皇兵庫に至りたまひし時、義貞の使來りて、鎌倉を平げたることを奏せり。正成また兵をひきゐて迎へたてまつる。天皇正成を御そば近く召されて、其の忠功をほめたまひ、之を前驅として京都にかへりたまふ。時に紀

ことである。

【百四十餘年】

頼朝開府(一八四四)から北條氏滅亡(一九九三)まで百五十年、源氏滅亡(一八七九)から云へば百十五年である。

【正成また兵を】

六波羅陥るや金剛山の圍も解けたから、正成は攝津の兵庫に出て天皇を迎へ奉つた。







【不平をいだき】

勤功といふものは秤にかけることが出来ないものであるから眞に公平なる行賞といふことは出来るものでない。況や當時の武士の大多数は眞の勤王心から動いたのではなく、北條氏の滅亡を見込んで早く歸順し、多分の恩賞に預らうといふ野心で動いたものが多いのであるから、不平が多かつたのも當然のことである。

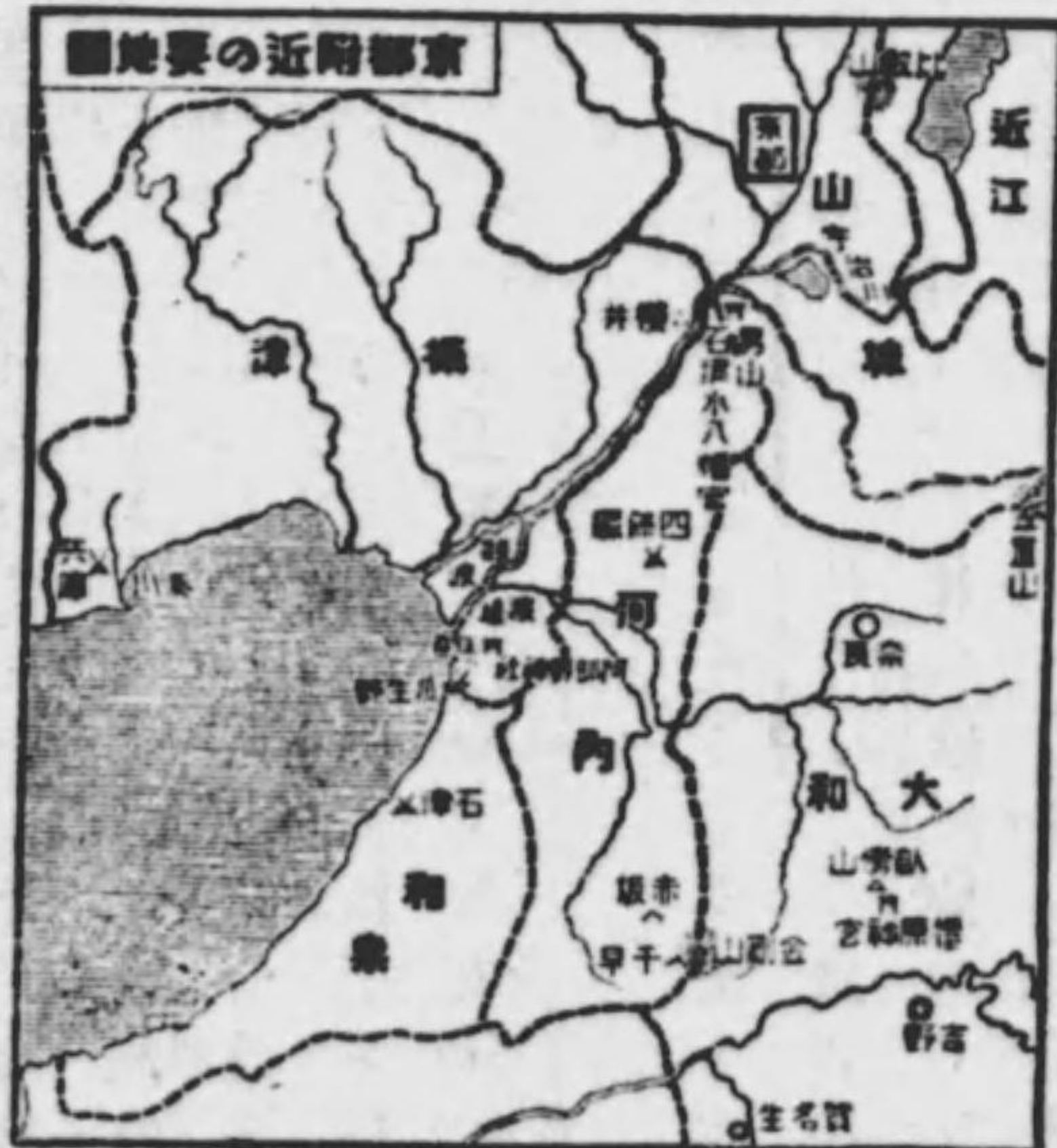
【足利倉氏】

尊氏も眞の勤王心によつて動いたのでは無かつた。彼はたゞ北條氏を倒して己れがこれに取つて代らうとして居たのみであつた。北條氏を倒すために便宜上一時歸順したに過ぎない。故に彼は自分の勢力を扶殖することにのみ心を砕き、ひそかに不平の武士をなつて自分の味方とし、以て時機の來るのを待つて居た。

【之を除かんと】

護良親王は早く尊氏の野心を察し、これを討伐せんことを天皇に請はれたが、天皇は戦亂僅かに止んだばかりの時と

てこれを許されなかつた。正成・長年等も尊氏の異志を察し、ひそかに親王と結んで居た。朝廷で北畠親房父子をして義良親王を奉じて陸奥へ向はしめられたのも、尊氏制御の策であつた。天皇も表向は尊氏を優待し、内實はこれを抑制することに骨を折つて居られたのである。建武元年春護良親王は天皇の密旨を奉じ、義貞・正成・長年等と謀つて尊氏を誅せんとせられたが、機會が熟しなかつた。



京都附近の要地  
護良親王は早くも尊氏の野心を察し、これを討伐せんことを天皇に請はれたが、天皇は戦亂僅かに止んだばかりの時と

れて大義にくらく、朝廷の賞罰に對して不平をいだき、かへつて武家の政治を喜ぶもの少からず足利倉氏はかねてより將軍とならんことを望みたりしかば、これ等不平の武士をなつて、其の野心を果さんとせり。

【京都附近の要地】

大阪附近の地形は現在と著しく違つてゐる。當時大和川は淀川の一支流となつて居た。現代の地圖と比較せよ。

圖中瓜生野は正行の古戰場(一二六頁参照)

石津は北畠顯家戦死の地(一二四頁参照)

【おしこめられ】

親王の幽せられ給ひし處は二階堂ヶ谷の東光寺で、この寺は今の鎌倉宮の處にあつた。この寺の中の一室、それは物置か納戸の様な堅固な壁を塗り回らした室で、一方にのみ口のある中古の塗籠の様な室であつた。土窟であつたとするのには後世誤り傳へたもので、今鎌倉宮の後方にある土窟も信するに足らない。

【人をして】

建武二年七月二十二日、直義西走するにあつて淵邊義博を遣はして親王を弑せしめた。而してこの淵邊はその後間もなく戦死した。今の鎌倉宮は明治二年に勅によつて建て給ふ所である。

尋常小學國史上巻より

したまひしが、かへつて尊氏の讒にあひ、鎌倉に送られおしこめられたまへり。此の頃尊氏の弟直義その地を治めたりしが、たまく北條高時の子時行兵を起して鎌倉を取りかへさんとす。直義戦敗れて逃ぐるに當り、おそれ多くも人をして親王を弑したてまつらしめたり。時に親王御年二十八、今鎌倉宮にまつりたてまつれり。

尊氏征夷大將軍となりて東國を治めんことを請ひ、朝廷の御ゆるしを待たずして鎌倉に下り、時行をうち破りしが、間もなく其の地に據りて反せり。天皇義貞をして之を討たしめたまふ。然るに官軍竹下箱根の戦に敗

【御ゆるしを待たず】

直義敗れて三河に至り、急を京都に報じたので、尊氏は兵を率ゐて北條時行を討たんことを乞ふたが、朝廷ではお許しかなかつた。又征夷大將軍とならんことを乞ふたが許されない。併し尊氏は擅に京都を出發した。そして鎌倉に討ち入つたが、朝廷からの召還に應ぜず、兵を上野に出して義貞の根據地を奪ひ、且義貞を伐たんことを請ふた。



【敗れて退き】

義貞の軍は先づ三河に於て大に尊氏を敗り、箱根に於て直義の軍を破つたが、この時尊良親王の軍は竹下に於て尊氏と戦ひ、部下の鹽冶高貞等が俄に背いて賊に内應した爲め敗れたので、義貞も兵を収めて還ることになった。

【奥州を守る】

北畠親房と顯家とは義良親王を奉じて陸奥にあつた。これは尊氏の東國に於ける勢力を抑へんためであつた。尊氏已に反するや、朝廷諸國の兵を召し、又北畠顯家を征夷大將軍に任じ、直ちに鎌倉を攻める様に命ぜられた。顯家陸奥を出發すると、尊氏は直義と共に西上して居たので、直ちにそのあとを追つて京都に上つたのである。

【九州にありて】

尊氏は西走する時光嚴院の院宣を乞ひ奉り、これによつて諸國に徵發し、新田義貞を討つを名とし、錦旗を軍の先頭に掲げた。いくら尊氏でもかうして朝廷を笠に着なければ、兵を集めるに困難であつたのである。而して田舎の武士に

は事情がわからぬから、眞に義貞が逆賊で尊氏が勤王の士だと思つたであらう。尊氏九州に入るや、官軍菊池武敏等と大に多々良濱に戦つて勝ち、忽ち全九州を手に入れた。

【海陸ならび進み】

尊氏等は船を博多に熾し、長府に寄り、嚴島神社に詣で、備後の鞆に至りて部署を定め、己れは高師直と共に水路により、弟直義は高師泰等と共に陸路を進んだ。

尊氏九州にありて再び勢を取りかへし、やがて大軍をひきゐる直義と海陸ならび進みて京都に向へり、義貞は之を兵庫に防がんとせしが、賊の勢甚だ盛なりしかば天皇さらに正成をしておもむき助けしめたまふ

尋常小學の史上巻より

【謀を建て】

この時正成は味方の小勢を以て到底敵の大軍を防ぐことは不可能であると考へ、先づ天皇を比叡山に行幸を仰ぎ、一旦尊氏の軍を京都に入れ、自分は河内に歸つて敵の糧道を絶ち、義貞その他と力をあはせて挾撃しようとする策を建てた。これはこの前に尊氏を西海に走らせた時と同様の作戦であつたのだが、朝廷はこれを容れずして正成を兵庫に遣はすことになつた。

【われに代りて】

正成は已に戦死を覚悟し、正行に遺言してその志をつがしめた。自分の一代で出来ないことは、二代三代かゝつても必ず仕遂げるといふのは如何にも固い信念である。

櫻井驛の訣別は太平記にあるだけで正確な文書には見えないが、ありそうな事實であるから抹殺するには及ばぬ。たゞこの時の正行が十一歳であつたといふのは少し怪しく、多分二十歳位であつたらうといふ。(修身六の六)

【水軍もまた上陸】

尋常小學國史上巻より

成は、一時賊の勢を避け、其の衰ふるをまちて、一撃に之をうち滅すべき謀を建てたれども、用ひられず、よりて部下の兵をひきゐりて京都を發し、櫻井の驛に至りし時、かつて天皇より賜はりし菊水の刀をかたみとして其の子正行に授け、此の度の合戦、味方の勝利おほつかなし、われ戦死の後、世はまた足利氏のものとなるべし、されど汝必ずわれに代りて、忠節を全うせよ、これ汝が第一の孝行なり、と、ねんごろに諭して河内にかへし、りたり正成進んで淡川に陣し、直義の陸軍に當りし間に、尊氏の水軍もまた上陸して後より攻めかゝりしかば、正成大いに奮ひ戦ひたれども、衆寡敵せず、部下たい

正成は僅かに七百餘騎を以て淡川に陣し、直義の率ゐる五十萬騎に對した。この時義貞は二萬五千騎を以て和州岬に陣して全軍を統べ、脇屋義助は五千騎を以て經島に、大館氏明は三千騎を以て燈爐堂の南の濱に控へた。然るに義貞と正成との軍が離れて居たので、尊氏の兵船六十餘艘和田岬に漕ぎ寄せて上陸し、正成の背後を衝いたのである。尊氏の全軍は兵船五千餘艘であつたといふ。



【湊川の附近】

その頃の湊川は今の神戸市内を貫流して居たもので、戦死の地と云はれる湊川神社の附近には今河は無い。

正成の七百騎は奮闘して敵の五十萬騎を惱ませ、一時は大將の直義に迫つて正にこれを討ちとらんとしたが、部下のものに遮られて遂に果さなかつた。尊氏これを見て『直義を討たすな』と新手を入れかへて下知する。正成等又これと渡り合ひ、六時間に十六回闘つて僅かに七十三騎になつたので、最早これまでと民家を求めて入つた。

【自害せんとす】

太平記によると一族のもの十六人、相隨ふ兵士五十餘人とある。六間の客殿に二列に並び、念佛十遍ばかり同聲に唱へて一度に腹を切つたといふ。

この時正成の自刃したことに就て、時機尙早であつたといふ論もあるが、太平記に『打ち破りて落ちば落つべかりけるを』とあるのは信用が出来ぬ。當時前も後も大軍を以てかこまれてゐるし、北の方へ山越しに逃げるとしても、

丹波方面も足利の勢力範囲になつてゐたから、さう容易に落ちのびることは出来なかつたであらう。随つて又義貞が京都に逃げ歸つたことが、あながち卑怯であつたといふことも出来ない。

【七度人間に生れて】

七生報國、この精神こそは實に大和魂の精髓である。乃木大將も或は正成の生れ代りかも知れない。

てい戦死し、正成も身に十箇所の傷をうけたれば、湊川の附近の民家に入り、自害せんとす。正成弟正季に向つて、何か最後の願を、と問ひけるに、正季、たゞ七度人間に生れて朝敵を滅さんことを願ふのみ、と答へければ、正成うちあみて、われもさこそ思ふなれ、といひて、遂に兄弟刺しち



楠木正成湊川に奮ひ戦ふ

談常小學國史上巻より

【徳川光圀】

楠公の忠誠はその戦死後三十年ばかりの頃に出来た太平記に詳記されてゐるが、その後久しく足利氏の治世であつたため事實は隠蔽され又は枉げられ、長い間正成は朝敵だといふことになつて居た。徳川光圀史を修してその誤りを正し、南朝の正しいことを説き、楠氏の精忠を激賞したが、更にその戦死の地に碑を立て、世人を教へたのである。碑には朱之瑜の楠公訣子圖に題した賛を書いてある。(修身三十七)

【忠臣のかどみ】

正成はたゞ自分一人のみが忠義を盡したに止まらず、その子正行に遺言し、正行その志をつぎ、更にその子孫が悉く朝廷のために盡し、楠木正秀・楠木次郎・楠木光正など、系圖はよくわからないが兎に角楠木を名乗るものが幾度か起つて足利氏に抵抗し、子孫のあらん限り南朝のために盡して、遂にその子孫がわからなくなつてしまつた。これ皆正成の七生報國の精神のあらはれで、この點のみでも他に比類なき大忠臣と云はねばならぬ。

談常小學國史上巻より

<p>がへて死せり。時に正成年四十三、今正成をまつれる神戶の湊川神社は、其の戦死の地にして、境内に徳川光圀の建てたる碑あり、嗚呼忠臣楠子之墓とするせり。實に正成は古今忠臣のかどみにして、わが國民は皆正成の如き真心を以て御國の爲につくさざるべからず。</p>	<p>第二十四 新田義貞</p> <p>湊川の戦に新田義貞も敗れて京都に退き、天皇再び比叡山に行幸したまひ、尊氏進んで京都に入れり。官軍これを取りかへさんとせしが、成らずして名和長年等戦死せり。伯耆の名和神社は長年をまつれるなり。</p>
--	---

【長年等戦死】

この時尊氏は八幡に駐營し、直義は京都に入つて叡山の行在を犯しまつた。この戦に官軍利を失つて六條忠顯・坊門雅忠等戦死した。尊氏即ち光嚴上皇を奉じて進んで東寺に陣し、しばし官軍と京都の内外に戦つたが、六月三十日(延元元年)の戦に、名和長年は義貞等と共に進んで、殆ど東寺に迫つたが、戦利あらず、長年は三條猪熊に戦死した。



【豊仁親王】

豊仁親王は後伏見天皇の御子、光嚴院の御弟である。尊氏はじめ九州に走る時、光嚴院の院宣を乞ひ、錦の旗を建て、賊名を避けたが、大舉東上するに及んで光嚴上皇を八幡の陣中に迎へ、八月京都に入るや豊仁親王を立て、天皇と稱しまつた。これ即ち光明院である。神器は後醍醐天皇が叡山に有し給ふたので正しい踐祚とは云はれない。御政治は光嚴上皇の院政といふことになつてゐたが、實權は勿論尊氏の手にあつた。

【いつはり降り】

尊氏は詐つて降を乞ひ、天皇の御還幸を乞ひ奉つた。後醍醐天皇がこれをお許しになつたのは、勿論尊氏を信ぜられたわけではない。たゞこの時叡山は已に糧食が盡き、外援は全く絶え、將士も漸く戦に倦んで居たので、到底京都恢復の望みもなかつたから、一旦尊氏の乞をゆるして、再舉の計を策せられたものである。義貞に命じて北國に赴かしめられたのは全くそのためである。

【吉野に行幸】

天皇京都に還幸まじくしたのは十月であつたが、勤王の士は各地にあつてひそかに回復を計つてゐた。而して北畠親房が遙かに策を獻じたので、十二月二十一日の夜、婦人の衣を被り、ひそかに神器を奉じて花山院を出て給ひ、吉野に潜幸遊ばされた。吉水院の僧宗信、兵を率ゐて天皇を迎へ奉り、楠木正行も馳せ來つて車駕を護つて吉野に入り、河内・紀伊の將士來つて行宮を護り、官軍大に振つた。

【涙を流して感激】

天皇正に叡山を發せんとして、義貞兄弟を召して仰せられた。卿の忠節は朕深くこれを嘉す。卿の宗族によつて四海を鎮めんと欲するものであるが、天運來らずして兵は疲れ勢は盛まつた。故にかりに和議を講じて時を待つのだ。卿宜しく越前の地方に赴いて北陸を經略し恢復を圖れ。併し朕が京師に還るために卿が賊名を得てはいけない。よつて特に太子を卿に附するから、朕を視ると同様に心得よ。軍國の事大小となく卿に一任する。朕は卿のために暫く耻を

【京都に還幸】

天皇還幸ましますや、尊氏は弟直義をして車駕を奉迎せしめ、直ちに花山院に幽しまつた。そして光明院から神器を傳へられる様にと御請求があつたので、天皇は偽器を以てこれに授けられ、眞器はこれを御身に副へてお離しにならなかつた。故に尊氏の方では上皇と申し上げてゐたが、天皇には決して讓位の御心は無かつたのである。



新田義貞の時日雪とてしるしににむくひ

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

て回復をはからしめ、かりに尊氏の請を許して京都に還幸したまひしが、間もなくひそかに神器を奉じて吉野に行幸し、行宮をここに定めたまへり。義貞叡山の行宮にて大命を受くるや、涙を流して感激し、一族と共に皇太子及び皇子尊良親王を奉じて、たゞちに北國に向へり。途中木目峠を越えけるが、折しも風雪はげしくして、行軍すこぶるなやめり。中にも河野の一族は、にはかに敵にてあひ、戦はんとすれど、馬は雪にこゝえて進まず、兵士は指をおとして弓を引きえず、主従三百騎ことごとく討死せり。義貞はからうじて、越前の敦賀に着き、金崎城に據りしが、間もなく賊軍に圍ま

忍ぶから、卿も亦朕のために努力せよ」と。將士皆泣き能く仰ぎ見るものが無かつた。

【河野の一族】

これは四國の兵であるから雪には殊の外難澁した。士卒凍え且飢え、弓箭を焚いて煖をとりなどした。そこへにはかに賊兵に遇つたので、戦ひも思ふにまかせず、遂に悉く討死するに至つた。



【城危くなり】

十月に義貞等金崎城に入るや、賊將斯波高経大兵を以て來り攻めたが、勝つことが出来ないで圍を解いて潰走した。十一月には高師泰の兵が柚山城を攻めたが、これも亦敗走したので、十二月に尊氏は更に仁木・細川等の諸將を遣はして金崎を攻めしめた。翌年(延元)二月金崎城危くなつたので義貞は城を出て柚山に赴き援を求めた。そこで柚山城の瓜生保と弟義鑑は兵を率ゐて金崎救援に赴いたが、途中で高師泰の兵と戦つて戦死した。

【尊氏に弑せられ】

皇太子は、氣比太郎が小舟に乗せ參らせて蕪木の浦へ着いた。そこで柚山へお供申し上げようと思つたが、城兵悉く討死するに自分一人生き残るを欲せず、浦人に託して『この御方は日本國の主に成らせ給ふ人だから、どんなにかして柚山城までお送り申し上げて呉れ』と頼んで、城に取つて返して自刃した。ところがその浦人が叛いて賊軍に密告したので、皇太子は遂に賊に捕はれ給ひ、京都に還らせら

【藤島神社】

藤島城は今の吉田郡東藤島村大字藤島にあつて、義貞の戦死したのはそこから少し離れた西藤島村大字三屋で(燈明寺殿といふ)藤島神社ははじめこゝにあつたのだが、後牧の島に遷され、更に明治三十四年に今の地、福井市足羽公園に遷されたのである。

【北畠顯家】

顯家はさきに義良親王を奉じて陸奥に下り、以て鎌倉の尊氏を牽制してゐた。(一一六頁参照)そして尊氏のあとを追ふて京都に上つたのは延元元年で十九歳の時であつた。

尊氏九州より上るに及んで顯家は又陸奥に行き、常陸・下野をも管してゐたが、二年勅を奉じて靈山城(福島市の東方)を被し、先づ常陸・下野等の賊を征し、九月、義良親王を奉じて城宗廣・伊達行朝以下の諸將を率ゐて下野に入つた。

【所々に戦ひ】

十二月に鎌倉に居た尊氏の子義詮が兵を出して利根川に拒いだのを打ち破り、新田義貞の子徳壽丸の上野に兵を擧げ

れたが、翌年四月、成良親王と共に、尊氏の進めた毒を飲んで薨ぜられた。時に皇太子は御年十五であつた。

【しばく賊軍と】

三年二月高経を破つて越前の國府(武生)をとり、閏七月高経を足羽城(福井市)に攻め、更に藤島城を攻めんとして薄暮間道を進んだが、途中で賊兵が黒丸城から來るに會し、奮戦したが流矢に中つて死んだ。

れ、城危くなりしかば子義顯をとめて城を守らしめ、みづから柚山に至りて兵を募れり。然るに其の間に、兵糧つきて城おちいり、尊良親王は義顯等と共に自殺したまひ、皇太子は捕はれて京都に送られたまひしが、遂に尊氏に弑せられたまへり。

義貞は少しも屈せず、柚山より起り、しばく賊軍と戦ひて之を破りしが、後藤島の戦に、賊の勢強くして官軍まさにも敗れんとせしかば、義貞僅かに五十騎を従へて、急ぎおもむきて之をすくふ。遂にて三百騎の敵兵にてあひ大いに奮ひ戦ひしに、其の乗れる馬矢にあたりて、泥田の中に倒れしかば、義貞起きあがらんとせし時、一

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

筋の矢飛來りて額にあたりたれば、もはやかなはじと思ひて、みづからくびはねて死せり。時に年三十八、これより北國の官軍また振はざりき。今福井の藤島神社に義貞をまつれり。

第二十五 北畠親房と楠木正行

新田義貞の戦死に少し先だちて、北畠顯家もまた戦死せり。かつて顯家は尊氏を九州に走らしたる後、再び義良親王を奉じて陸奥に下り、靈山城に據りしが、天皇吉野に行幸したまふに及び、また親王を奉じて京都に向ひ、所々に戦ひて敵を破れり。されど其の兵つかれて京

たのと力をあはせ、遂に義詮を追つて鎌倉を奪ひ、威を東國に振つた。翌延元三年正月鎌倉を被し、遠江に於て宗良親王に會し、共に尾張に進んで賊將上杉憲顯等を美濃の青野原に破り、進んで伊勢に入り、賊軍と戦ひつゝ、二月奈良に入つた。尊氏その兵の連戦連敗するを見て色を失ひ、更に桃井直常を選んで顯家に當らしめたが、これから顯家の軍は漸く旗色がわるくなつた。



【石津に戦死】

顯家の軍も長途の行軍と屢次の戦闘に漸く疲れた。そこへ桃井の精兵がやつて来たので、これと奈良に戦つて敗れ、次で天王寺に戦つて又敗れた。そこで顯家は河内に走り、義良・宗良兩親王は吉野に赴かれた。

尊氏は更に高師直を以て顯家にあたらせた。三月顯家これと攝津の安部野に戦ひ、五月には堺に戦つたが、克つことが出来ず、吉野に走らんとして途中石津に於て戦死したのである。時に五月廿二日の辰の刻であつた。

【親房等をして】

やがて七月には義貞も戦死したので、その報行宮に至るや群臣皆色を失つた。この時結城宗廣が奏して、皇子を奉じて奥羽に下り、その兵を發して京都を恢復せんとの策を奉つた。朝議これを可とし、義良親王を遣はし給ふこととなり、北畠顯信(親房の子)を陸奥介に任じ鎮守府將軍とせられた。又宗良親王は再び遠江に赴かんとせられ、共に出發せられた。即ち一行は兩親王と北畠父子、結城宗廣・新田義興・

北條時行等であつた。

【途中にて大風】

九月に伊勢の大湊を發せられたが、たまく颯風が来たので諸船四方に漂流した。即ち

義良親王と北畠顯信は伊豆岬及び上總を過ぎて伊勢の篠島に着せられ、翌年三月親王は吉野にかへられた。

宗良親王と北條時行は遠江に着し、井伊谷城に入られた。



尋常小學國史上巻より

結城宗廣は伊勢の吹上に着き、再び發せんとしたが、病氣にかゝつて死んだ。

新田義興は武藏の石濱に着した。

北畠親房は常陸につき小田城に入った。

【恨みたまひながら】

延元四年八月九日御發病、十六日に崩御遊ばされた。崩御に先ち大塔忠雲僧正、御枕に近づき奉つて、『最期の一念によつて三界に生を引くと經文にありますから、何事も寂慮にかゝりますることを仰せ残し置かれませう』と申し上げると、『たと朝敵を亡ぼして四海を泰らかにすることの出来ぬのが残念だ。たとひ骨は南山の苔に埋もれても、魂魄は常に北國の天を望まん』と仰せられ、左手に五卷の法華經、右手に御劍を按じたまゝ崩御になつた。故にこの御陵のみ特に北向に出來てゐる。(凡ての御陵は南向)

【賊の爲に】

はじめ親房は小田城にあり、關宗祐は關城、下妻政泰は大寶城、伊達行朝は伊佐城を守つて親房に應じ、官軍稍振つ

尋常小學國史上巻より

ふ親房等伊勢より海路東に向ひしに、途中にて大風にあひ親房の船は常陸に着きしも、親王の御船は伊勢に吹きもどされ親王は吉野にかへりたまへり。たまく天皇御病にかゝらせられ、未だ朝敵はびこりて世の中安からざるを恨みたまひながら、遂に行宮に崩じたまふ。親王御位をつぎたまひ、後村上天皇と申す。其の頃東國の武士多くは賊にくみせしかば、親房は陸奥に行くこと能はずして、遂に賊の爲に常陸の關城に圍まれたり。親房城中にありて、日夜賊を討つ謀をめぐらしつ、其の間に神皇正統記を著して、天照大神より後村上天皇に至るまでの皇統の由來を述べて大義名

た。延元四年冬、高師冬小田城を攻めたが、容易に降らなかつた。併し二年の後小田城主小田治久が背いたので、親房出で、關城に移り、又師冬に圍まれて苦戦を續け、興國四年十一月遂に落城した。

【神皇正統記】

神皇正統記及職原抄の二書は關城に於て著す所、一冊の參考書もなかつたといふから、造詣の深き驚くべきである。



【十一歳の時】

正行の年齢は正確にわからない。太平記によれば櫻井驛の訣別が十一歳で、戦死の年が二十三歳となる。(一二八頁) 併し戦死の時は三十歳以上であつたらうといふこと、史徴墨寶考證に詳しく述べてゐる。(一七七頁参照)

【しばく賊軍を破り】

正行は後醍醐天皇の吉野潜幸の時、従弟和田正朝と共に馳せ來つて警護し奉つた。(一二二頁参照) 後三年にして後村上天皇の御代となつたのであるが、正行は常に官軍の中堅となつて經營大につとめ、正平二年八月には兵を率ゐて紀伊を徇へ、隅田城に戦つた。茲に於て熊野の地概ね官軍に屬し、和泉・攝津の兵も亦これに應じ、大舉して京都に通らんとしたので、尊氏の將細川顯氏三千騎を率ゐり攻めたが、正行七百人を以てこれと戦つて大に破つた。そこで尊氏は更に山名時氏をして來り攻めしめたので、正行これを瓜生野に破り、轉じて天王寺の顯氏に向つたので、顯氏も亦拒ぐことが出來ないで逃げ歸つた。

【命じて救はしめ】

瓜生野の戦は正平二年十一月二十六日であつた。賊軍山名時氏の兵は六千騎、正行は二千騎を以てこれに當つたが、正行全軍を一にして時氏の中堅を衝いた。時氏剣を被り、去つて天王寺に居る細川顯氏の處に向つた。そこで全軍總崩れとなり、大和川を渡らんとして争つて渡邊橋(一四頁参照)からつき落されたもの五百餘であつた。(一二八頁参照)

分を明かにせり、すてにして城陥りしかば、親房逃れて吉野に歸り、これより楠木正行等と力を合はせて、天皇をたすけたてまつれり。

正行はさきに十一歳の時、櫻井の驛にて父に別れ國に歸りてより、もつぱら父の遺言を守りて、常に朝敵を滅すことを心がけ、年やうやく長じて後村上天皇に仕へたてまつり、しばく賊軍を破りたり、中にも攝津の瓜生野の戦に、賊兵大いに敗れ、先を争ひて逃る、時川に落ちて流る、もの五百餘人の多きに及びしが、正行は之をあはれみ、部下に命じて救はしめ、一々親切にいたはりて送りかへしたり、かくて官軍の勢ますく強く、

尋常小學國史上巻より

尋常小學國 上巻より

【大兵を率ゐて】

正行の軍大に振ひ、諸將逃げ歸つたので京都は震駭した。尊氏即ち高師直・師泰をして、二十餘國の兵を率ゐて正行を撃たしめた。總勢約八萬騎であつた。正行は三千騎を以てこれに當つたのである。

【天皇に拜謁】

正平二年十二月廿七日、正行は一族を率ゐて吉野の皇居に參内した。これを最後と心を定めたからである。『彼等の頭を正行の手にかけますか、それとも正行・正時が首を彼等に取られますか、二つに一つの雌雄を決したいと存じますから、今生にて今一度龍顏を拜したいと、參内仕りました』と、四條中納言隆資卿に申し入れた。隆資これを奏上すると、天皇南殿の御簾を高く捲かせて、正行を近く召して『度々の合戦に勝利を得て、賊勢を殺いたことは誠に神妙である。この度は天下安危の分れる處であるが、進む時には進み、退く時には退きもせねばならぬ。朕は汝を股肱とたのみ。必ず自重自愛せよ』と仰せられたので、正行は何とも



楠木正行の如輪堂に空に

まさに京都に迫らんとせしかば、尊氏これを恐れ、高師直を將とし、大兵を率ゐて正行に當らしむ。正行すなほち一族百四十餘人と共に、吉野に至りて天皇に拜謁し、又後醍醐天皇の陵を拜し、如意輪堂の壁に一族の名を書きつらね、其の末に、

【如意輪堂】

この堂は後醍醐天皇陵の下にある。但し當時の堂は師直のために焼かれたので、今の建物は全部新しい。こゝに正行が鏃で彫りつけたといふ扉を藏してゐるが、正しく偽物であつて何の價値もない。



【其の陣に迫り】

四條畷の戦は翌年正月であつた。賊は兵を五隊に分ち、四隊を前に、一隊を遙かの後に置いて師直がこれを指揮した。正行は三千騎を率ゐて直ちに賊の中堅を指したが、賊の前軍がこれを遮るので、幾度かこれを破つては進んだ。やがて三百騎となつた。賊將細川清氏・仁木頼章等これを遮つたが悉く破つて進み、馬皆重傷を負ふたので徒歩となり、敵前にあつて靜かに辨當を食つて、更に勇躍して師直に迫り殆んどこれを獲んとしたが、師直の臣が師直と偽つて討死した間に、師直は遠く引き退つた。正行更に伴り走つて敵を誘ひ、又反撃して師直と數歩の處まで來たが、早朝から夕刻まで三十餘度の闘ひに、一同力盡きて起つことが出来ない。遂に正行以下殘兵三十餘悉く自刃した。

【救はれたる賊兵】

大和川に溺れた賊兵五百は、正行の命令で水から引き上げ、濡れた着物を着かへさせ、凍えたものは火をたいて暖め、創を蒙つたものは藥を與へ、四五日もいたはつて、馬に乗

るものには馬を與へ、武器なきものには武器を與へて歸したので、その時直ちに歸順したものもあり、歸つた後再び馳せ参じたものもある。これ等が四條畷に於て悉く忠勤をばげんだのである。滿洲に於ける匪賊の歸順も思ひ合される。(一二六頁參照)

【一族をあげて】

楠氏の一族は最後の一人に至るまで朝廷のために盡した。

かへらじとかねて思へば梓弓。

なき數に在る名をぞとむる。

といふ歌をしるし、死を決して河内に歸り、賊軍と大いに四條畷に戦ふ。正行は必ず師直をうたんと思ひて、しはしは其の陣に迫りしが身に數多の矢きずを受け力つきて遂に弟正時と刺しちがへて死せり。時に正行年二十三。前年正行に救はれたる賊兵は、深く其の恩に感じ、正行に従ひて此の戦にことごとく討死せり。まことに正行の如きは、勇と仁とをかねたる武士にして、忠孝の道を全うしたるものといふべし。かくて楠木氏は、正行の死後も、其の一族をあげて、ながく朝廷の御爲に眞

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

これ正成の『七生報國』の念願の顯はれである。(一一九頁參照) 如何なる逆境に立つても節を變じないといふことは、非常に困難なことであるが、それが一族をあげて數代の後までといふことは愈々むづかしいことである。(三代目位には不肖暗愚の子の出るのが常である) 新田氏・名和氏・菊池氏など、この點に於ては楠氏につゞくもので、實に吉野朝の忠臣には感すべきものが甚だ多い。

【程なく病み】

正平九年四月、親房病みて賀名生に薨じた。年六十三。(當時朝廷は賀名生にあつた) 親房は村上源氏(村上天皇から出た源氏)の裔で、後醍醐天皇の時世良親王の傅となり、次で子顯家を陸奥に派して奥羽・東國の官軍を保たしめ、後自ら東國に赴いて大に劃策した。而して神皇正統記を著はして神器の有歸を明かにし、入つては朝政にあづかり、出ては征戰に奔走し、一族擧げて皆王事に勤めた。蓋し吉野朝文臣中の隨一である。

【系圖】

第二十六 菊池武光

心をさげたり、今四條畷神社に正行をまつれり。此の後親房はひとり忠勤をぬきんでしが程なく病みて薨せしかば、これより官軍の勢いよく衰へたり。今攝津の阿部野神社及び岩代の靈山神社に親房父子をまつれり。

村上天皇(貞永親王)……親房(顯家)……

第二十六 菊池武光

朝廷はすてに其のたのみとせられし正行親房の如き忠臣を失ひ、諸國の官軍もまたおほむね衰へたれど、ひ

具平親王―師房―顯房―雅實―雅定―雅通―通親―通方―雅家(北畠と稱す)―師親―親重―親房。而して雅實の弟雅兼は名和氏の先祖である。

【諸國の官軍】

北國は義貞、近畿は正行、東國は親房の薨後何れも振はなくなつた。又四國の官軍も義貞の弟脇屋義助の死後振はず、獨り九州の官軍のみ勢がよかつた。



【菊池武房】

菊池武房は文永の役には父隆泰と共に兵を率ゐて第一に駆けつけ、弘安の役には赤星有隆と共に千餘騎を以て賊を破り且つ賊魁を仆した。(二〇二頁)而してその後武時に至つて勤王の兵を起したのである。

【博多の賊】

武時は元弘三年三月、護良親王の令旨を得て衆に先じて兵を擧げた。その時後醍醐天皇は伯耆の船上にましくたが、武時の申出により繪旨に錦の御旗を副へて下された。然るに九州探題北條英時がこれを察して攻めようとする様子が見えたので、直ちに兵を擧げて、三月十五日、僅かに百五十騎を以て博多にある探題の館へ押し寄せ、勝に乗じて塀を越え關を破つて攻め込んだので、英時たまり兼ねて已に自害せんとしたが、この時小貳・大友が六千騎を以て救援に來たので、武時遂に討死するに至つた。死に先つて子の武重に五十騎を副へて郷里に歸し、再興を計らしめたのである。(櫻井驛の訣別によく似てゐる)

【病みて死せり】

正平十三年四月、尊氏病にかゝり、遂に五十四歳を以て京都に於て薨じた。病氣は癩であつた。後光嚴院これに従一位左大臣を贈られた。

【御恩を忘れて】

尊氏は元來野心満々の人であつた。その北條氏にそむいて勤王軍に加つたのも、もとより衷心の勤王心からではなくして、たゞ自己の野心を遂げるに便利な方法を選んだに過ぎない。而もこれに對する恩賞は精忠の正成・義貞・長年等に比して遙かに厚かつた。(一一二頁参照)これ一つには朝廷に於て尊氏の野心を察せられ、陽にこれを優遇して陰にその勢力を抑へんとせられたものではあるが、兎も角もその戦功に比して恩賞頗る過分であつたことは事實である。(尊氏始め高氏と稱して居たのを、元弘三年八月から尊の字にかへたが、これは天皇の御諱の字を下されたのだといふのは俗説で、信ずるに足らぬ)この鴻恩を蒙りながら凡てこれを忘れて、たゞ自己野心の遂行にのみ専念したのは、何

【しばく賊軍と】

その後尊氏反して九州に奔るや、武敏兵を率ゐる筑後に於て大友・少貳の兵と戦ひて大に勝ち、進んで太宰府を陥れて貞經を殺し、又少貳の族を破つて博多に進んだが、尊氏と多々良濱に戦つて敗れた。(一一六頁参照)

正平十三年十月武光は畠山重隆を三股城に攻めて勝ち、十四年三月豊後に入りて志賀頼房、大友氏時等を攻めた。

とり九州にては、官軍の勢を振へり、さきに弘安の役に武名をあげたる菊池武房の孫武時、元弘三年諸國に勤王の軍起りし時、義兵を肥後に起し、僅かなる兵を以て博多の賊を討ちて戦死し、九州に於ける勤王のさきがけをなせしが、其の諸子みな能く父の志をつぎて忠義をつくせり。

時に後村上天皇の御弟懐良親王は、西國の官軍をすべたまはんとて、九州に下りたまふ、武時の子武光は親王を肥後に迎へたてまつり、之を奉じてしばく賊軍と戦ひ、しだいに其の勢を加へたり、されは尊氏大いに之を憂へ、みづから兵を率ゐて武光をうたんとせしが、發

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

尊氏の不忠  
不義

する前病みて死せり。尊氏はさきに後醍醐天皇の厚き恩賞をかうむりながら、其の御恩を忘れて朝廷にそむき、忠義の人々を害し、あまつさへ皇族を弑したてまつれり。其の不忠不義まことににくみても餘りありといふべし。



かくて菊池氏の勢はいよいよ強く、武光親王を奉じ

尋常小學國史上巻より

【にくみても餘りあり】

と云つてもゆるし難き大罪惡である。建武の政治が失敗であつたにしても、それは尊氏を辯護する材料にはならぬ。高山彦九郎は幼にして太平記を読んで尊氏を惡むこと極めて深く、憤慨して書物を庭に投げつけたことがある。又嘗て京都を過ぎ、尊氏の木像を見てこれを鞭つこと數百に及んだ。大和魂を有する國民は皆これに同感であらう。



【賊將】

少貳頼尙は筑前の豪族である。大友氏と共に藤原景頼の裔であるが、父貞經の時菊池氏と勤王の旗を擧げる約束をしながら却つて尊氏に屬し、その後も度々官軍についたり賊軍についたり、自己の榮達保身のために操守を二三にする不都合な奴であつた。

【敵の中堅を】

この時頼尙の軍は六萬、武光の兵は八千であつた。夜に乗じて武光の子武政・姪武信・武明等潜かに川を渡り、頼尙の本陣に向つてはげしく夜襲したので、賊將狼狽して死するもの算なく、天明に及んで頼尙の二子を獲、勝に乗じて追ひまくつた。そこで武光は親王と共に兵三千を以て直ちに敵の中堅をついた。親王も負傷遊ばされ、北畠顯信等も戦死したが、武光挺身して敵に當ること十七合、馬は倒れ胄は裂けたが、一敵將と馬上相搏ちて俱に落馬し、遂にその首を斬り、馬を奪つてこれに乗り、更に進んで大に敵を破り、首を斬ること三千餘に及んだ。

【筑後川の戦】

筑後川の戦は正平十四年八月であつた。場所は今の三井郡味坂村附近であらうといふ。今は水田になつてゐるが當時そのあたりは一面の沼澤地で、細い道がたゞ一條あるのみで頗る困つたといふ。前頁の繪に葦の生えてゐるのはその沼澤である。(繪に旗の上に文書を附してゐるのは少貳の起請文である。教師用書中卷一六四頁を見よ)

て兵を筑後に進め、賊將少貳頼尙の軍と筑後川をさしはさんで陣せり、武光川を渡りて戦をしかけたれども、頼尙大保原に退き、陣を堅くして戦はず、武光すなはち兵を分ちて之を襲ひ、みづから親王と共に敵の中堅をつく。戦最もはげしくして、親王は御身に三箇所まで傷をおひたまひ、武光は馬きずつき、胄さけしかば敵將を斬りて、其の馬と胄とを奪ひ、死を決して奮戦し、遂に大いに敵を破り、頼尙は本國筑前に逃げかへり、世に之を筑後川の戦といふ。

尋常小學國史上より

【いくばくもなく】

筑後川の戦の翌年、武光は懷良親王と共に兵三千を以て太宰府に出で頼尙を走らせた。翌十六年八月には又大友・少貳を撃て大にこれを破り、十七年九月には斯波氏經が九州探題となつて豊後に來たので、武光又これを攻めて長者原に戦つて勝つた。それから十八年には大友時氏を攻めてこれを斬り、十九年には大内弘世を豊後に破つたが、それから間もなく病氣にかゝつて死んだ。

【子孫はなほ久しく】

武光の子の武政も度々戦功を立てたが、早世したので、その子武朝十二歳の時から懷良親王に仕へ、天授四年(武光の死後十五年)には今川貞世を破つて走らせ、一族以下數十人戦死し、自分も負傷した。その後數年にして武朝卒し、親王も亦薨せられて、官軍又振はなかつた。

【系】

忠平—師輔—兼家(五四・五) —道隆—隆家—(この間十二) 武房—時隆

第二十七 足利氏の借上

尋常小學 史上卷より

に後いくばくもなく武光卒するに及び九州の官軍またやうやく衰へしが、其の子孫はなほ久しく朝廷の御爲に力をつくせり。肥後の菊池神社は、菊池氏一族の忠臣をまつれるなり。



第二十七 足利氏の借上

尊氏は朝廷に對したてまつりて無道の行多かりしのみならず、また其の家をも能く治むること能はず、兄弟

又武光の後は武政—武朝—兼朝—持朝……

【其の家をも】

精忠の士は一族を擧げて子孫に至るまで心を一にするが、野心あるものは必ず一家の不和を招いてゐる。頼朝がその範を示し、尊氏が又これに倣つて、兄弟相争ひ、親子の間にも干戈を交へた。これを楠氏・新田氏などに比べると、全く天地の差がある。



【相争ひて】

尊氏と直義とは兎角仲がわるく、これに部下の高・上杉・畠山等が互に黨を作つて相争ひ、ために尊氏は一時の便宜で吉野朝に降参し、そして直義を討つたので、直義遂に敗れ、鎌倉の延福寺で毒殺された。尊氏は又その子直冬を悪んだので、直冬吉野朝に降つて尊氏と戦つた。義詮も亦直義と相争つた。その間に諸將の離合集散が複雑を極めた。

【つゝしみ深き人】

細川頼之は生れつき端正醇厚で、學問もあり軍略にも長じて居た。尊氏及び義詮に仕へて幾度も戦功を立て、從四位下右馬頭となつた。義滿を託されてからは、日夜寢食を忘れて輔導に心を砕いた。併し義滿が長じてから後は、頼之を忌んでその職を罷め、讃岐に行かせた。これから義滿の驕奢が始まつた。

【我がまゝなる】

その頃將士の中には随分わが儘のものもあつたので、頼之

【京都に還幸】

天皇は閏十月二日京都に還幸、先づ嵯峨の大覺寺に入られた。關白二條師嗣以下百官皆駕に従ひ、群臣戎服して扈從し奉つた。この時京都には足利氏の擁立した後小松院がおはしたが、天皇に對して親子の禮をとられ、神器をお受けになつて、始めて眞の帝位に即かせられたのである。

【凡そ六十年】

後醍醐天皇の吉野に還幸せられたのは延元元年(一九九六)で、京都御還幸の年まで正に五十七年間、その間時として賀名生その他に行在を移されたことはあつたが、大部分は吉野におはしたので、これを吉野朝と云ふのである。かくて多年の兵亂は治まつたが、後醍醐天皇の御意志は遂に實現しないで、再び武家政治の世となり、數百年の後に至つて漸く明治の維新を見る様になつたのは、返すくも残念なことであつた。

【強ひて朝廷に】

義滿は内大臣から左大臣に進み、久我氏の世職を奪つて淳

は部下に命じてこれを公衆の前で辱かした。そのため將士は相戒めて弊風が大に革つた。足利氏政權の基礎が定まつたのは、頼之の力が大に與つてゐる。

【使を吉野に】

元中九年十月、義滿は大内義弘・六角滿高(義滿の弟)を吉野に遣はして和を請ふたので、遂にこれをお許しになつて、閏十月に京都に還幸になつた。

相争ひて遂に弟直義を毒殺し、部下の將士もしばくそむき、又たがひに争へり、かゝる内部の亂絶えざる間に、足利氏は尊氏の子義詮を経て孫義滿の代となれり。義詮のまきに死せんとせし時、その嗣子義滿年僅かに十歳なりしかば、之を細川頼之に託して、たすけ導かしめたり。頼之は足利氏の一族にして、つゝしみ深き人なれば、義滿の近侍を戒めて奢をとめ、又我がまゝなる大名をおさへ、常に心をつくして其の主をたすけたり。これより、足利氏の基やうやく固くなれり。義滿やがて使を吉野に遣はして、天皇の還幸を請ひたてまつる。後村上天皇の御子九十九代後龜山天皇は、人民の

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

ながく戰亂に苦しむをあらはれ、其の請を許して京都に還幸し、神器を後小松天皇に傳へたまふ。時に紀元二千五十二年、元中九年にして、後醍醐天皇の吉野に行幸したまひしより、こゝに至るまで凡そ六十年なり。こゝに於て多年の兵亂やうやくをさまりしも、これより義滿征夷大將軍として威勢を振ひ、再び武家政治の世となれり。義滿やがて將軍職を子義持に譲り、みづから左大臣に任ぜられんことを望み、武人にして太政大臣に任ぜらるゝことは、平清盛以後絶えてなかりしに、義滿は強ひて朝廷に請ひて、遂に之に任ぜられたり。かくて義

和榮學兩院の別宮となり、門跡や攝家に限られて居た准三宮となつた。尤もこれ等は吉野朝時代のことであるから、足利氏の勝手にやつたことで正しい國家の官吏とは稱することが出来ない。併し太政大臣を望んだのは後小松天皇の應永元年のことである。この時太政大臣であつた西園寺實時が罷めたので、義滿が強請してこれに代つた。當時これは僭越であるとして異論を唱へるものが多かつた。



【書をきはめ】

義満の傍若無人ぶりは随分ひどかった。禁中に一殿を作つて小御所と名づけ、入朝する毎にそこで休憩して居た。又朝廷に出仕するときには、公卿以下に皆階を下つて跪拜せしめた。それから公卿や諸將の名前にヨシとかミツとかいふ字のあるものは、凡て改名を命じた。又僅か九歳の義持に將軍職を譲り、先例を破つて正五位上左近衛中将たらしめ、禁色昇殿を聽された。

【花の御所】

元崇光院の御所であつた跡を請ひ受け、菊亭公直の第をも併せてこゝに廣大壯麗なる室町第を造營した。永和四年こゝに移り、名づけて室町殿と云つた。(室町幕府の名はこれから起つた)そしてその庭園には天下の名花を集め植えたといふのだから、その贅澤さは非常なものであつた。

【金箔を張りつめ】

今は寺になつて金閣寺と呼ばれるが、當時は勿論寺ではなかつた。庭園も頗る凝つたもので、鹿を放つてゐたから鹿

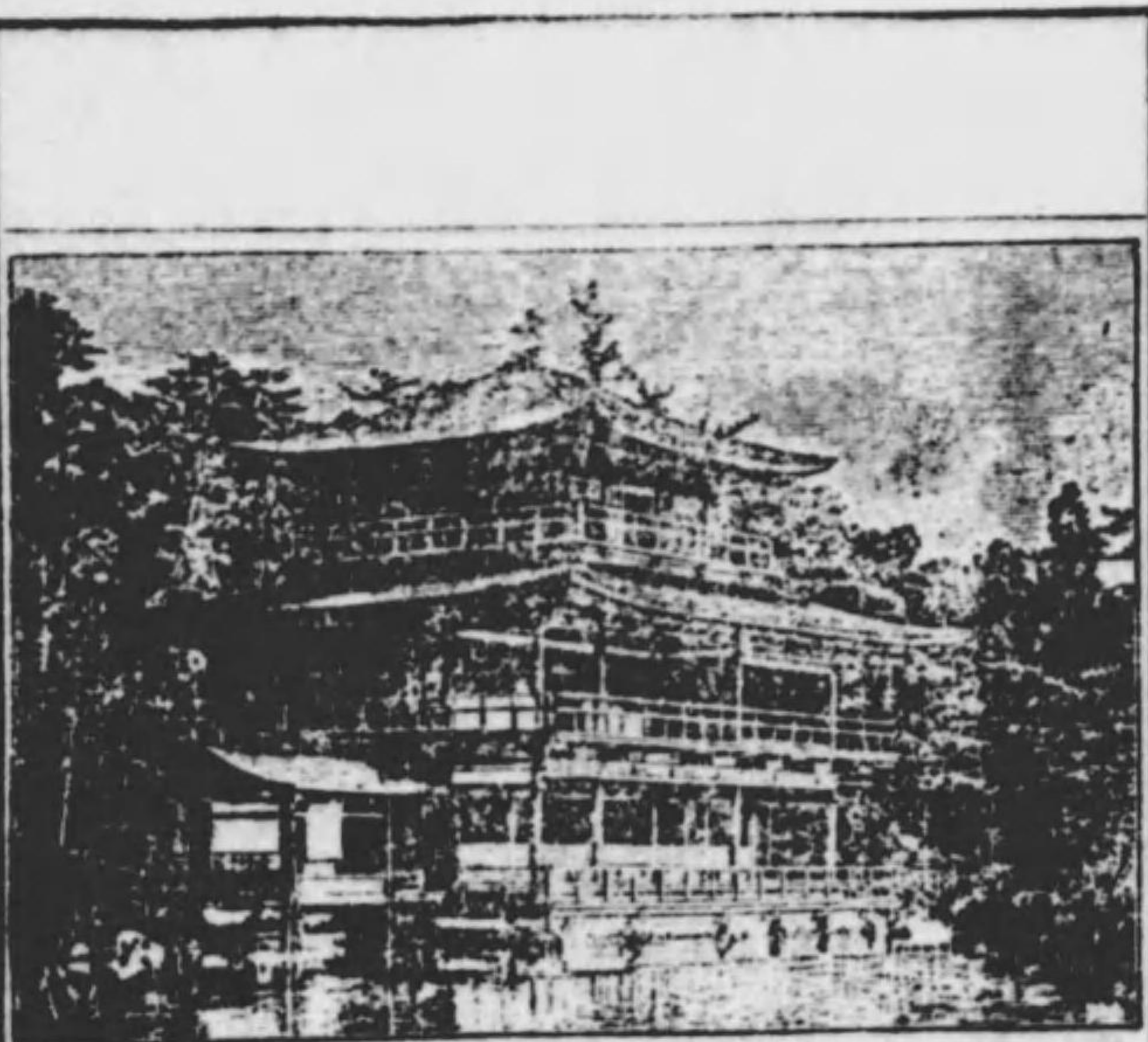
【僭上の行多く】

義満の僭上は蘇我入鹿・藤原道長などに比すべきであらう。比叡山に登る時はその行列を上皇御幸の儀衛に擬し、相國寺に七層の高塔を建て、その供養を行ふ時には、朝廷の御齋會に準じてやつたといふ。又義満の夫人康子を天皇の准母・准三宮とし、更にこれを尊んで北山院と云はせた。随つて義満薨去の際には三日の廢朝を仰出され、又太上天皇の尊號を贈られるといふ話もあつた位である。

【使を支那に】

義満者をきはめ且盛に土木を起したので、盛に苛斂誅求を行ひ、それでなくても長い間の戦亂で疲弊困憊した人民は、實に堪へ難い苦痛を感じたのであるが、義満は少しもそんな事を意に介しなかつた。(恰も滿洲に於ける張學良の如きものがあつた)而も幕府の財政は赤字ばかりで切り抜けやうが無いので、こゝに明と貿易を開くことを考へたのである。即ち筑紫の商人肥富某の説に従ひ、彼を正使とし、僧祖阿を副使として書を明に送つた。應永八年(二〇六一)三

苑院とも呼ばれた。棟上の鳳凰も鍍金を施し、三階の屋根裏・天井・勾欄何れも金箔を押したが、勾欄は悉くはげて今は金光幽かに存する。建築費は恐らく百萬圓を費したであらうといふ。義満はこゝに住んで書畫や器物の珍らしいものを蒐めて娛み、朝廷には出ないで政治の指圖もこゝでした。應永十五年後小松天皇の行幸を仰いだ時は、庭に五色の砂を敷き、饗膳の器具皆金銀を用ひ珍蓋田をなした



尋常小學國史上卷より

満は書をきはめ其の室町の邸はすこぶる壯麗にして庭に多くの美しき花を植ゑたるを以て世に之を花の御所といへり。義満また別荘を京都の北山に造り、庭に三層の閣を建てて壁にも戸にもすべて金箔を張りつめ、其の美しきこといはん方なく世に之を

尋常小學國史上卷より

金閣と稱す。義満髪を剃りてこゝに居り、なほ政治を執りしかば朝廷の官吏も皆義満の勢に恐れ、此の別荘に來りて其の命を受くるに至れり。されば義満は勢にまかせて僭上の行多く、かつて比叡山にのぼるや、おそれ多くもおのが行列を上皇御幸の御儀式になぞらへて、圓白以下の公卿をしたがはしめたり。義満また使を支那にやりて交通を開きしが、此の頃支那は元すてに亡びて明の代となれり。明主義満を指して日本國王といひしに、義満これを受けては、かからずみづからも日本國王と稱して書を送れり。わが國には天皇の外にまた國王あらんや、義満の如きはわが

月であつた。

【明主】

その時明は太祖につぐ惠帝の世であつた。義満は自ら日本國王と稱したさへ不都合極まるが、その上義満からの上表には『日本國王源道義』(道義は義満の道號)と書いて明主に對して君臣の禮をとり、又彼の年號を用ひて『永樂元年某月某日』と記した。實に一大國辱である。



【大風・洪水】

寛政元年(一一二〇)、大風や洪水が頻りに起つて五穀實らず  
餓死するもの算なき有様であつた。それにも拘らず義政土  
木を興し、大に税金を取り立てたので、人民これに苦むこ  
と甚しかつた。然るにその年の冬から翌年の夏にかけて傳  
染病が流行し、飢饉と相俟つて全國に亘り、餓死病没する  
もの幾十萬なるやを知らなかつた。殊に京都では餓民集ま  
り來り、路傍に倒れるものが非常に多く、幕府ではこれが  
救済を計畫したけれども、到底手が廻らぬ有様であつた。

【戒めたまふ】

義政花の御所を修築して、巨木奇石を諸國からあつめ、結  
構華美を盡した。そこで後花園天皇は人民の困苦を聞召さ  
れて非常に御心配遊ばし、遂に詩を賦して義政に賜はつた。  
(教師用中巻一八四頁参照)こゝに於て義政恐縮し、一旦その  
工事を中止したが、間もなく生母重子のために高倉武者小  
路に一第を營んで巨額の費用を用ひ、又嬖臣伊勢貞親の邸内  
に浴場を造營したが、その材は悉く桑樹を用ひたといふ。

【多くの税】

當時新税として段錢・棟別錢・倉役・酒屋役等があつた。  
段錢は段別によつて割りつける地租、棟別錢は戸毎に課す  
るもので今の戸數割の様なもの、倉役は質屋の倉庫に對す  
る課税で、酒屋役は今の酒造税で酒壺一個毎に課税した。  
凡てこれ等は臨時税で、額も回数も制限がなかつた。例へ  
ば應安五年に日吉の神輿を改造するため段別三十文を諸國  
に課し、永祿七年室町第を修理せんため棟別金二分を攝津  
に課し、元徳二年に日吉神輿改造のため京都の土藏一字に  
税七百五十匹を課した。

【其の母】

かくて萬民の困苦その極に達し、人心亂を思ふの時にあた  
り、徳政と稱して借金踏倒しの令を出したりしたので、一  
揆なども各地に起つて掠奪を擅にするに至つた。  
義視が養子になつてから三年目に義尙が生れた。これより  
先義視は僧になつてゐたので、これを還俗せしめて養子と  
すこ時に「他日若し男子が生れたら、必ず襁褓の中から直

又小川御所を作つてこれに住み、花の御所が火災に罹つた  
ので、又更にこれを造營した。

【花見の宴】

寛正六年三月には花頂・若王子・大原野の花見の會、文正  
元年三月には花之御幸があつた。又春秋の花見・紅葉狩の  
宴には百味を以て百菓をつくり、食器には金銀を用ひ、箸  
は沈の木を以て削つたといふ贅澤極まるものであつた。

國體をないがしろにせるものといふべし。

第二十八 足利氏の衰微

義滿より四代を経て義政の代となれり、義政は僅かに  
九歳にして家をつぎ程なく將軍となりしが、少しも心  
を政治に用ひずたまふ、大風洪水ありて五穀みのら  
ざるが上に、惡病流行して、人民すこぶるなやみたるに、  
義政さらにはあはれみの心なく、盛に室町の邸を營みし  
かは、<sup>二</sup>百後花園天皇は御心をいためたまひて、之を戒  
めたまふ、こゝに於て義政大いにおそれ入り、いつたん  
工事をとめたれども、なほしばしば、花見の宴などを

尋常小學國史(上巻)より

尋常小學國史(上巻)より

催して、奢にふけりき、されば費用足らずして、人民より  
多くの税を取立てしかば、萬民いよく苦しみて、世の  
中騒がしくなれり。

義政は三十歳に及びて、早く政治に倦み、未だ子なきを  
以て、弟義視を養子となし、之に職を譲らんとし、細川勝  
元をして之をたすけしめたり、此の時義政は他日子生  
るとも決して義視を廢せざることを約束したりしに、  
間もなく實子義尙生るゝに及び、其の母は義視をしり  
ぞけて之を立てんとし、諸將の中にて山名宗全がひと  
り勝元に劣らざる勢あるを見て、之に義尙を託せり、こ  
こに於て足利家の相續の争は、細川山名二氏の争とな

ちに僧にする」といふ約束であつた。然るに義尙が生れて  
見ると、母の富子はどうしてもこれを僧とするに忍びず、  
如何にもして將軍に立てたいと思つて、山名宗全に託した  
のである。

【山名宗全】

山名宗全と細川勝元とは、初めは相親んで居たが、兩雄は  
永く併立せず、互に權勢を争ひ、相怨むに至つた。



【勝元・宗全】

勝元と宗全の争覇は應仁大亂の根本原因である。勝元が義視を奉じたのは時の管領であつたからであるが、義尙の母富子は義尙を託するに勝元と對抗するに足るべき人を求めて宗全を得た。この時畠山氏にも内訌があつて、勝元は政長に與し、宗全は義就と結んだ。又斯波氏の内訌についても勝元が義敏を助けると、宗全はその反對の義兼に黨し、事毎に反對の地位に立つて争ひは益々深刻となつた。

そこで應仁元年正月、宗全は勝元の勢を殺がんとして種々のことを計畫した。この時畠山政長と同義就との争が愈々ひどくなつて、共に兵を集めて正に戦はんとした。そして勝元と宗全とが各々その一方を助けてゐるのみならず、吉良・斯波・一色・仁木・土岐その他の諸將も互に一方に黨して形勢頗る穩かでなかつた。義政即ち命令を下して『義就・政長各々其の手兵を以て相争へ、諸將は斷じてこれを援けてはならぬ』と、併しその命は行はれなかつた。

【味方の大軍】

勝元の側は攝津・丹後・土佐・讃岐・阿波・三河・備中・淡路和泉等、宗全の側は但馬・播磨・因幡・備前・伯耆・美作・石見尾張・遠江・越前等の兵で、その分布は錯雜を極めてゐる。

【挿繪】

眞如堂縁起繪卷の一部である。後方に三巴の幟幕を張り、牀几に腰かけて居るのは細川方の赤松政則である。その前には楯を並べ、逆茂木を設けてゐる。



尋常小學國史上卷より

【十一年間】

應仁元年から文明九年まで十一年間であつたが、これは要するに集つた諸將に連絡統一がなく、又主義も主張もないものがたゞ利害關係で争つたのであるから、著しく闘志を缺き、ために勝敗が容易に決しなかつたので、結局最後まで勝敗無く、諸將は國に歸つて更に戦を續けたから、云はゞ京都に於ける戦争が全國に擴大したので、織田・豊臣の統一に至つて應仁の亂は始めて結末をつげたと云つてもよいわけである。

【相つぎて病死】

宗全は文明五年三月十八日、病を以て陣中に卒した。年七十であつた。而してその年五月十一日には勝元も亦四十四歳を以て卒した。これは亂の始まつてから七年目であつたが、元來自己の利害を目標に戦つてゐる諸將は、首領が死んでも相變らず戦争を續けた。

【ある人】

これは飯尾彦六左衛門尉がよんだ歌だといふ。應仁記とい

尋常小學國史上卷より

これより兩軍相戦ふこと十一年間の久しきにわたり、其の間に宗全勝元相つぎて病死し、後兩軍の諸將もまた戦に倦み、だいに引去りて、京都の亂始めて止みたり、世に之を應仁の亂といふ。これが爲に幕府をはじめ名高き社寺其の他の建物多く焼けうせて、花の都もたちまち焼野とかはれり、ある人この有様を見て、  
夜や知る都は野への夕雲雀、  
あがるを見ても落つる涙は、  
とよみたりき。  
かゝる大亂の中にも、義政はなほ奮をやめず、後京都の東山に別荘を造り、義滿の金閣にならひて、庭中に銀閣

【書をやめず】

かゝる未曾有の大亂をよそに、義政は平氣で騎書を續けてゐた。文明十四年二月から別邸を東山に造營し、翌年六月こゝに移つた。銀箔で飾るつもりであつたが、財政逼迫のため遂に果さなかつた。けれども世に銀閣と稱し、今は寺になつて慈照寺と云つて居る。







【おい／＼に相模を】

その後早雲は或は上杉顯定と戦ひ、或は三浦義同と争つた。そして三浦義同を岡崎城に攻めて陥れたが、義同逃れて新井城を保ち、北條氏と争ふこと五年間、早雲遂にこれを亡ぼして伊豆・相模兩國を完全に従へた。

【上杉氏を】

上杉氏は關東管領足利氏の執事である。それが山内・扇谷の二家に分れて互に相争つてゐたので、北條氏はこれに乗じて獨り漁夫の利を占めたのである。即ち氏綱は先づ扇谷家を亡ぼさんとし、大永四年正月大學して江戸城を攻めて上杉朝興を走らせ、更に天文六年四月、朝興の子朝定を河越城に攻めてこれを取つた。

【すこぶる臆病】

これは甲陽軍鑑といふ書物に出てゐる話であるが、始めて鐵砲を見てその音に驚いたのを、諸人が目ひき袖ひき笑つたので、口惜しがつて自刃しようとした處、お側の者が「物に驚くのは武勇すぐれたしるしだとて、人々が賞めたので

【北條氏の將】

この時朝定・憲政の兩上杉氏は、聯合して北條氏に當ることとし、天文十四年に河越城を攻めた。守將北條綱成等これを拒いで容易に降らず、援を氏康に請うたので、氏康即ち天文十五年七月に自ら兵を率ゐて救援に赴いた。

【僅かに八千】

この時上杉・今川相議して北條方の長久保の城を攻めるといふ噂があつて、氏康はその方へも兵を分ち、又小田原にも兵を残し、三浦の方へも兵を分けねばならぬので、五百三百と差引いた残りが八千騎、それが敵の八萬騎に對したのである。

【偽りて和睦】

そこで氏康から『河越城兵は已に糧食が盡きて支へることが出来ないから、彼等の命だけを助けて貰へるなら、城も明け渡し領地も進上する』と申し入れたが、今に落城するのだから序に潰してしまへといふので容易に聞入れない。そこで氏康は更に常陸小田の陣代菅谷といふ者を頼んで、

す』と云つてやつと押し止めたといふのである。人が笑つたから切腹するといふほどの人を『すこぶる臆病』と云ひ得るかどうか。始めて見て豫期しない音を聞いて、びつくりする位は當然の話である。而してその時已に自刃しようとしたのであるから『後深くみづから恥ぢ』も當つてゐない。氏康の十二歳は天文六年で、鐵砲の傳來は天文十二年だから、この話は作り話であらう。



主警きて逃走り、早雲やすくと城を奪ひてこゝに移り、おひ／＼に相模を従へて、其の勢大いに東國に振へり。  
早雲の子氏綱また勇武にして、兵を武蔵に進め、上杉氏を破りて、江戸河越の諸城をおとし、氏綱の子氏康は、十二歳の頃まですこぶる臆病にて、鐵砲の音を聞きても驚くほどなりしが、後、深くみづから恥ぢて、武事を習ひ、遂に武勇の

人となり、父につぎてます／＼勢を得たり。此の頃上杉朝定・憲政等は、河越城を取りかへさんとて、八萬の大軍を率ゐて來り圍む。北條氏の將固く城を守りて、半年に及び、城中の兵糧やうやく乏しくなれり。氏康すなはち小田原よりおもむき助けしが、其の兵僅かに八千に過ぎず。敵の大軍に當り難きを以て、偽りて和睦を申しこみ、其の油斷せるに乗じ、夜半にはかに敵軍を襲ひて、大いに之を破れり。時に朝定は戦死し、憲政は上野に逃げかへりしが、いくばくもなくまた氏康に攻められて、越後に走れり。これより氏康ます／＼諸國を攻めて、おのが領地を廣

『どうかして籠城の綱成を助けて呉れ、それが出来たら河越城はその方へ明け渡すから』と申入れた。そこで上杉方では全く小田原勢を見くびつて油斷したのである。

【ます／＼諸國を】

兩上杉氏が亡んだ後は、關東の諸將は概ね氏康に降つた。たゞ古河公方晴氏が上杉氏の餘黨を集めて居たので、又これを攻めて陥れた。



【能く國を治め】

氏康は性沈毅にして剛柔を兼ね。時として書を讀み、時として自ら刀鎗を用ひ、能く文武兩道に秀で且禮節が正しかった。その部下を用ひるには、老少となくよく適材を適所に配し、どんな下賤なものでもその功を録して決して忽にしなかつた。又子弟が數人あれば、總領ばかりでなく次男以下にも俸給を與へ、功あればどし／＼進めるので、人々自ら奮つて死を以て仕へるといふ風であつた。

【政治をしたひ】

戰國の時代とて、人民は何處に居ても安穩な暮しは出来なかつた。殊に領主が凡庸では、何時何處から攻められて、或は兵火に焼かれ或は掠奪に會ふかもわからぬ。そこで強い領主の下に集つて、少しでも安心したいといふのが人情であるから、北條氏の勢力のよいのを見ては、争つて小田原に集つたこと當然である。殊に氏康等の善政で、税は軽く産業は振興したのであるから、小田原城下の繁盛は京都を凌がんとする勢があつた。(一方中國に於ては同じ理由で

【平氏より出づ】

上杉謙信は平良文(大妻の亂を起した將門の叔父)の裔である。良文から十代目を景政と云ひ、鎌倉権五郎と云つて勇名を馳せた。この景政から五代目の景弘に至つて長尾氏を稱したが、後嗣がないので、上杉藤景(本藤原氏)を養子とした。その藤景から十二代目が爲景である。

【生れつき大膽】

幼年の時から頗る精悍にして膽略があるので諸將多く心を寄せた。父の死んだ十三歳の時家臣のために殺されようとしたので、或家來が牀の下に匿したが、夜になつて行つて見たら熟睡して居たといふ。

【父戦死】

天文十一年に一向一揆が加賀に起つたので、爲景これを撃つて梅檀野に行つた。ところが賊將江波某なるもの、伴り降つて、路に陷穽をつくつて爲景を迎へ、これを陥れて殺したのである。

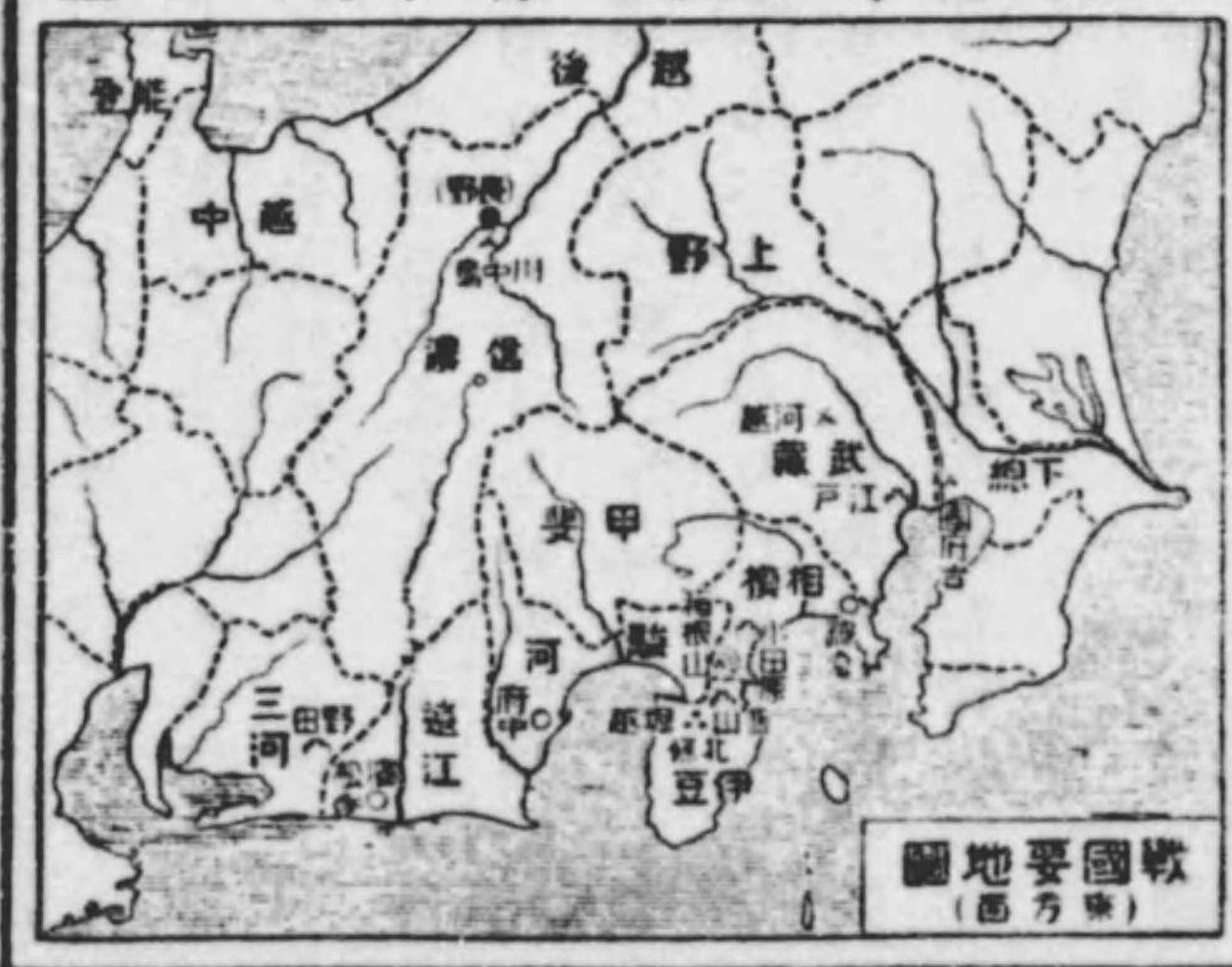
【僧となりて】

大内氏の山口が京都以上の繁榮を保つた。(文補用書中 卷二九八頁)

【凡そ六十年】

早雲の生れは永享四年(二〇九二)で、今川氏の處に居たのは文明八年(二三一六)前後、堀越公方を滅ぼして伊豆を略したのが延徳三年(二一五一)である。而して氏康が古河公方を滅ぼしたのは天文二十三年(二二一四)であるから、凡そ六十年とは伊豆攻略以後を指したのである。

めたり。氏康は戰に巧みなるのみならず、能く國を治めて、常に部下を愛し人民をめぐみたれば、士民みな之になつき、諸國の人々も其の政治をしたひきそひて小田原に集り來りしといふ。早雲の起りしより凡そ六十年にして、其の領地はすべてに伊豆相模武藏上



非常小學國史上卷より

非常小學國史上卷より

野等の諸國に及べり。

第三十 上杉謙信と武田信玄

北條氏と肩をならべて、之と相争へるものに、越後の上杉謙信あり。謙信はもと長尾氏にして、平氏より出づ。其の家代々上杉氏に仕へて越後にありき。父を長尾爲景といひ、謙信は其の二男なり。生れつき大膽にして、すこぶる勇氣あり。幼き時父戦死して兄晴景家をつぎしが、柔弱にして部下にあなどられ、其の國大いに亂れたり。謙信すなほち僧となりて諸國を見あるき、ついで越後に歸りて兄に代り、國內の亂を平け、しだいに近國を従

家臣が權を専らにして謙信を殺さうとするので、徒士十四人と行脚僧の姿となり、北陸・東山の諸國をめぐつて、山川城地の形勢を見て、悉く見取圖を作つて歸つた。そこで栃尾城に據つたが、賊が度々攻めて來たけれども、防戦して大に之を破り、天文十四年京都に上つて賊を討つる詔旨を受け、歸國して連年大に賊を破り、遂に悉く國內を平げて兄に代つて家をついだ。



【家名を授く】

上杉憲政は北條氏康に追はれて謙信の處に來た。そこで謙信に對して復讐を託し、關東管領の職を譲り、上杉の族稱と上杉氏重大の系圖とを與へたのである。謙信は長尾氏を稱してゐたけれど、元は上杉藤景が養子となつて來たものであるから、(前頁参照) 血統から云へば始めから上杉氏であつたと云つてもよい。而して家名を授けたといふのは、換言すれば謙信が憲政の子になつたわけである。

【しばく】

これは川中島の戦よりも後のことであるが、永録三年には和田城を攻め、更に長尾政景を遣はして武藏を侵し、自ら二萬騎を發して泉福寺に陣す。北條氏康大舉してこれを防いだ。だが勝たずして歸つた。翌四年古河を攻め、關宿・河越の諸城を抜いた。そして更に十一萬の大兵を以て相模に入り小田原を圍んだのである。

【防ぐものなく】

北條氏康は城を圍まれても敢て出なかつた。謙信も亦自重

【謀を以て】

甲陽軍鑑によればこれは天文五年のこと、海野口の城を攻めた時、年の暮となり大雪も降つたので、信虎兵を引き上げて歸國した。その時信玄は殿軍を承り、三百の手兵を以て急に取つて返して城を攻めたので、城中では敵が引き上げたからとて油断して、城兵は正月の用意に皆里に歸り城内には七八十しか居なかつたといふ。信虎の歸國は信玄が勧めたので無いから、『謀を以て』といふほどのことではなく、只敵の油断に乗じたのである。

【信濃を攻取り】

信玄は連年兵を信濃に出して諏訪氏を滅ぼし、村上氏・小笠原氏の地をとり、木曾氏を降して大に威を振つたので、天文二十二年八月、村上義清遂に邑を棄て、越後に走つた。

【川中島に戦ひ】

しばく兵を信濃に出したといふが、果して何回川中島で戦つたかはよくわからない。たゞ弘治元年七月と永録四年十月との戦だけは確實である。(この外に天文二十三年にも

して敢て進まず、間もなく兵を引いた。氏康はこれを追はなかつた。そこで謙信は悠々鎌倉に參詣したりした。この時武田信玄に上杉氏の郷國を衝くやうに勤めたものもあるが、信玄も亦自重して動かなかつた。

【義光より出て】

義光の子義清、武田冠者と稱し世々甲斐に居る。義清から十七代にして信玄となつてゐる。

へて勢甚だ盛なり。後上杉憲政が北條氏康に追はれて謙信にたより來り、其の家名を授くるに及び、始めて上杉氏を稱へたり。これより謙信は憲政の爲に、しばく兵を關東に出して北條氏と戦ひ、ある時はるかに小田原の城下に迫りしことありしが、敵は其の武勇に恐れ、途中出でて防ぐものなく、あたかも無人の野を行くが如き有様なりき。  
此の頃甲斐に武田信玄あり、其の家は新羅三郎義光より出て、代々甲斐にありて其の領主たり。信玄は幼き時より智謀ふかく、十六歳の時父信虎にしたがひて信濃に攻入りしに、敵城固くして、信虎は八千の兵を以て之

尋常小學國史上卷一〇

を破ること能はざりしに、信玄は僅かに三百の兵を率ゐ、謀を以て不意に襲ひて之をおとしいれしことあり。程なく父に代りて能く其の國を治め、又しだいに信濃を攻取りしかば、信濃の村上氏等は越後に走りて謙信の助を請へり。  
謙信よりて村上氏等の爲に、しばく信濃に入りて、信玄と川中島に戦ひたり。中にもある年秋の戦に、謙信は一萬三千の兵を率ゐて川中島に出陣し、信玄は二萬の大軍を以て之をささみ撃にせんとせしを、謙信たちまぢ其の謀をさとり、不意に信玄の陣を襲ひ、みづから大刀をふるつて信玄に切りつけしに、信玄は軍配圖扇を

戦つたらしい(國語七の十四) 川中島の戦

【ある年秋の戦】

これは永録四年の戦を指したのである。十月十日のことであるから、早曉に霧があつたのを利用して、兩雄は接戦したのであらうが、詳細な戦況は想像によつて諸書に書かれたもので正確ではない。この役兩軍の死傷共に多かつたが、信玄の弟信繁が戦死したので武田方は一時危かつた(挿繪)



【久しき間】

村上義清が謙信に頼つたのは天文二十二年八月であるが、それからすぐに謙信が兵を出したかどうかわからない。初度の戦は二十三年か又はその翌年の弘治元年で、弘治三年に一度戦つてゐるが、それは地點が不明である。次に永録四年の戦があつて、それから永録七年に謙信は川中島に陣して信玄の來るのを待つたが信玄は來なかつた。この年兩軍和睦したから、天文二十二年から數へて十二年間の争ひであつた。

【食鹽の乏しき】

甲信二州は海に濱しないから食鹽を産しない。故に南は東海道から、北は北陸道から食鹽を輸入して居たもので、その頃は東海にも北陸にも各地に鹽田があつた。而して兩方の鹽の輸送限界は信濃の中央で、鹽尻はその境界線であつた。鹽尻とは鹽の到着する最終地の意。然るに相模の北條氏康と駿遠の今川氏真とは、相謀つて甲信に鹽を送ることを止めたので、信玄の兵は勿論、人民の困苦其の極に達し

【京都に上り】

戰國時代の諸雄は、何れもたゞ徒らに戰を好んだのではない。四隣を征し京都に上り、皇室を戴き將軍を挟み、以て天下に號令することを理想としたものである。皇室の式微はその極に達したけれども、その尊嚴は毫も侵されず、官位は凡て朝廷から賜はつたもので、諸將もこれを唯一の光榮としてゐた。これわが國體の特異な點、國民精神の特殊なる點である。

而して謙信も信玄も氏康も共に上洛の志があつたが、三雄互に相牽制して何れも容易にこれを果さなかつた。併し謙信は天文二十二年上洛して皇居を拜し將軍に謁し、永録四年又上洛、禁闕に參して天盃御劍を賜はり、從四位下彈正大弼に任じた。

【駿河を合はせ】

永録十一年、徳川家康と謀を通じて今川氏真を駿河に攻め、翌々年元龜元年に至りて全く駿河を併せた。而して翌年北條氏と結んで徳川家康を攻めて遠江から三河に入り、元龜

た。(永録十年頃)これを聴いた謙信は「米鹽で敵を苦しめるのは卑怯千萬だ。おれは信玄と争つてゐるけれども、それは弓箭で争つてゐるのだから」といふので、早速書を信玄に寄せて「入用なだけはいくらでも送るから、遠慮なく云つて呉れ」と申入れた。これには信玄も心から感謝した。そして越後の商人から鹽を自由に且安價に買ふことが出来た。謙信の行爲は實に武士道の一翫鑑である。



尋常小學國史上卷より

川中島に對する上杉謙信

尋常小學國史上卷より



川中島に對する武田信玄

此の二人は、おのゝ折を見て京都に上り、將軍を奉じて天下に號令せんと志せり。されば信玄はまず、近國を攻取り、遂に駿河を合はせ、遠江に進み、さらに三河に入りしに、たゞ病にかゝり、國に歸る途中にて死せり。謙信これを聞き、良き相手を失へりとして、深く惜しみたりとぞ。

三年十二月三方ヶ原に戰つて大勝を博した。

【病にかゝり】

天正元年正月遠江から三河境を侵し、野田城を圍んだ時病氣にかゝつたので軍を還し、平癒を待つて三月に信濃から西三河に出で、いよいよ上洛を決行せんとしたが、病が再發して四月に三河の平谷に於て卒した。そこで喪を祕して國に歸つた。



【出發の期】

謙信が已に數回上洛したことは前述した。(前頁参照)併し當時近畿には織田信長の勢が頗る強かつたので、これを破らねばならなかつたが、武田信玄と信濃を争つたりして居たので非常に後れた。信玄の死後、天正五年越前に入り、織田氏の壘を悉く降した。信長退て長濱に入つた。六年三月、管内八國の兵を集め、軍容大に振ひ京畿震駭した。即ち正に出發せんとしたが、同月二日に病氣にかゝり、翌日遂に卒した。年四十九であつた。

【大江匡房の子孫】

大江匡房は後三條天皇に仕へた學者で、義家に兵法を教へたので名高い。(六七頁)匡房から十四代を経て元就となる。(一五七頁参照)

【代々安藝にあり】

大江廣元は源頼朝を佐け、功によつて安藝介となつた。その子季光相模毛利莊を領して毛利氏を名乗つた。その孫時親足利尊氏から安藝の吉田を買つた。それから以來代々安

【從者は】

『何を祈つたか』と聞かれたので、從者は思ひくゝに幼君のお氣に召すやうにと『若君の御健康を祈りました』とか『御幸福を』とか、或は又『御壽命の長いやうに』とか色々なことを云つた。その中で氣のきいたものが『中國を皆保たせられるやうに』と祈つたと答へたのである。この話は甲陽軍鑑に出てゐるので、無論正確な事實かどうかかわらぬ。一の逸話に過ぎない。

【天下を志して】

當時の群雄は悉く天下を志したもので、京都に上ることが唯一最後の目的であつたのだが、元就は『天下を志してやうやく中國を得』ようと云つた。そして元就は遂に中國・九州の一部を得たが、あまり天下を得ようとはあせらなかつた。どちらかと云へば、進んで取るよりも退いて守る方に主力を注いだ。

【智勇かね備り】

元就尼子氏を攻めること七年であつたが、その間士氣衰へ

藝に住んでゐたのである。

【幼き時より】

元就は幼名を松壽マツキウといふ。頗る度量があつた。嘗て從者がこれを抱いて川を渡つてゐて、躓いて水に溺れたことがあつて、恐縮して罪を謝したところ、『なに道を歩いて居りや躓くのは當り前だ。そんなこと心配するな』と云つて氣にも止めなかつた。

謙信もまたすてに越中能登などの諸國を取り、まさに大兵を率ゐて京都に向はんとせしに、出發の期にのみにはかに病死して目的を果さざりき。

第三十一 毛利元就

東國に北條上杉武田の三氏をらび立てる時に當り、西國には毛利元就やうやく勢を得たり。元就は大江匡房の子孫にして、其の家代々安藝にありき。元就は幼き時より大志をいだけり。十二歳の時嚴島神社に參詣し、從者の祈をこむるを見て、其の祈りしところを問ひしに、從者は若君に中國を平けさせたまへ

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

と祈りたり。と答へたり。元就いはく、そは愚なる祈かな、何故に天下を平けさせたまへとは祈らざりしか。天下を志してやうやく中國を得べし。中國を志さば何とて中國を得べきぞ。と元就長じて智勇かね備り、又よく部下を愛せしかば、人皆よるこび服したり。



す 諸 參 に 就 神 島 嚴 就 元 利 毛

ず人民も困らなかつた。それは戦鬪よりも寛惠を以て人心を收攬したからである。この點北條早雲と東西好一對である。即ち民の疾苦を問ひ、孤窮を憐むので、民心次第に尼子氏を離れ、尼子氏は遂に亡びた。元就又部下を愛し、匹夫下郎に至るまで親しく言葉をかけ、酒の好きなものには酒の利を説いてこれを飲ませ、嫌ひなものには酒の害を説いて餅を與へたといふ。



【最も富強】

義興は周防・長門・安藝・石見・豊前・筑前の六國を領して威名頗る盛で、朝鮮王も亦貢賦を納めた。而して幕府が明と貿易をなすにあつて、これが管理を大内氏に委ねたので、その方から莫大なる利益を擧げた。大内氏の富強は主としてこの貿易の利益によるものである。

【御費用乏しき】

後奈良天皇は大永六年に踐祚遊ばされたが、踐祚の式と先帝の大葬とを行はせられるために、費用を幕府に課せられたけれども、幕府では僅かに八萬匹を獻じたので、辛うじてその儀式をすませられたのみで、即位の大禮は行はせられることが出来なかつた。そして十年の後三條西實隆の盡力により、大内義隆が二十萬匹を獻金したので、天文五年二月に漸くその式をお舉げになつた。尙その前年暴風のため、御所の日華門が倒れた時にも、義隆は資を獻じてこれを修理しまつた。

【武備を怠り】

元就は嚴島に宮尾城を築き、これを本據とするやうに見せかけて、自らは廿日市の櫻尾城に居り、宮尾城へは陶晴賢の最も悪んで居た已斐豊後守等を置いたので、晴賢は全くその術中に陥り、宮尾城の完成せぬ前に早くこれを陥れ、そこを本據として毛利を攻めようと思ひ、六萬餘騎悉く嚴島に押し渡つた。

【不意に晴賢の陣を】

弘治元年十月三十日、元就暴風雨に乗じてひそかに舟を出し、鼓ヶ浦に上陸し、山を越えて陶の陣の横へなだれ込んだ。これは義經の鴨越のさかおとしに似た戦法である。この時小早川隆景は直ちに嚴島神社の廻廊に上陸し、宮尾城と相呼應して三方から攻め立てたので、陶軍は狭い土地に兵のみ多くて動きがとれず、散々に打ち破られて西に走つた。そして乗つて來た舟で歸らうとしたが、島の西部に繫いであつた舟は、毛利の水軍が悉く切り放して居たので、晴賢も逃げ場を失つて、遂に自刃した。

義隆常に「聖賢は道を以て國を治める。故に文道が最も大切で武事はその次だ」と云つて居た。阿諛の徒これにつけて上つて文筆を主とし、或は佛を信じ、又茶事や蹴鞠を嗜み歌を詠んだり詩を賦したり、又は經を讀んだりして武事の方面は益々懈つた。老臣陶晴賢これを憂ひて屢々諫めたけれども聽かず、反つて嬖臣の讒を信じてこれを疏斥した。毛利元就も諫めたが、納れられなかつた。

大内氏のふ  
これより先、久しく中國にて勢を振ひたるは、周防の大内氏にして、大内義興は數箇國を領して、最も富強をきほめ、其の城下山口のにぎはひは京都にもまさりたり。其の頃京都は大いに衰へて、朝廷も御費用乏しきにより、五十年後奈良天皇は、久しく御即位の禮を擧げたまふこと能はざりしに、義興の子義隆は、其の御費用をたてまつりて忠節をいたせり、されど義隆富強をたのみて、やうやく奢にふけり、武備を怠りしかば、遂に其の家臣陶晴賢の爲に殺されたり。  
此の頃元就は義隆の部下なりしが、すなはち義兵を起して、晴賢の大軍を嚴島におびき出し、風雨の夜に乗じ

尋常小學國史、卷より

尋常小學國史上卷より

元就の戦場  
圖地要國戰 (圖方西)

て島におし渡り、不意に晴賢の陣を襲ひて之を破り、遂に晴賢を滅せり。世に之を嚴島の戦といふ。  
これより元就は、其の勢に乗じ、たちまち周防長門等を取り、大内氏に代り、又兵を出雲に出して、尼子氏と争ひ、富田の城を圍む

【尼子氏と】

永祿三年、元就尼子氏を出雲に攻め、富田の要害に押寄せ島根に本陣をすえた。山陰・山陽二道の諸將、遠近相ついで款を送り好みを通じ、元就の威勢愈々上つた。而も元就急激に攻戦することなく、城を遠巻にして持久戦をなし、人民を愛撫して尼子氏の自滅を計つたこと、一五三頁に記した通りである。







【身分ある公卿】

これは信長の頃の話で、常盤井殿といふ公卿であつたと、『老人雑話』の中に見えてゐる。如何にも悲惨極まる話である。近衛殿で歌の會のある時に、まつ黒に煤けた三寶に、コロ／＼の赤小豆餅をのせて出されたといふ話もある。又關白料と云つて、袋を下げて京の町中を米を貰つて歩いたといふことである。

【朝廷殊に衰へて】

御所の築地は破れてしまつて、竹の垣などで間に合せてあつた。それで子供は遠慮もなく入つて行つて、御殿の縁に上つて土をこねて遊んだりした。破れた簾が下つてゐるので、折ふしあけて見ても、中には誰も居ない風であつた。これも江村專齊の書いた本の中にある。又右近の橋のそばで茶店を開いてゐたものがあるといふ。僅かばかりのお金を御簾に結びつけて置くと、日を経て行つて見れば、宸筆をお下しになつたといふことで、何とも畏れ多い極みである。

【伊勢の神宮】

伊勢神宮は二十年毎に御造營になる定めであつたが、後花園天皇の永享六年に外宮、同寛正三年に内宮の遷宮があつた。従つて後土御門天皇の時に洪水のため宇治橋が落ちたが、それさへ架けることが出来なかつたので、守悦といふ尼僧が諸國を勧進し、資財を募つて漸く架橋したほどである。

分ある公卿に面會を請ひたるものありしに、此の寒き時候に夏の服にては恥かしといへるを苦しからずとて参りたるに、素肌すもに蚊帳むしをまとひてあひたりといふ公卿の苦しみたる様これにても知るべし。後奈良天皇の御代は朝廷殊に衰へて、御所の築地は破れたれども之をつくるふこともかなはず、寶所たからの御あかしの光は遠く三條の橋より見えしとなり。さればおそれ多くも、天皇の毎日の御用にすら事かきたまふことしはく／＼なりしといふ。されど天皇はかくの如き乏しき御費用の中よりなほ節約したまひて、久しくすたれたる朝廷の御儀式を再

尋常小學國史上巻より

尋常小學國史上巻より

その後慶光院清順といふ尼僧が、四方に勸化して神宮造營の資を得んと志し、後奈良天皇の勅許を得、正親町天皇の永祿六年に、漸く百三十年ぶりで外宮の正遷宮を行ふことが出来、清順の死後、周養その志をついで天正十三年に、百二十二年ぶりで内宮の遷宮を舉行した。

【ある年】

天文九年(二二〇〇)のことであつた。春から夏にかけて大洪水大飢饉があり、加ふるに京都をはじめ諸國に疫病が大流行したので、五月には内野經堂に大施餓鬼を修行して疫死者を弔つたりした。

【經文を寫し】

この年六月十七日、後奈良天皇自ら御寫しになつた般若心經一卷を三寶院に下され、僧義堯に仰せて祈願せしめられた。その末尾に『天下大に病み萬民多く死す。朕、民の父母となつて甚だ心痛に堪へない。この一卷の寫經がどうか民の病を醫する妙藥となる様に』との意味の文をお書きになつてゐる。經文を書寫して佛に祈るといふことはその頃

盛に行はれたものである。寫經は通例紺紙に金泥を以つて書かれた。(教師用中巻二七八頁にその寫眞がある)

【醍醐の三寶院】

これは京都市外醍醐村にある醍醐寺の中の三寶院である。幕府の歸依によつて最も勢力を得、その法流の徒は世々座主に任ぜられてゐた。文明年間兵火に罹つたが、後豊臣秀吉によつて再建され、子院が五十一坊もあつた。



【御仁徳】

日々の供御にも事缺かせられる御時にさへ、たゞ萬民の福利をのみ御軫念あらせられるといふことは、實に子を思ふ親心そのまゝであつて、國民の等しく感泣する所である。これは明治天皇の御製にも澤山拜される處であつて、實に歴代天皇の御心であり、國民亦これに答へ奉つて忠誠をばげむ、これがわが國體の精華なのである。

明治天皇御製

いにしへのふみ見るたびに思ふかな

おのがをさむる國はいかにと

萬民をいつくしみたまへる御仁徳のかたじけなさは誰か感泣せざらん。

尋常小學國史 上巻

尋常小學國史上巻より

年表

御代數	天皇	紀元	年號	摘要
一	神武天皇	元	元年	天皇御即位の禮を行ひたまふ
三	景行天皇	七	二十七年	日本武尊熊襲を討ちたまふ
四	仲哀天皇	七	四十年	日本武尊蝦夷を討ちたまふ
六	仁徳天皇	八	九年	神功皇后新羅を討ちたまふ
元	欽明天皇	九	四年	天皇勅して税を免じたまふ
三	推古天皇	一〇	十三年	百濟より始めて佛敎をつたふ
五	同	一三	十二年	聖德太子十七條の憲法を定めたまふ
六	孝徳天皇	一五	十五年	聖德太子使を支那につかはしたまふ
八	天智天皇	一七	八年	大化の新政はじまる
九	元明天皇	一八	三年	藤原鎌足薨す
一〇	聖武天皇	二〇	三年	天皇奈良の都をたてたまふ
一四	稱徳天皇	二四	三年	天皇勅して國ごとに國分寺を造らしめたまふ
		二五	三年	和氣清麻呂宇佐八幡の敎を申し上ぐ

尋常小學國史上巻より

年表

一六〇



一四四	延暦十三年	天皇平安京をたてたまふ
一四三	同十六年	天皇坂上田村麻呂をして東北地方を討たしめたまふ
一四二	大同元年	空海唐よりかへる
一四一	延喜元年	菅原道真太宰府にうつさる
一四〇	萬壽四年	藤原道長薨す
一三九	康平五年	源賴義安倍貞任等を滅す(前九年の役)
一三八	治暦四年	天皇皇位に即きたまふ
一三七	寛治元年	源義家清原武衡等を滅す(後三年の役)
一三六	保元元年	源為朝等の軍敗る(保元の亂)
一三五	平治元年	源義朝等戦敗る(平治の亂)
一三四	承久三年	平重盛薨す
一三三	同四年	平氏亡ぶ
一三二	建久三年	源賴朝征夷大將軍に任ぜらる
一三一	承久四年	源實朝殺され源氏亡ぶ
一三〇	同五年	後鳥羽上皇北條義時を討ちたまふ(承久の變)
一二九	同六年	元軍來り侵す(文永の役)
一二八	同七年	元軍再び來り侵す(弘安の役)
一二七	同八年	新田義貞鎌倉をおとしいれ北條氏を滅す

一九三	元弘三年	天皇幕府の政權を朝廷にをさめたまふ
一九二	同二年	護良親王弑せられたまふ
一九一	同三年	足利尊氏反す
一九〇	同四年	楠木正成戦死す(湊川の戦)
一八九	同五年	名和長年戦死す
一八八	同六年	天皇吉野に行幸したまふ
一八七	同七年	北畠顯家戦死す(石津の戦)
一八六	同八年	新田義貞戦死す(藤島の戦)
一八五	同九年	楠木正行戦死す(四條畷の戦)
一八四	同十年	北畠親房薨す
一八三	同十一年	菊池武光少貳頼尙を破る(筑後川の戦)
一八二	同十二年	天皇京都に還幸したまふ
一八一	同十三年	足利義満金閣を造る
一八〇	同十四年	應仁の亂起る
一七九	同十五年	足利義政銀閣を造る
一七八	同十六年	北條氏康上杉氏を破る(河越の戦)
一七七	同十七年	毛利元就陶晴賢を滅す(嚴島の戦)
一七六	同十八年	上杉謙信武田信玄と戦ふ(川中島の戦)
一七五	同十九年	
一七四	同二十年	
一七三	同二十一年	
一七二	同二十二年	
一七一	同二十三年	
一七〇	同二十四年	
一六九	同二十五年	
一六八	同二十六年	
一六七	同二十七年	
一六六	同二十八年	
一六五	同二十九年	
一六四	同三十年	
一六三	同三十一年	
一六二	同三十二年	
一六一	同三十三年	
一六〇	同三十四年	
一五九	同三十五年	
一五八	同三十六年	
一五七	同三十七年	
一五六	同三十八年	
一五五	同三十九年	
一五四	同四十年	
一五三	同四十一年	
一五二	同四十二年	
一五一	同四十三年	
一五〇	同四十四年	
一四九	同四十五年	
一四八	同四十六年	
一四七	同四十七年	
一四六	同四十八年	
一四五	同四十九年	
一四四	同五十年	
一四三	同五十一年	
一四二	同五十二年	
一四一	同五十三年	
一四〇	同五十四年	
一三九	同五十五年	
一三八	同五十六年	
一三七	同五十七年	
一三六	同五十八年	
一三五	同五十九年	
一三四	同六十年	
一三三	同六十一年	
一三二	同六十二年	
一三一	同六十三年	
一三〇	同六十四年	
一二九	同六十五年	
一二八	同六十六年	
一二七	同六十七年	
一二六	同六十八年	
一二五	同六十九年	
一二四	同七十年	
一二三	同七十一年	
一二二	同七十二年	
一二一	同七十三年	
一二〇	同七十四年	
一一九	同七十五年	
一一八	同七十六年	
一一七	同七十七年	
一一六	同七十八年	
一一五	同七十九年	
一一四	同八十年	
一一三	同八十一年	
一一二	同八十二年	
一一一	同八十三年	
一一〇	同八十四年	
一〇九	同八十五年	
一〇八	同八十六年	
一〇七	同八十七年	
一〇六	同八十八年	
一〇五	同八十九年	
一〇四	同九十年	
一〇三	同九十一年	
一〇二	同九十二年	
一〇一	同九十三年	
一〇〇	同九十四年	
九九	同九十五年	
九八	同九十六年	
九七	同九十七年	
九六	同九十八年	
九五	同九十九年	
九四	同一百年	
九三	同一百零一年	
九二	同一百零二年	
九一	同一百零三年	
九〇	同一百零四年	
八九	同一百零五年	
八八	同一百零六年	
八七	同一百零七年	
八六	同一百零八年	
八五	同一百零九年	
八四	同一百一十年	
八三	同一百一十一年	
八二	同一百一十二年	
八一	同一百一十三年	
八〇	同一百一十四年	
七九	同一百一十五年	
七八	同一百一十六年	
七七	同一百一十七年	
七六	同一百一十八年	
七五	同一百一十九年	
七四	同一百二十年	
七三	同一百二十一年	
七二	同一百二十二年	
七一	同一百二十三年	
七〇	同一百二十四年	
六九	同一百二十五年	
六八	同一百二十六年	
六七	同一百二十七年	
六六	同一百二十八年	
六五	同一百二十九年	
六四	同一百三十年	
六三	同一百三十一年	
六二	同一百三十二年	
六一	同一百三十三年	
六〇	同一百三十四年	
五九	同一百三十五年	
五八	同一百三十六年	
五七	同一百三十七年	
五六	同一百三十八年	
五五	同一百三十九年	
五四	同一百四十年	
五三	同一百四十一年	
五二	同一百四十二年	
五一	同一百四十三年	
五〇	同一百四十四年	
四九	同一百四十五年	
四八	同一百四十六年	
四七	同一百四十七年	
四六	同一百四十八年	
四五	同一百四十九年	
四四	同一百五十年	
四三	同一百五十一年	
四二	同一百五十二年	
四一	同一百五十三年	
四〇	同一百五十四年	
三九	同一百五十五年	
三八	同一百五十六年	
三七	同一百五十七年	
三六	同一百五十八年	
三五	同一百五十九年	
三四	同一百六十年	
三三	同一百六十一年	
三二	同一百六十二年	
三一	同一百六十三年	
三〇	同一百六十四年	
二九	同一百六十五年	
二八	同一百六十六年	
二七	同一百六十七年	
二六	同一百六十八年	
二五	同一百六十九年	
二四	同一百七十年	
二三	同一百七十一年	
二二	同一百七十二年	
二一	同一百七十三年	
二〇	同一百七十四年	
一九	同一百七十五年	
一八	同一百七十六年	
一七	同一百七十七年	
一六	同一百七十八年	
一五	同一百七十九年	
一四	同一百八十年	
一三	同一百八十一年	
一二	同一百八十二年	
一一	同一百八十三年	
一〇	同一百八十四年	
〇九	同一百八十五年	
〇八	同一百八十六年	
〇七	同一百八十七年	
〇六	同一百八十八年	
〇五	同一百八十九年	
〇四	同一百九十年	
〇三	同一百九十一年	
〇二	同一百九十二年	
〇一	同一百九十三年	
〇〇	同一百九十四年	



小學國史教授法要説目次

現代的思索を重んぜよ……………	一五
感 激……………	一六七
史實とその背景……………	一六九
歴史と地圖との關係……………	一七〇
地圖を離れるな……………	一七三
史 眼……………	一七五
言葉の教授……………	一七八
自學主義と説話主義……………	一八〇
教科書……………	一八四

小學國史教授法要説

國史の教授法と一口に云つても、論すべき問題は澤山ある。くり返しむし返し書く日になれば、三百頁や五百頁の書物はすぐ出来る。併しさうした教授法の書物といふものは、已に世間に澤山あるから、又一通りの経験ある人たちにとつては、そんなものをゆつくり落付いて讀む暇もないことであらうから、そして又本書の使命の上から云つても、手取り早く簡單で明瞭で、讀まなくても見ればすぐわかるといふ風でありたいから、ここでは極めて重要なことのみを、極めて簡潔に述べることとする。黙々として實行せんとする人にはこれで充分だと信ずる。たと教授法について理窟でも云ひ度い人は、須らく他の浩瀚なる書物について研究せられたい。

現代的思索を重んぜよ

歴史は過去である。併し過去を過去として教へることは國史教育の目的ではない。國體の概要を知らしめ、國民たるの志操を養ひ、兒童人格の完成に向つて進むのが目的であるから、國史によつて現



代の國民的自覺を得しめなくてはならぬ。現在は過去の集積である。過去を知れば現在がわかる筈であるし、現在を知るためには是非とも過去を明かにせねばならぬ。所謂古きを温ねて新しきを知るのである。現代に没交渉に、たゞ歴史を過去としてのみ眺めるならば、それは骨董愛玩と同一で吾人の生活には殆ど益なきものである。

現在を過去の集積と見、歴史を現代の一要素と見ること、これを歴史の現代的思索といふ。昔の人がかくしたが故に、現在がこの様になつた。和氣清麻呂の精忠のために、源頼朝の政權掌握のために、現代のわが生活が展開したのであると考へなくてはならぬ。而してこの考へは、更に未來に向つて延びねばならぬ。現代がかくの通りであるが故に、將來はかうなるであらうと推測し、將來をより美しくより善くするためには、現代に於て如何になすべきであるかを考へる。即ち過去の事實を現在に置きかへて、昔はかうであつたが、現在ならばかうあるべきで、自分ならば必ずかうするだらう。さうしたら將來がかうなるであらうといふ様に考へる。これが現代的思索の要點である。

かうあつてこそ歴史が死物にならぬ。過去が現代に生きる。生きてさうして未來創造の原動力となる。過去を知らしめることが決して歴史教授の目的ではない。過去を現代的に思索觀照し、これによつて現在の生活を充實し、且將來の理想を完成することが國史教育の眞目的である。

### 感 激

感激なき國民は亡ぶ。感激は實に人間行爲の原動力である。如何によいことを知つてゐても、感激がなければ實行されるものではない。たとひ實行されてもそれは極めて無力なものである。力強い實行はひとり感激の拍車によつてのみ迸り出るものである。

國體の概要を知らしめること、それは勿論國史教育の主目的である。併し知らただけで果して何の役に立つか、知ることには必ずしも行ふことでない。如何にわれ等の祖先のやつて來た國體擁護の事蹟を知つても、これにならつて自分も實行しようといふ堅い決心が出來ない以上は、知らないのも同様であり、時として知らないよりも一層わるい結果を來すものである。今日わが國民の中に左翼へ走るものゝあるのは歎はしいことであるが、彼等とて決してわが國體を知らないのでは無い。否寧ろ知り抜いて居て、而もこれに反逆を企てようとするのである。

それは何故か、志操が出來てゐないからである。國民たるの志操が缺けてゐるからである。志操が缺けて居るから、眞の日本の國民では無い。形ばかりは日本人でも魂はロシヤ人になつてゐるのである。實にこの國民志操の養成、これが國史教育の一主目的であることを忘れてはならぬ。



教則には國體の概要を知らしめることを第一に置いて、兼ねて國民たるの志操を養へと云つてあるが、これを以て志操の養成を副目的だとか、第二次的の目的だと考へてはならぬ。志操の養成は情意の陶冶であり、知らしめること、共に第一義的のものである。兼ねて云々とあるのは、同時にの意味であつて、決して二者に前後主副の差別があるわけは無い。

感激とは實にこの情意の陶冶され鍛錬される時の状態を云ふものである。われ等の祖先の擁護し來つた國體の精華、それを知ると同時に祖先の行爲に深く感激する時こそ、純真なる感情と強烈なる意志の涵養される時である。感激なき國史の教育は、魂なき泥人形の製作と選ぶところは無い。

併しながら感激とは、ただ泣いたり笑つたりすることでは無い。身ぶり手ぶりをたつぷり入れてどつと笑はせ、わつと泣かせたとて、それで感激せしめたと考へたら大きな誤である。浪花節や講談には人を感激させる力は乏しい。感激は正しくして確かなる知識の上に立ち、眞面目にして謙虚なる心の中に宿る、一生忘れ難き強烈にして深刻なものである。必ずしも涙は出なくても、齒は喰ひしげらなくても、心の底に強く植を付けられた感激の芽は、他日必ず生長して偉大な精神の原動力となるものである。

### 史實とその背景

世に皮相の觀察といふ言葉がある。事實をただあるがまゝの形に於て見てとることをいふ。その奥底を流れる精神、その裏面に動く手、その周囲をとりまく壓力なるものを忘れては、事實の眞相を明かにすることは出来ぬ。

凡そ人間の行爲といふものは、その人の精神力によつて遂行されることは勿論であるが、そこには必ず環境の制限といふことがある。いくら人間の意志は自由でも、自然環境及び社會環境はその人間の自由意志を束縛して、一定の限界内に於てのみ動作せしめる。決してその人個人の無限の自由なるものは許されるものではない。これを史實の背景といふ。

和氣清麻呂の忠誠は勿論その崇高なる人格から出てゐる。至誠をこめた清麻呂の眼には神の姿もあらはれたであらう。又その嚴かな神の聲も聞えたであらう。併しながら一面には、この清麻呂を支持する力強い背景のあつたことを考へねばならぬ。清麻呂の出發に先つて『道鏡若し天位に登らば、吾何の面目あつてその臣下とならん』と云つた友達もあつた。道鏡の驕慢を憤慨したもの、ひとり清麻呂のみではなかつた。それ故に彼は大隅に流されても、多くの人の後援によつて何不自由なく暮すこ



とが出来たし、時機が来たら直ちに呼び還されて冤罪はすゝがれた。だから若し清麻呂が軟骨漢であつたとしても、第二第三の清麻呂が出て必ず國體を擁護したであらう。それが當時の世相であり、清麻呂に對する強き社會環境であつたのだ。

國史にはただ少數の人物のみが活躍してゐる様であるが、それ等の人物の背景といふものが夫々大きなものであつたことを考へねばならぬ。勿論古代と現代とは社會の事情が違ふから、昔は英雄や偉人が一世をリードしたといふ様なこともあつたが、それかと云つて國民の全部が無智文盲で、ただ少數偉人のなすがまゝに動いて居たとのみ考へるのも誤つてゐる。古代には古代の社會環境といふものがあつた。それは今日とは社會組織が違つて居たり、文化の程度が低かつたり、人口密度が小であつた等の相違はあつたとしても、やはり一種の力となつて、當時の人々の行動に干渉し聯關し制限し影響して居たことは間違ひないことである。

### 歴史と地理との關係

歴史が現代を理解するためのものであるならば、地理とその對稱を等しくすると云はねばならぬ。何となれば地理は現在の人間生活を對稱とし、これを究明せんとするものであるからである。

歴史と地理とはかういふ意味で密接に關係する。地理は現代を現代のまゝに理解せんとし、歴史は現代を過去の集積と見て、これを経過の上から判斷せんとする。地理は横に廣く世界の各地を見て、如何なる環境の下に如何なる生活が展開してゐるかを考へ、歴史は遠い過去から現在に亘つて、人間が如何に環境に順應しつゝその文化を發展させて來たかを見る。彼は横の研究であり、これは縦の研究であるが、目ざす處は同一の現代生活そのものである。

人間の活動様式が地域によつて相違するのは、第一に自然環境が異なり、第二に社會環境が相違し、第三に文化の程度が違ひ、第四に民族性を異にするからである。同一の民族で同一の文化段階にあつて、同一の環境内に生活してゐるならば、その生活様式は必ず同一であるべきで、若しも相違があるとしたら、それは人間の自由意志によつて、或範圍内に限られたる大同の中の少異に過ぎないものである。

これは地理學的な考へ方であるが、歴史といふものについて考へて見ると、同一の民族が昔から今日まで色々の違つた生活をして來た理由は、第一に社會環境といふものが變つてゐるし、第二に文化の程度が次第に向上發展して來てゐるし、第三に自然環境と雖も亦多少の變化があつたと推測し得られ、第四に民族性にも多少の變化が認められるかも知れず、而して最後に人間の自由意志によつて或



程度の特異事實が現出したこと、思はれる。

そこで今日以後のわれ等の生活は如何にあるべきか、如何にすべきであるかといふことは、これを地理の方面から云へば、世界各地に於ける、人間の環境に對する順應の様式を見て、これを吾人の場合に應用し、この環境とこの文化程度に於て、一層巧妙にして賢明なる順應の仕方はどうであるかを判断するのであり、これを歴史の方面から考へるときは、われ等の祖先がなした業蹟の上から教訓を得て、今後に於ける文化の發展に貢献するには、今日以後の環境の中にあつて如何にわれ等の自由意志を働かすべきかを學ぶのである。

地理も歴史も共に生活指導の學問であり、現代を正しく理會して、將來の生活に指針を與へるものである點に、兩者の密接不離なる關聯を見出すのである。

武田信玄が兵を信濃に出したのは、ただ京都に上る通路を求めたのみであつて、決して越後の上杉を亡ぼす目的ではなかつた。赤石・木曾の兩山脈は南北に走つて甲斐の西方を限り、信濃に出るより外に上洛の道が無かつたからで、それは今日鐵道中央線が甲斐から信濃を経て木曾谷に下つてゐると同じ理由であり、將來とても亦この事情は永久に不變なるべき筈である。中央線を教へるときには武田信玄を思ひ出させ、信玄を教授するときには今日の鐵道系統を顧みさせる、そこに地理と國史と

兩科の握手を見ることが出来る。

### 地圖を離れるな

地圖を離れた國史の教授は、空中の樓閣と云つた感じを與へる。江戸が、京都が、蝦夷が、能襲がと云つても、全然地圖を示さないうで教授を進めて行く人がある。教へる人の方では自分の頭の中に地圖を描きつゝ話して居るのであらうけれども、兒童の頭はそこまで進んでは居ないから、飛んでもないことを思ひ浮べつゝ聞いて居るかも知れぬ。昔は地理でさへも地圖を離れて教へて居た。況や歴史に於ておや。そして、そんな授業を受けて居た時のことを思ひ起すと、實に思ひ半ばに過ぐるものがある。

人は地上に生活する。地を離れて人は無い。故に地圖を離れた歴史は空中の樓閣であり、夢の様なものである。地圖を見ないでは日本武尊の勞苦もわからなければ、信長が天下を統一せんとするに至つた理由も了解に苦しむ。教則には『成るべく圖書・地圖・標本等を示して、兒童をして當時の實狀を想像し易からしめ』よと云つてあるが、圖書や標本は得難いとしても、地圖はさほど困難ではないから、成るべくどころか必ず示して教授しなければならぬものと思ふ。



地圖だつて得難いといふかも知れぬ。それは所謂歴史地圖なるものは、掛圖としてあまり得易くないけれども、現代の地圖ならば無い學校はあるまいと思ふ。日本全圖や地方圖の外に、もつと小區域の廓大圖を必要とする場合もあるが、それは略圖を描いて示す程度でもよい。出來得れば京都・奈良・鎌倉・江戸などいふ處は、古今對照の地圖を作つて置きたいものである。

教科書の中にも可成り多くの地圖があるが、これを活用する人の少ないのは遺憾である。説話の間には教科書を開かせないで、時間の終頃の整理の段になつてから、急に教科書を開いて見させて、その中に鐘でも鳴ると、『あとでゆつくり見て置け』程度に葬つたり、時には地圖に一言も及ばなかつたりする教授を見ることもある。寶の持ち腐れである。

教科書中の地圖には随分不完全なものもある。例へば尋六の一三〇頁にある『明治三十七八年戰役要地圖』の如き、遼陽から奉天までの間、わが全軍が悉く一本の鐵道に沿ふて進軍したかの様に見える、五十萬の大軍が百軒に亘る大戰線を張つた模様はちつともわからない。これなどは寧ろ地名のみを示してあつた方が無害である。

教師の示す地圖は歴史地圖でなくてもよい、殊に廣面積に亘る一般圖は現代の地圖そのまゝがよい。それも成るべく地勢を示したものがよい。地勢は大體に於て今も昔も變らない。そして人間の生活に

は最も大きな影響を及ぼすものゝ一つである。史實と地勢の關係は、現代を知り未來を測るためには殊の外大きな役割をもつものである。

本書の卷末に二三の略圖を示したのは、教科書には無いが、是非兒童には見せたいと思ふものを、参考のために出したのである。

### 史 眼

歴史の事實に對して穩健中正なる批判を下し得る力、これを名づけて史眼といふ。史眼を養ふといふことは非常に困難なことで、専門の歴史家でなくては出來ないことであるが、併し兒童にはその程度に應じた史眼といふものを供へさせるやうに指導して行かねばならぬ。

一體史實といふものは、已に過去に於て終了したことなのだから、千古不變なものであつて、何人と雖もこれを修正することは出來ないが、これを如何に解釋し批判するかは、その人の個性とその時代の思想とによつて著しく違つて來るもので、或時代の或人たちに云はせると、大極殿で大切な儀式の最中に入鹿を刺した中大兄皇子は不都合極まる行爲をしたものであり、或は足利尊氏が忠臣で楠木正成が却つて逆臣であつたことになる。それ故に現代に於てはこれを現代の思想によつて判斷しなけ



ればならない。随つて又現代を正しく且深く理解してゐることが必要であるから、益々以てむづかしいことになる。

現代を理解すると同時に、過去を正しく理解しなければならぬ。その史實の起つた當時に於ける諸般の事情、背景、環境、當時の人たちの心的生活、さうしたことを各種の史料によつて推測しなければならぬ。児童が歴史の話を聞いた時には、すぐに現在の自分の生活を引きあて、考へるから、そこに著しい認識の不足を來す。それが今から百年前だ、千年前だと云つたところで、僅か五年か七年かの短い心的經歷しか有しない児童には、容易に理會のされるものではない。

それ故に史眼の養成は困難であるが、併し史實に對して何等の批評も判断も下さないならば、國史教育の價値は無くなる。こゝに於てか教科書中處々に正邪善惡の批判が下してある。平重盛の處には『まことに忠孝の道を全ふした人』だと云ひ、北條義時の條では『無道こゝに至りて極まれり』と斷じ、新井白石は『友情に厚き人』だと賞めてゐる。

ところでかうした批判を教科書の著者の言葉として、若くは教師の史觀として児童に押し賣りしたのでは、児童の史眼の開ける望みはなく、史實の教育的價値はゼロに歸してしまふ。どうしてもこゝは児童自身の心の燃焼より發生せしめるやうに、児童の生命のほとばしりが、教科書によつて裏書せ

られ、教師によつて保證せられて行くやうに指導しなければならぬ。

史實の批判について今一つの注意すべきことは、一人物に長所と短所、美點と缺點とを併せ有する場合である。楠木正成とか藤原鎌足とかいふ様に、終始一貫した性格と事蹟のみ傳へてあるものはよいが、源頼朝・徳川家康・西郷隆盛などに至つては一言でその人物を批判し盡すことは出來ぬ。總量に於て功罪何れが多いかと云つたところで、秤にかけて見るわけには行かぬ。善に強いものは惡にも強いといふ場合がある。善の方面からは學ぶべき事を發見し、惡の方面からは顧みて反省の材料を得るやうにしなければならぬ。勿論善行があつたからとて、それによつてその人の罪惡が償はれるわけのものではないが、一片の感情にとらはれて、惡事を罵倒せんとして善事の方面を軽く見たり、善事を稱揚するに急なるため、惡の方面を蔽ひかくすやうなことであつては、正しい批判と稱することは出來ぬ。

足利義滿は驕奢であつた、僭上の行も多かつた。明に對しては臣禮をとつてわが國體をないがしろにした。併し一面に吉野朝廷の還幸を願つて多年の兵亂を收め、明と貿易を行つて國の財力を増した等の功績は沒することが出來ぬ。かういふ點には特に注意しないと、児童は感情に驅られ易く、單なる好き嫌ひで評價し去らうとする傾向が強いから、指導上最も注意しなければならぬ。道徳的立場、



經濟的立場、社會的立場、政治的立場など、その人物なり事件なりに對して種々の視角から眺めて正しい批判を下さしめ、それによつて教訓を得るやうに仕向けてこそ、始めて正しい史眼の養成が出来るといふものである。

### 言葉の教授

教科書には随分むづかしい言葉がある。尋五の最初から萬民だの皇位だの、國をさめたの舟いくさをひきわたの、日常にはあまり使用しない言葉が續出してゐる。殊に、薨すとか卒すとか、弑すとか平げとか、歴史の書物以外ではまづあまり見かけない様な言葉も多い。又攝政とか領地とか大臣・某などの様に、今日用ふる所とは全然その意義内容を異にしてゐるものもある。

これ等は云はば歴史學上の術語である。これを知らなければ歴史を理解するに困難であるし、これを發表するにも不自由である。随つて是非ともこれは充分にその内容を理解せしめて自由に使ひこなせるやうにしなければならぬ。勿論教科書にあるだけで、已に兒童にとつては重すぎるほどの負擔であるから、これ以上に附加して授けることは絶対に避くべきであらう。

ところが教師は時としてこれを非常に輕じて、周密叮嚀に指導しないことがある。そんなになく

ても兒童には了解されてゐるやうに思つたり、そんな用語の末にかゝわつて居ては、大切な授業の邪魔になると考へたり、或は言葉の教授は國語科に譲るべきだと思つたりする。

凡そ國語といふものは單に國語科にのみ委すべきものではなくて、凡ての教科に於て教授すべきものである。言語を伴はない觀念は無く、言葉の無い處に知識は無い。言葉を離れて内容のみを教授するといふことは出来ない相談であり、觀念が増せば語彙は増加するのが當然である。故にどの教科に於ても言葉の教授といふことを忘れてはならぬ。それがために國史科の授業が國語科と紛はしいものになつたからとて、決して恐れるにも心配するにも當らない。

例へば舟いくさと云へばどんなものであるかといふことを説明したならば、くり返してこれを兒童にも解説させ、又史實を云はしめる場合にも成るべくその言葉を使用させるやうにせねばならぬ。舟いくさと云へば、舟に乗つた軍隊といふことで、現今の海軍と同一でもなく、又必ずしも陸軍の兵を運送船に乗せたものと同一視するわけにも行かぬ。やはり舟いくさは舟いくさと云つた方が最も實際によくあてはまるのであるから、苦しんで他の語に置きかへる必要は無い。

又律令だとか行宮だとか公卿だとかいふ様な語に至つては、その文字も併せて記憶せしめねばならぬ。むづかしい文字は書くことまでは出来ないにしても、せめて讀むだけは讀めるやうにして置く必



要がある。こんなことは到底國語科に譲つておける仕事ではない。

### 自學主義と説話主義

國史教授の方法に二つの傾向がある。兒童の活動を主とする自學主義と、教師が中心となつて活動する説話主義とである。學習指導法とか、プロジェクトメソッドとか、作業主義とかいふのは概ね前者に屬し、兒童の筋肉活動を重んじ、肉によつて體驗せしめようとする。これに對して後者は兒童を比較的受身の地位に置いて、巧妙なる説話によつて國史教育の目的を達しようとするのである。

この二つの傾向は又國史教育の目的觀に於て互に異なる立場に立つ。即ち一は知らしめることに重きを置く理知主義で、一は感せしめることを主とする感銘主義である。併し前にも述べたやうに、知らせることゝ感ぜさせることは、共に同等に必要なことであつて、一方を重く他方を軽く考へるべきものでは無いから、この二つの主義は何れがよいとも云ふことが出来ぬ。

そこで二つの中間を行く方法として問答法或は問題法と名づくる方法を主張する人もある。自學せしめる部分は自學せしめ、説話を要する部分は説話し、兒童と教師の分野をはつきりさせて、相互に扶助し補缺して行かうといふのである。問答と云つても一問一答ではなくて、比較的廣範圍の問を掲

げ、それに對して兒童の活動によつて多くの答を提出せしめ、これを綜合し補足しつゝ、教師が説話するのである。

併しどの方法が最も優れてゐるかは一概に決定し難い。兒童の素質や程度にもより、教師の個性にもより、その時の環境にもよることであり、殊に教材の性質によつても方法に變化がなくてはならぬ。一題目について或時間には自學的に、或時間には説話的にやらねばならぬ場合もあらう。同一時間内に於て或部分を自學的に、或部分を説話的にやるのが、問題法又は問答法と名づけられるものなのである。

自學主義でやらうと思へば第一に教科書がむづかしすぎる。むづかしい上に簡單で抽象的である。これではたとひよく讀めても疑問が續々として湧いて來て、その解決は決して容易でない。例へば尋五の開卷第一に『たび／＼あらあらしき行』があつたといふが、一體どんな荒々しいことをせられたのか、『機屋をけがされ』たとはどんなことをせられたのか、古事記や日本書紀を開いたところで兒童に讀めるものではなし、『神代の話』とか何とかいふ様な兒童向の書物でも備へて居ない限り、疑問は永久の疑問となり、教師の説話を仰がなければ解決の道は無い。

ところで兒童向の参考書といふものが決して豊富でない。ほんとに兒童の讀物として都合のよいや



うなものは、教材に即して居ないから必要な事項を見出すのに困難である。楠木正成や豊臣秀吉が各々一冊の書物になつてゐて數百頁もある様では、課外讀物としては兎も角も自學の参考には不適當である。而もこれ等は其の價が高いから、十學級に數冊備へることさへ經濟的に困難である。

教科書に即したものとすれば、受験準備をあれこれの學習書とか解説書とかの類が多い。併しそれ等の多くは極めてむづかしい文章で非常に高尚なことや複雑なことが書き列ねてあり、徒らに兒童の負擔を増すばかりで益する處は更でない。これ等は思ふに小學校兒童の實際を知らない人の筆になるか、少くとも國史教育に一見識を持つて居る人でないことだけは確かと思はれる。

教科書に出てゐる材料だけを取扱つて、その他の事項をあまり入れないやうに、そしてそれを一層詳しく具體的に、而も兒童に親しめるやさしい文章で、あかす讀み耽られるやうにして、その上必要な事項はすぐ引き出すことの出来るやうな索引を備へた、そんな參考書がせめて十冊内外で完結するやうになつて居たら、自學的取扱ひには便利の上もないであらう。(自分は今さうした參考書の記稿を思ひ立つて居る。或は近い將來に實現し得るかも知れない。)

併し教科書が如何によくなつても、參考書のよいものが澤山あつても、それによつて感銘させることは随分困難である。われ／＼は小學校で日本外史を讀ませられて、強い感銘を體驗したものである

が、今日の尋常小學の兒童には日本外史は難解であり、やさしくてあれに劣らぬ名文は今の處では見當らない。結局教師の説話によつて感銘せしめるの外は無い。

説話法だからとて兒童が必ずしも受動的だとは限らない。形の上では受動的に見えても内心は大に躍動してゐる場合がある。さうした時にそれは決して注入教授では無いのである。ただ説話があまり巧妙になり過ぎて、浪花節や講談と選ばなくなつたり、徹頭徹尾説話ばかりで、兒童の發展本能を押しつけたら、簡単な梗概的事實をも教科書で下調することを封じたり、史實批判の指導を怠つて、教師の批判を無理強ひしたりしてはならぬ。そんなのは説話主義の教授ではなくて、單なる説話そのものでしか無いのである。

先づ教科書の文章を充分に理解させ、次に巧妙なる説話によつて感銘を與へ、最後に批判の指導をする。これが大體に於て穩健なる方法であると思ふ。そこで一課の教材を數個に區分して、その一つ一つについて一時間毎にこの方法を繰り返すか、それとも全課に亘つて主として文章の理解に一時間、それから説話に一時間、批判を中心に一時間といった様な方法によるか、そこは教材の性質によつて工夫すべきであらう。

尙作業を課するといふことも頗るよいことである。表解・年表・圖表・歴史地圖・繪畫の作製、感想録